

---

# **三兄弟の事件簿2 ~あの世からのメール~**

愛田美月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三兄弟の事件簿2 ～あの世からのメール～

### 【NZコード】

N8738K

### 【作者名】

愛田美月

### 【あらすじ】

高橋空。紫藤海。春名光は三つ子の兄弟。早くに親を亡くして、それぞれ別の家に引き取られている。

同じ高校に入った彼らに、夏休みが訪れた。『宿題を早く終わらせて遊びまくろう計画』を実行しているさなか。

海が、妙な相談を持ちかけられる。それは『死人からメールがくる』という内容で？！＊＊完結しました＊＊

## プロローグ

なぜ？

どうして？

そんな言葉が頭を過ぎる。

いつも、いつも。  
繰り返される問い。

なぜ、あなたは死んでしまったのだろう。  
なぜ、未来を見ようとしなかったのだろう。

あなたが大切だったのに。

あなたのことをこんなに思っているのに。

そんな人間がいることを。

どうして、あなたは忘れてしまったのだろう。  
どうして、気づかなかつたのだろう。

例え、離れ離れでも。

あなたが生きている。  
それだけで、よかつたのに……。

そう思う人間が、ここにいるのに。

## 第一章 暑くて、熱い

彼の前で揺れる足。

力なく垂れた腕。

開いた口、虚ろな目。

生氣のない彼女に触ると、彼女の体は、ふつこのよつて揺れた。

夏である。

一週間ほど前に梅雨があけると、途端に蝉の鳴く声が聞こえてくるようになった。日中、ひつきりなしに響くその鳴き声は、暑さをより一層増徴させているような気がしてならない。

昼の十一時を過ぎた。まだまだ、気温は上がるだろ。

そう思い、高橋空はテーブルの上に開いたまま、まだ一行も田を通していない数学の教科書を閉じる。そして、大声を上げた。

「ダメだー。暑い。暑くて死ぬ。溶けそう」

そう言って、持っていたシャーペンを机の上に乱暴に放り投げた。そのまま机に突っ伏す。額の汗が、流れた。

「暑い暑いって言つくなやー。よけい暑くなるつちゅうねん」

関西弁でそう空に話しかけたのは、最近血の繋がった兄弟であると分かつた紫藤海しづかだ。海は空の机を挟んだ向かい側で、胡坐をかけて座っている。彼の前にも、教科書とノートが広げられていた。

海の顔立ちは空と余り似ていない。下手をすると少女にしか見えない可愛らしい顔の空に比べ、海はどこからどうみても男だ。秀麗な顔立ちといつてもいいが、顔立ちよりも、いたずらっ子のような雰囲気が際立っていた。似ているところといえば、髪と田の色が、茶色味がかっていることくらいだろうか。

「あー、こんな暑くつちゃ、勉強なんてはからへんわー」

そう言いながら、一人の横で首振り運動を続けている扇風機を掴んだ。そのまま扇風機を抱き込んでしまう。首振り運動を阻止された扇風機は、抗議するかのように妙な音をたてた。

「あ、バカ。何やつてんだよ。壊れるだろ？」「

扇風機の抗議の声を聞きつけて顔をあげた空は、慌てて海の頭を叩いて扇風機から引き剥がした。そんな空を上目づかいで見上げて、海は唇を尖らせた。

「だつて、暑いねんもん」

「悪かつたな。クーラーなくて。おまえがバカなことするから、よけい暑くなつただろ」「

「うつわ。人のせいにしたらあかんで空ー。つて、そんなことより、暑い。あー無理。マジ無理。もつあかん」

言しながら、海は畳の上に寝転んだ。空も机を避けて、同じようくに寝転ぶ。畠の上は少し冷たくて、気持ちがいい。

空の家は商店街の真ん中辺りにある。高橋ブック店といつ頃の本屋で、一階のほとんどが店舗になつていて。裏庭に面した二階のこの部屋が、空の部屋としてあてがわれていた。窓から、蝉の声と、遠く商店街の喧騒が入つてくる。

その他に入つてくるものといえば、たまに吹く熱気をおびた風だけだ。とてもその風で、涼をとることはできない。

「どうする？ 図書館行く？」

空は天井を見ながら、聞いてみた。図書館は静で、何より空調がきいていて勉強にはもつてこいだ。だが、言つた本人が乗り気ではないせいか、相手の反応もいまいちだった。

「でも、動ぐの暑いし」

「だよな」

空は緩慢な動作で、身体の向きを変え、海を見た。

「なあ、あいつと最近連絡取つた？」

その言葉に、海が寝転んだまま、顔を空の方へ向けた。

「あいつって、光のことか？」

空は無言で頷いた。光も海と同じで最近血の繋がった兄弟だと判明した人物だ。三人は同じ高校に通っている。

海は腕を使って半身を起こした。

「連絡取ってへんっていうか。取られへん」

「やっぱり？ ケータイにかけても留守電なんだよ。家にかけても家政婦さんに、出かけてますって言われるし」

空は言いながら、海と同じように半身を起こす。空は、可愛らしく整つた顔を思いつきりよく覗めた。

そんな空に、海は苦笑いをして見せる。

「俺もだいたい同じや。あれは、確実に居留守やろ」

「でも、何でそんなことすんのか分かんねーんだよな。俺たちに会いたくないってことか？」

空は言いながら、悲しくなつてくる。

高校に入学して、光や海と知り合つてから、色々とあつた。互いが兄弟だということが分かつた事も然り、それ以外にも。心に痛いことがたくさん。たくさんあつた。でも、それを三人で乗り越えてきたのだ。少なくとも、空はそう思つている。

先日。三人の本当の両親の墓参りに行つた時。光は自分の中にいる思いを空たちにぶつけた。あの時、空は光に近づけたと思つた。ずっと、壁を作つていた光に近づけたと。だが、そう思つたのは間違つたのだろうか。

「確かめよう」

不意に、海の言葉が耳に入つて、空はいつの間にか俯けていた顔を上げた。自分の思考に没頭してしまつっていたようだ。

「ひつなつたら、直接会いに行こいや。電話やなくて」

そう言つが早いが、海は立ち上がる。

「えつ、でも。動くの暑いって言つたくせに」

「動かんでも暑いやん。ここで、手付かずの宿題を前に暑い暑いつ

て言つても仕方ないし。それやつたら実のあることをせな  
言いながら、海は教科書を鞄にしまつと、さつさと部屋を出て行  
こうとする。

空は慌てて立ち上がり、足の親指をつかって扇風機の切ボタンを  
押すと、テーブルに置いた教科書などはそのままに、海を追つて部  
屋を出た。

外はこれでもかというほど日が照りつけ、アスファルトの熱を上  
げていた。遠く道の先を見れば、空気がゆらゆらと揺れているよう  
に見える。陽炎だ。

商店街を抜けて五分ほど歩いた所にある駅についた。空は、駅構  
内で携帯電話を耳にあて通話をしている海の横に立つて、電話が終  
わるのを待つっていた。

「やっぱり、家にはおらんつて。今日は病院に行つとるらしい」

海が通話を終えた折りたたみ式の携帯電話を折り、持っていた鞄  
にしまう。それを目で追つてから、空は口を開いた。

「病院、行つてみる？ 家に押しかけても会つてくれるか分かんね  
ーし」

その言葉に、海は同意を示した。

海が抜かりなく電話でた家政婦に病院の場所を聞いていたおかげで、さして迷うことなく、病院に着いた。

病院の入り口が見えるところで、立ち止まって、二人は顔を見合  
わせる。

お互い汗だくだ。

空は、襟元を掴んで前後に動かし服の中に風をおくつてみる。し

かし、たいして涼しくはならなかつた。

「さて、どうする？」

「とりあえず、中入るうや。暑つて死にそいや」

海が病院の入り口を指差すので、空は何も言わず頷いた。  
ここまで来たは良いが、この後どうするかを考えていなかつた。  
光がどこの課を受診しているのか分からぬ。しらみつぶしに捜すことも考えたが、行き違いになる可能性も高い。

入り口を見張るのが一番いい方法かもしねないが、いかんせん暑い。とにかく、暑い。日射病にでもなりそうだ。

自動ドアの向こうには涼しい空間が待つてゐる。そう思つて、自然と足の運びも速まる。

「あ、光」

海が突如立ち止まつて声を上げた。驚いて、空も立ち止まる。海はまつすぐ先を指差した。

海が指示示す方を田で追うと、空たちが捜そうとしていた人物、  
はんなじゅう春名光はながいた。

光は、眼鏡の奥の瞳を見開いた。確實に目が合つた。  
だが、光は踵を返すと、足を引きするようにしながら、病院内へ入つて行くのだ。

その、どこか慌てたような素振りに、空と海は顔を見合わせる。  
お互ひの顔に、不満の色を見て取つた一人は、歪んだ笑みを浮かべた。

「今、明らかに俺たちを避けたよな。あいつ」

「ああ、同感や。空、追うで」

海の声を合図に、一人は暑さも忘れて走り出した。自動ドアが開くのももどかしく、空たちは病院内に入る。院内を見回して、廊下の角を曲がる光の背を見つけた。

二人は再び走り出す。

廊下の角を曲がつた光が、トイレに入ろうとした時、空が光の肩を掴んだ。

その瞬間、震えが手に伝わった。さつと、急に肩を掴まれ驚いたのだ。だが、そんなことは構わない。空は肩を掴んだまま、光をトイレへ押し込んだ。

幸いとでもいうべきか、トイレには誰もいなかつた。個室のドアも全て開いている。

「痛いな、離せよ

光は、荒々しい口調でそう言つて、肩を掴んでいた空の手を放つた。

空は扱われた手をさすりながら、光を睨みつける。

一週間ぶりに見る光の顔は、一週間前と変わらない。王子様然とした秀麗な顔立ち。その表情は、いつものポーカーフェイスだつた。「何でこんなところにいるんだ。おまえら」

光が吐き捨てるよつとぞづつ言つた。視線は、トイレの床に向いている。

空はそんな光の様子を、目を細めて見ながら、口を開く。

「いや悪いのかよ。ここは病院だぜ？」

わざと語尾を上げて言つてやる。

「そうや、それとも、ここに俺らが来たまよいことでもあるんか？」

光

海が追従するように「そう言つが、光は答えなかつた。相変わらず、空たちと田を呑わせようとしたしない。

「何で逃げたんだよ」

ずばりと聞いてやると、光がちらりとこちらに目を向けた。

「別に、逃げてないよ」

光の突き放すような言葉に、空は切れた。

「てつめー、嘘ついてんじやねえよ。明らか、俺らの顔見て逃げたじゃねーかよ」

空は、光のシャツの胸倉を掴んで激しく揺さぶる。

海はそんな空を慌てて後から羽交い絞めにして、光から引き剥がした。

「どうどう、空。ちよつと落ち着こいつや  
「どうどうておまえ。俺は馬じやねえ」

切れた勢いのまま、空は海に怒鳴った。

「……かしかつたんだよ」

光の声が聞こえた気がして、空と海は顔を光に向かえた。

「今何て?」

一人の声が重なった。

「だから」

光は言ひよどむ。

「だから?」

また、一人の声が重なった。

「だから、恥ずかしかつたんだよ」

半ば怒鳴るようにそう言つた光の顔が、目に見えるほど赤くなつた。光は慌てた様に、一人から顔を背ける。

そんな光に、空と海はしばらく呆然と見入つた。  
どれ位時間がたつただろう。海が羽交い絞めにしていた空を離しながら口を開く。

「えつと、何が恥ずかしいねん」

「そんな、恥ずかしがることなんてないだろ」

何かあつたつけど、空は記憶を辿るが何も思いつかない。光の恥ずかしいことつて何だろう。

「あ、もしかしておまえ、俺と空のどっちかに惚れたんか」  
大声を上げた海の言葉で、空は力が抜けた。きっとそれはありえない。そう思つたら、案の定、光が否定した。

「何で、そんな発想になるんだ」

ようやく常に近い顔色にもどつた光は、観念したように口を開いた。

「泣いただろ。この間」

言いながら、また顔を背ける。うつすらと背けた頬がまた赤くなつていてる。

「大泣きしたから、おまえらに合わせる顔がなかつたんだよ」

言われてやつと理解できた。先日、墓参りに行つた時のことと言つてゐるのか。空はそう思つて、海の顔を見た。海も空の顔を見る。そして、二人して噴出した。

「あははは。バッカじゃねーの」

「おま、何それ。俺おまえが照れるとこ初めて見たわ。めつさおもういやん」

海は笑いを堪えながら、そう言つたあと、また笑い出す。大声で笑いながら、手まで叩いている。

「何だよ。笑いすぎだよ。おまえら」

怒鳴る気力もないのか、光は疲れたようにそつもらす。空と海は、光が本氣で怒り出す前に、笑いをひつこめるよう、努力しなければならなかつた。

## 第一章 はじまりはメール

メール着信音が鳴った。

風呂上り、部屋のドアを開けた瞬間だつたので、そのタイミングに少し驚いた。

理沙だろうか？ それとも、この間理沙に紹介してもらつた男子校の彼だろうか。

そう思つて、由香は勉強机の上に置いていた携帯電話を手に取る。そして、新着メールを開いた。

息を飲む。

驚きに声も出なかつた。手が、震えた。ありえない。こんなこと、あるはずがない。

由香の目に映る携帯電話のディスプレーには、くるはずのない相手からのメールが映し出されていた。

『ユカ、元気についていた？ 私帰ってきたよ』

由香の足元に、携帯電話が落ちて転がつた。由香の手から滑り落ちたのだ。

しかし、由香はそれすらも気づかないように、ただ呆然とその場に立ち尽くしていた。

クーラーのきいた涼しい光の部屋で、高橋空は満足気な溜息をついた。

「はー。美味かつた」

それはもう、幸せそうな笑顔をつくる空に、隣にいた光が眼鏡の奥から呆れた目を向けた。

「おまえら、コレが目的で家に来てるだりつ」

光は空の前から、つい先ほどまでケーキがのつていた皿を取つてお盆に乗せる。

「つて、俺まで入れんといでや。ケーキが目的なんは空だけやで。俺は純粋にやな、光に数学教えてもらおうと思つて、お前の家に来てるんや」

海が抗議の声を上げた。そう言つた彼の前にも数学の教科書ではなく、少しケーキの残つた皿が置いてある。

「おい、海。俺だって、ちゃんと勉強しようと思つて来てるぜ。ただ、光の家に来るときーラーきてるし、必ずケーキくれるから楽しみだけど」

嘘のつけない空であった。

光は呆れたように溜息をつくと、からになつた海の皿を盆のせて、立ち上がつた。

「じゃあ、僕が帰つてくるまで」「三回終わらせとけよ」

そう言つて、光はドアを開けて部屋を出て行く。その背で、空と海のブーンイングの声がかかつたが、光は無反応を決め込んでいた。「ちえつ何だよ。先生みたいなこと言こやがつて」

「ま、宿題さつさと終わらせて、後半遊びまくらひ計画のためや。それもしゃあないんぢやつ」

「うーー

空が唸つたとき、大きなメロディーが部屋に響いた。

それが携帯電話の着信音だと気づいたのは、その携帯電話の持ち主だった。

「はいはい。誰やーー

気の抜けるような声で電話に出た海は、相手の言葉に耳を見張つた。

空は、そちらが気になつて問題集から、海に耳を移した。海はそんな空の様子を気にした風もなく、会話を続ける。

「えつ。風見？ ひつさじぶりやん。どないしたん？ うん。うん。

分かつた。じゃあ、明後日な」

通話を切つた海にすかさず空が話し掛ける。

「なあ、なあ。誰？女？」

空の表情は興味津々といった感じである。海はそんな空に意味深な笑みを見せた。

「当たり。女や」

空は海の答えに驚いた顔を向ける。

「な、な、な。か、か、彼女か！」

かなりどもりながらの空の問いに、海は笑顔を持続させながらしばらく黙り込んだ。

空が焦ってきたといひで、よつやく口を開く。

「違う。去年のクラスメートや。中学んときのダチ」

その答えに、空はあからさまに安堵の息をついた。

「やつぱりなー。そうだとthought。おまえに俺より早く彼女ができるわけないしな。海はお友達タイプだもんな」

嬉しそうに言つ空に、海は恨めしげな目を向ける。

「おまえ、それなんや酷ないか？」

空は、少し言いすぎたかと、失言を笑顔でごまかした。

「で、問題は解けたのか？」

空の背後にあるドアの方から、声が聞こえて、空は慌てて振り返つた。

「あははー」

空はペンを持ったままの手を、頭の後にやり、笑つてごまかした。

光の眼鏡の奥の瞳が、冷たくひかつたように空には見えた。

空と海は慌てたように、光の冷たい視線を避け、問題集に目を落とす。

そんな二人の耳に光の溜息が聞こえた。

「今更、やつているふりしても遅いだろ……」  
疲れたような声だった。

あらかた問題集を片付けた空たちは、この家のお手伝いさんが制服するためにと入れてくれたアイスティーを飲んでいた。そんなとき、空が思いついたように口を開いた。

「そういうやさ、さつきの電話なんだつたの？」

空の問いに、光は眉を軽く上げる。何のことだと思つたのだろう。

空は、さつき海の携帯電話に電話があつたことを伝えた。

「ああ、あれや。クラス会の会場が急に変わつたからそのお知らせや。明後日あんねん」

海の言葉に、空は目を見張る。

「えつ。大阪帰るの？」

「えつ、何で大阪やねん」

空の大声に合わせたのか、海の声も大きかつた。

「だつて、中学まで大阪に住んでたんだる」

空が言つと、海は手を横に振つた。

「ちやうちやう。俺、関西言つても住んでたん大阪とちやうし、中三にこいつ引つ越してきたから、今回のクラス会はこいつあんねん。ほんま、関東の人間は、関西つていうと大阪やつて思うんやからな」

少々機嫌を損ねたような声を出す海に、冷静な声音で光が話しかける。

「中三のときのクラス会か」

「そいやねん。中三のときのクラスは皆仲よかつたからな。久しぶりに全員集合やつて盛り上がつたみたいや」

海は嬉しそうに言つた。空は羨ましそうな顔を海に向ける。

「いいなー。俺んとこなんて、そんな話全くないぜ。明後日は家の手伝いだし」

「家の手伝いって何するんだ？」

光が少し興味を惹かれたように空を見た。空は片手の拳を口の前

に当て、少し考えるよにしてから、口を開く。

「うーん、色々。レジとか、品出しとか、あと伝票の計算とか」

「伝票の計算まするんや」

驚いた声を上げた海に、空は頷いた。

「そ。まあ、簡単なことしかしてないけど。そのうち俺が継ぐから、今からちょいちょい仕事覚えてるんだ」

そう言つと、なぜか海と光が驚いた顔をして、顔を見合せた。

「へー。ね、ちゃんと将来のこと考えてたんだな」

「予想に反して真面目やな。そんなん考えてるつて思つてもみいひんかつたわ」

感心する一人に、空は眉を顰めて見せた。

「おまえら、俺のこじょっとバカにしてないか？　いや、してるだろ」

聞いておいて断定した空に、海は言つ。

「バカにはしてへんよ。なあ光」

「いや、バカだとは思つてるけど……」

光はさらりとそんなことを言つて、少しづれてきた眼鏡を人差し指で押し上げた。

「ムキーフ。ムカつく」

空が光に向かって大声を上げた。

その大声に光が眉を寄せた。

「つるさい、そういう振る舞いがバカなんだ」

「つるさいのはそつちだ。バカつて言つ方がバカなんだぞ」

「おまえは小学生か」

「う、つるさい」

海は空と光の口喧嘩を聞きながら、こつそりと溜息をついた。

会つた時から、喧嘩をしていたこの二人は、仲良くなつた今もこうしてよく口喧嘩をしている。まったく、こりへん奴らやな。そう思つてまた溜息をついた。

もう少ししたら、仲裁に入ろう。そんなことを思いつつ、海は残

り少なくなったアイスティーを口に含んだ。

## 第三章 相談

坂崎第一中学校三年二組のクラス会は、幹事の親が経営しているというカラオケボックスで行われた。

飲み放題のドリンクに安価な食べ物が手に入るとあって、カラオケボックスは中々に手ごろだつたらしく、海の隣に座つた柏木が言った。

柏木は、引越ししてきた海に始めて話し掛けてくれた人物であり、今でも親交のある友人だ。昨年まで陸上部の部長だった柏木は、日に焼けた笑顔が可愛いと、実に女子生徒によくモテていた。

海は前のテーブルに置かれたフライドポテトを取つて、口に運びながら思う。

俺の周りは、なんでこの女子にモテるやつばかりなんやうつ、と。

「おーい。紫藤。何ぼうとしてんだよ」

思い切り背中を叩かれ、海は我に返つた。叩かれた背中がかなり痛い。

痛がる海を気にせず、柏木は白い歯を見せて笑つている。

「聞いてたか？　俺の質問」

喧騒の中、そう問い合わせてきたのは、海の正面に座る人物だった。こちらも友人、浅川だ。浅川は、黒ぶち眼鏡の奥の瞳を細めた。

「やつぱり、聞いてないだろ」

「聞いてなかつたな」

そう断定したのは、隣の席に座る柏木だ。

「えつと、『ごめん。なんの話やつたつけ？』

素直に謝ると、浅川はしうがねえなーと言いながら、もう一度さつき言つたであろう問いを口にした。

「三浦と風見が付き合つてゐるって、知つてたかつて聞いたんだよ

「えつ、それは知らんかったわ」

驚いて声を上げたが、マイクを通しての歌声と、周りのお喋りの声にまぎれた。

海はこつそりと風見を見た。一昨日、海にクラス会の場所変更を電話してくれた人物だ。よく見れば、その隣には三浦が座っている。三浦は幹事の一人で、このカラオケボックスを経営しているのは、彼の親だった。

三浦とは余り話したことがない。だからといって嫌いな訳でもなかつた。たんに三浦が無口だつただけだ。

一方、風見とは席が近いこともあり、よく話をしていた。彼女はお喋りで、明るい性格だったので、海も気兼ねなく話せた。

「俺、てつきり風見は紫藤とくつつくと思ってたのになー」

妙に残念そうな声が、浅川の口から漏れた。海はそれを聞きとがめる。

「え？ 何でやねん。俺と風見はそんな雰囲気全くなかったやん」

海の言葉を聞き、浅川と柏木はそろつて首を横に振つた。

「いやいや。アレはもう付き合つているとしか思えなかつたよ」

「そうそう。授業中も『カイ声』で喋りすぎて怒られてたじやないか。おまえら」

二人に言われて、そういうえばそんなこともあつたなと思ひだす。

その時、噂の風見が立ち上がって、こちらに近寄つてきた。柏木の前を窮屈そうに通り過ぎると、海の横に立つ。柏木が氣を利かせてか、少し横にずれた。

風見を見上げ、相変わらず氣の強そうな顔立ちだと思う。風見の顔立ちは美人と言つて差し障りはないが、海の好みではなかつた。

「よつ。紫藤。久しぶりー」

片手を挙げて笑顔をつくる風見に、海も笑顔を返す。

「おっす。久しぶりやな。彼氏はいいんか？」

そう言つて、風見越しに三浦を見るが、三浦はこちらを気にした風もなく、隣にいる男子と笑顔で会話している。

「大丈夫よ。英志はそんなことで怒らないもん。っていうか、うち

らが付き合つてゐるって誰に聞いたのよ」

海は浅川と柏木を見た。風見はその視線を追つて、納得したよう  
に頷いた。

「なるほどねー。噂になつてゐるの？ あたしたち」

風見は、柏木と浅川に聞いた。一人は無言で頷く。それを見て、  
海は一つ思い出した事があった。

「あ、そうか。おまえら同じ学校に入学したんやつたつけ

「え？ 今更？」

「紫藤、それはないんじやない」

浅川と風見が非難の声を上げる。海は苦笑するしかなかつた。  
そんな海の腕を風見が掴んだ。何かと思つたら、腕を上に引っ張  
られる。

「な、なんやねん」

「ちょっと、廊下行こうよ」

「え？ なんで……」

戸惑いながら、見上げた風見の顔が妙に真剣だったので、海は問  
いを途中で止めて頷いた。

そのまま、自分で立ち上がり、風見の背を追つて廊下に出る。  
ドアが完全に閉まるとき、室内の喧騒が小さくなつた。

ドアに背をつけて立つと、微かに音程の外れた歌声が聞えてくる。  
どうやら、浅川に歌の番が回ってきたらしい。そう思つてみると、  
風見の声が耳に届いた。

「紫藤にさ、相談があるんだ」

相談といつ言葉に驚いて、ドア越しに室内を覗いていた目を風見  
に向けた。

「え？ 何で俺やねん。おまえの彼氏に相談したらええやん。それ  
とも、彼氏には相談できへん内容か？」

風見は無言で頷いた。

海は眉を寄せた。確かに風見とは仲が良かつたし、今でもメール  
のやり取りくらいはある。あるが、毎日のように顔を合わせていた

去年でも、風見から相談事なんて受けた事はなかつた気がする。滅多に顔をあわせることがない今だからこそ、相談しやすいといつことなのだろうか。

「紫藤さ、一回だけブチ切れしたことあつたじゃない」

唐突にそう言われて、海はすぐに思い当たつた。決まり悪そうな表情を作つた海に、風見がなおも語り。

「覚えてるでしょ？ 誰かがさ、自殺した子の」と悪く語つた時、すんごくキして教室飛び出しだじやない。あれ、びっくりしたんだよね。紫藤なんて会つた事もなかつたじゃん。桜田さん」

風見の言う桜田さんは自殺した少女の苗字だ。海がこちらに転校していく一年前、中学一年生のときに自殺したのだと。その少女のことが話題に上つたとき、誰かが言った『死んでよかつたんじゃないの？』この一言が気に触つて、怒鳴つた上に教室を飛び出した。思い出しだけでも腹立たしい半面、あそこまで切れなくてよかつたのではないかという苦い思いもある。

「会つた事なくたつて、言つていこと悪いことがあるやろ。で、それと、相談と何の関係があるねん」

声に棘があつたのだろうか。風見が細く整えている眉を寄せた。眉間に大きな皺が寄る。

「怒る事ないじゃん。関係があるから言つてんだし。あたし、あの時、紫藤のこと、ふだんおちやらけてるけどカッコいいところあるじやんつて、思つたんだから」

「……そりや、どうも。で、相談つて何やねん。そろそろ床らんと、おまえの彼氏にこいらん心配をすんぢやう？」

一応氣を使つて言つた海に、風見は頷いて見せた。

「君島由香。覚えてる？ あたしと同じ部活で、隣のクラスにいた子」

「あー。風見と違つて可愛い感じの子」

正直に思ったことを口にだしたら、大きな音がするほど腕を強く叩かれた。叩かれた腕を押さえて文句を言おうと風見を見たが、そ

の風見の顔を見た瞬間、海は口を開いた。

「ちょっと。あたしと違つてつてどりこいつ意味よ」

怒つている。そんなつもりは全くなかつたが、どりやら彼女の怒りの琴線にふれたらしい。

海は慌てて「まかすような笑みを見せる。

「いや、あれやん。風見は美人タイプやる? 君島さんは可愛い系やん。そう言う意味であつてやな。おまえが可愛いないとこういつこととちやうで?」

半眼で海を睨んでいた風見は、溜息をついた。海は「まかす笑みを持続させながら、風見が口を開くのを待つ。

「ふう。ま、そういうことなら許してやるか」

内心ほつとした海は、にこにこと頷いてから、話を元の方向へ修正する為に口を開いた。

「で、その君島さんがどうかしたんか?」

聞くと、先ほどまで怒りの表情をしていた風見の顔が暗くしぶんだようになる。

「メールがね、来るのよ」

「メール? 誰から? 迷惑メール的な感じか」

海の問いに風見は首を横に振った。その時海は、風見がピアスをつけていることに気づいた。中学の時にはピアスの穴なんて開けていなかつた。そんなことで、時の流れを感じる。

「違うの、桜田さんからメールがくるのよ。由香は中一のとき、桜田さんをいじめてたグループに入つてたから」

ここに、自殺した少女の名が出るとは思わなかつた。それに、君島がイジメグループに入つていたといふことも驚きだつた。大人しそうな子だったのに。海は内心の驚きを隠すよつて、声をだした。

「ふーん。でも、そんなんおかしいやん。桜田をひつて亡くなつた子やろ? 誰かのイタズラちやうん」

「でも、確かに桜田さんなんだつて。桜田さんと由香たちしか知らないような内容がメールで来るんだつて」

「ちよお、待つて。君島さん以外にもメールきてるんか？」

風見は頷いた。

「うん。今度、由香に会つてやつてよ。詳しい話聞いたげてほしいの。こんなのは誰にでも相談できないじゃん。あたし、紫藤が口硬いの知つてるし。桜田さんのこと、固定観念なしに見れそうだし。それに、同じ学校じゃない方がいいでしょ。また、妙な噂がたつたらいやだし」

「妙な噂？」

「桜田さんが自殺したのは、由香たちのグループのせいだつて」「イジメのせいやないんや。自殺したの」

「それも、原因の一つだとは思つけど。謎なんだよね。桜田さんがなぜ自殺したのかは。色々家でもあつたみたいだし。親が離婚したりとか、色々」

「ふーん。ま、会つだけやつたら会つてもいいけど。でも俺、たぶん何もできへん」

「いいよ。それでも。あたしもアンタに何かできるなんて思つていし。ただ、誰かに言うだけでもマシにはなるかなつて思つたんだ。由香、かなりまいつてるから」

海は溜息をつきたい気分になつた。また自殺絡みの話か。そう思うと心が重くなる気がする。会つてもいいなんて、安請け合いしない方がよかつたのではないか。そう思つたが、海はその想いを口にしないまま、風見とともにカラオケで盛り上がる室内に戻つたのだった。

## 第四章 ケンカするほひの仲？

『今日は楽しかったね。ムツコとアンナが買ったストラップ可愛かつたな……』

ムツコとアンナが買ったストラップ。三年前、確かにムツコとアンナは、学校帰りに寄り道したファンシーショップでお花柄の可愛いストラップを買っていた。

今更なんで？

携帯電話を握る手が震える。数日前から、毎日くるメール。今日もまだ、由香たちが桜田絵里に対してイジメまがいのことをする前の内容だ。それに安堵する自分を、由香は恥じた。

自分達がしたことを、後悔した。後悔して、苦しんだ。それも、やつと忘れかけてきたのに。

「どうして、今頃こんなメールがくるのよ」

由香の口から掠れるような声が漏れた。

「エリはまだ、私達を許してないの？」

由香の問いに答える声は、やはりない。

代わりに着信を告げるメロディーが流れる。

由香は、震える手で、メールを開いた。

『ねえ、ユカ。私たち、友達だよね……』

今日もよく晴れていた。青く広がる空に白い雲が浮かんでいる。遠くには、入道雲が見える。あの下はきっと大雨だな。ふと、そんなことを思った。

高橋空は、窓の外から手元に視線を戻す。大きく口を開けて、照り焼きバーガーを口いっぱいに頬張った。照り焼きのたれの味が、

空は好きだ。

午前中いっぱい使って、図書館で勉学に勤しんだ。もともとない頭を使って勉強するのはひどく腹がへるというもの。きっと頭にエネルギーをとられすぎるのだ。

空は、一緒に夏休みの宿題を片付けた学友であり、血の繋がつた兄弟でもある紫藤海と春名光とともに、駅前のファーストフード店にいた。左隣に海。正面に光が座っている。

空は、目の前の光がチキンバー ガーを少し口にしたのを機に、話しかけた。

「あ、ねえねえ。どう。美味しいだろ?」

「ああ」

光は言葉少なに頷いた。一口、二口と食べているところを見ると、不味いと思っているわけではなさそうだ。空は満足して、隣に座る海と田で頷きあつた。

驚きだが、光はこのよつなファーストフード店に入ったことがなかつたそうだ。友達と学校帰りとか寄り道しなかつたの? そう聞いた空に返ってきた答えは『今まで学校が終われば練習に向かつていたから、友達と遊ぶ暇などなかつた』だった。光は去年事故に遭うまで、フィギュアスケートの選手だったのである。

それを聞いた空と海は、妙な使命感に燃えた。俺たちが光に一般的な高校生の生活を教えねばと。空と海は半ば強引にこの店に光を連れて入り、今にいたるというわけだ。

テーブルに乗せたトレーの上が、ほぼ紙ぐずだらけになつた頃。空が満腹の意を込めて、大きく息を吐き出した。その横で、海が口を開いた。

「あのさ、ちょっと話があんねんけど

彼にしては珍しく、言い難そうな響があつた。

そこに疑問を抱きつつ、空は先を促した。

「何？ 聞くよ」

海は頷いた。話し出す前に喉を潤そうと思ったのだろうか、ストローを口にくわえた。ほぼジュークはなくなっていたのだろう。吸つた先から大きな音が鳴る。海はそれに少し眉を顰め、ストローを口から離すと、一拍の間を置いて話し始めた。

「あのさ。死人からメールが来ることってあると思つ？」

その問いに空は光を見た。光は相変わらずの無表情で、ただ海を見詰めている。光が何も言わないと見て取った空は、海に向き直つた。

「何それ。怖い話？ 僕、そう言つのは結構好きだよ」

空の言葉に、海は首を横に振る。

「ちやうねん。昨日、クラス会行つた時にな、相談のつてくれへんかつて言われて、そん時に、死人からメールが来るつて怯えてる女の子があるんやつて言われたんや」

「何それ、マジで言つてんの」

「誰かの悪戯だろう」

空の声に被せるように言われた光の言葉に、海は頷く。

「そう、俺もそう言つたんやけど、マジで本人からやつて言つねん。本人と自分達しか知らんような内容がメールでくるんやつて」

「うわー。怖いなそれ。やな感じ」

空は言いながら二の腕を摩る。鳥肌を立てたのだ。海は珍しく煮え切らない顔をして、頭を搔いた。

「うーん。でな、俺にその女の子に会つて、話聞いてくれ言つねん」「それで、会うつて言つたんだな、海は」

断定的ともとれる口調で光が言つた。光のトレーの上には、チキンバーガーの包み紙が綺麗に折りたたまれて置いてある。

「まあ、そうやねん。で、なんて言つてあげたら良いと思う？」

海の問いかけに、空は唸つた。口元に拳を当てて考えるが、コレといった妙案は浮かばない。

「わっかんねーよ。そもそも、本当に死人からメールが來てるなら、

俺たちにどうしようもねーし。靈媒師とかそつちに相談したら？  
とか言つてみたら？」

「死人がメールなんて打てるわけないじゃないか。死人は死人だろ」「相変わらず冷たい物言いだ。空は、そう思つて光を見る。海もう思つたのだろう。珍しく棘のある口調でこう言つた。

「じゃあ、おまえはどうすればいいと思つんや？」

光はその問いに、あからさまな溜息をついてみせた。

「どうもしなくて良いと思うけど」

「でも、気持ち悪いって思つてるんやで、その子。可哀相やん」

「じゃあ、メールが来ないよう着信拒否でもすればいい話だりう。メールアドレスを変えるつて手もある」

光は、なぜそんなことにも気づかないんだといった口ぶりだ。  
携帯電話を持つていらない空は、着信拒否とかできるんだと感心して  
いた。その横で、海が煮え切らない表情のまま口を開いた。

「まあ、そうやけど。それつて、なんかちゃんとした解決策ではな  
いつていうか、なんか、後味悪いっていうか……」こう、すつきり解  
決してやりたいっていうか」

海がそこまで言つた時だつた。光が口を挟んだ。

「そもそも、どうして海がその子のことで悩まなきやならないんだ  
？ 海には関係ないじゃないか」

「そ、そうやけど。でも、相談受ける手前、やっぱ親身に考えたら  
なあかんと思うし」

じつと、光は海を見ていた。相変わらずの無表情の奥で、光が何  
を考えているかは分からない。きっと、光の脳はめまぐるしく動い  
ているのだろう。と、空は思つ。

「そうやって、人の荷物まで背負う必要はないと思うけど。メール  
を送つてくる相手が、どんな奴かは解らないけど。死んだ人間の名  
を騙るような奴だ。彼女に良い感情は持ち合わせていない。今は、  
ただメールがくるだけで済んでいいけど、それ以上の何かがあつた  
らどうする？」

「それ以上の何かって？」

空は、つい口を挟んでしまった。光の冷たい瞳が空を見た。

「飛躍しすぎかもしないけど、例えば暴力に訴えるとか。そんなことになった時、おまえは責任とれるのか？　おまえの言ったことで、取り返しのつかないことになつたら？　責任取れないんだつたら相談なんてのるのやめた方が身のためだよ」

光は言葉の途中で、海に視線を合わせて言い切つた。その間、やはり表情は変わらない。無表情なせいで、より一層言葉に冷たさが加わっている。

光が言い終わるまで黙つて聞いていた海は、不意に光を睨んだ。空は驚く。海がこいつの顔をするのは珍しい。彼は笑顔でいることが多いからだ。

「光、おまえはなんでそつなんや」

光は黙つて海を見返した。空は、場の空気がおかしくなっていることに気づく。何だ、この不穏な空気。空は光が胸の前で腕を組んだのを見た。

「そうとは？」

「おまえ、冷たいねん。前から思つとつたけど、他人に対して冷めすぎや。もうちょっと、他人に優しくてもいいんとちやうか」

光は眉間にしわを寄せた。ずれてもいない眼鏡を人さし指で上げるしぐさをする。

「優しくとか……他人なんてどうでもいい。僕はお前が……」

「どうでもいいってなんやねんっ」

辺りに大きな音が響いた。海が机を思い切り叩いたのだ。一瞬、周りの喧噪が途切れた。

空は、机に手をついて光を睨んでいる海の腕を、そつと引つ張つた。

「ちょ、ちょっと。落ちつけよ」

「空は黙つてる。人がせつかく忠告してやつてんのに。なんやねん。光、お前はそんなんやから友達もできへんねん。自分の殻に閉じこ

もつて、何でもかんでも理詰めで考へるから、あんな馬鹿なことまでしかすんや」

海がそこまで言つたとき、光はふと視線を逸らした。空はそれが気になつて、その視線をそつと追う。そこには空たちと同じ年くらいの女の子がいた。こちらをじつと見つめている。女の子だけではなかつた。店内にいる人のほとんどがこちらを注目している。

「か、海つてば。みんな見てる」

もう一度、空は海の腕を引っ張つて注意をひいた。

海は空を一瞥したあと、立ち上がる。

「帰る、付き合つてられへんわ」

そう言つて海は足早に店内を後にした。

それを呆然と見送つてしまつた空は、我に返つて慌てる。

「あ、ど、どうしよつ」

空は光を窺い見る。光は無表情を崩していなかつた。海の言葉など、なんとも思つていないといつよう。

「追つかければ？」

いつもと同じ、淡々とした口調。

「で、でも」

迷う空に、光はまた言つた。

「大丈夫だから、行けよ」

「分かつた。十分で戻らなかつたら、先帰つていいから。んじゅ、  
行つてくる」

空は、床に置いていたかばんを掴んで店を出た。

外に出ると、一気に暑い空氣に包まれた。蝉の鳴く声が、車道を走る車の音とともに、辺りに響いている。

暑い日差しを浴びながら、駅の方へ向かうと、すぐに海を見つけることができた。行き交う人を避けて走り、海に近づく。

「海、海つてば」

空は海の肩を掴んで振り向かせた。海の表情にはまだ、怒りの色が浮かんでいる。

「なんやねん」

「なんやねんって、あの、追つかけてきた」

「それは、見たら分かるわ」

そう返されて、そりゃ そつかと空も溜つ。

「だつて、お前いきなりキレるから、びっくりしてさ。お前りしくないし」

「俺らしぃない? ..... まあ、確かにそつかもな

海は溜息をついた。

空は、内心首をかしげたくなつた。思つたよりも怒つていのいのだろうかと。てつくり、言い返してくると予想していたのだが。海はゆっくりとした歩調で、ガードレールのそばへ行き、そこに腰をおろした。空もそれに倣うように、隣に腰掛ける。道行く人がちらちらとこちらを見ているが、気にしないことにした。

「俺、あかんねん。カーッとなつたらつい、ガーって言つてしまふねん」

海は舗装された歩道を見つめ、そう言つた。空はそんな海に視線を向ける。

「そうなの? そんなイメージないけどな。どつちかいつつと、俺のがそういうイメージじゃね?」

空の言葉に、海は肩をすくめた。

「確かに、お前は沸点低いやんな。その分冷めるのも速いし」

「まあ。それが俺の利点だから」

そう言つと、海はもう一度たまたまつたものを吐き出すよつと溜息をついた。

「それをいうなら利点やなくて、長所や」

「そんなのどつちでもいいだろ? で、びつすんだよ

「何を」

「何をつて、これから。光まだいると思つたけど、迎えに行く? それとも帰る?」

問うと、難しい表情で答えた。

「俺は謝らへん」

海は立ち上がった。険しい表情をしたままではあつたが、足をファーストフード店の方へと向ける。

空は、それに笑みをこぼす。

「うん、いいんじゃねーの。お前の言ひ方とも一理あると思つた。ただ、ちよつと言い過ぎ」

「んー。やうやろか」

「そりだよ。だつて、馬鹿なことしかすつて、あれつて光が自殺しようとしたこと言つてたんだろ」

空は海の隣を歩きながら彼の顔を窺つ。海の表情から、怒りは見えなかつた。

「確かに、あいつは冷血漢で、人のこと見下したよつた態度をとるし、カチンとくる」と多こけど、結構纖細なんだぞ。思い出せるようなこと言つくなよ」

海は口に手をやつた。空の、光を庇つようとして容赦のない言葉に、口元が緩みそうになつたのだ。

「おまえ今のセリフ、俺より酷いで？ 分かつてるんか？」

「え？ そんなことないよ。俺はいつも本人に言つてるもん。お前はそれを止める役だろ。俺の専売特許となるなよな」

につと笑つて言つてやると、よつやく海の顔に笑みが戻つてきた。まだ、少しきこちないが。

だが、その顔が不意に歪んだ。信号を渡れば、田の前がファーストフード店といつこの位置で、海は苦虫をかみつぶしたような表情をつくる。

「海？」

「あいつ……」

その咳きには怒りがこもつていた。

「え？ あれ？」

さほど距離のない横断歩道の先、ファーストフード店の店内で、光が同年代の少女に笑いかけている姿が、空の目にも映つた。

「光、笑ってる」

眩きが口から洩れた。学校でも、空たちの前でもめったに笑顔など見せないので。

そつと、海の様子を窺つた。

「あいつ、全然気にしてへん」

「あの……、海」

「何女の子はべらして、べらべらしてんねん。俺のことはどうでもいいつかうんか！」

「あのー。海さん？」

「帰る」

海はそれだけ言つと、来た道を引き返した。

空は、遠ざかる海の背中と、店内の光を見比べた。

「もー。馬鹿つ

誰にともなく、唸るよつてかうつて、空は海の後を追つた。

## 第五章 違う目線

時は少し遡る。

空が店を飛び出した海を追つた後。

光は深く溜息をついた。

どうやらまた、自分は失敗したようだ。そう思うと情けなくなる。光はただ、他人よりも海のことが心配だつただけだ。まだ、自分は人に思いを伝えることに慣れていないらしい。ずっと、感情を表に出すことをしてこなかつたから。

そんなことを考えていると、不意に光は近くに人の気配を感じた。光の座る席の傍らに、誰かが立つたようだ。

そちらを見上げると、光と同じ年くらいの少女がいた。派手さはない、クラスでも目立たないタイプともいおうか。黒髪を両サイドで三つ編みにして、肩に垂らしている。

彼女はおずおずといつた体で、光に話しかけた。

「あの……。もしよければ、私と少しお話しませんか？」

小さな声だつたが、聞き取れた。光は少し、意地悪をしたい気分になる。海と喧嘩したことが、尾を引いているのかもしれない。

「何？ ナンパ？」

少女は赤面し、目を大きく見開いた。そこまでは光の予想範囲内だつたが、その後が違つた。

「はい、ナンパです。逆ナンです！」

胸の前でこぶしをぐつと握り、少女は店内に響くような大声でそう宣言したのだ。

光は、呆気にとられた顔を少女に向ける。

「あの、ダ、ダメでしょうか」

不安そうにこちらを見る彼女に、光は自分でも信じられないほど自然に笑みを浮かべて見せた。だがそれは、ある種営業スマイルに似たものだった。フィギュアスケートをやっていた頃、周りの人に向

けていたような作り物の笑顔。

「いいよ。でも……」

「で、でも？」

なぜか呆けたような調子で少女が問う。

「どこか他の店に行こう。喫茶店とか」

光はそう提案する。少女はきょとんとした。ここでいいのに思つていることは明らかだ。光は、笑顔を持続させたまま指摘した。「君が、動物園の檻の中にある気分を味わいたいなら、このままここで話してもいいけど」

そう言うと、少女は気づいたように辺りを見回す。そして、あちらこちらから向けられる好奇の視線に耐えかねたように下を向いた。「ほ、他の場所がいいです」

少女の呟くような声に合わせて、光は立ち上がり笑顔を向けた。

「じゃあ、行こうか」

それを合図に、二人はそろって店を出た。たくさんの人に見送られながら。

一人はファーストフード店からほど近い喫茶店に入ることにした。店内は昼のピーク時を過ぎたせいか、客はまばらだ。さほど広くはないが、落ち着いた雰囲気を醸し出している。光はカウンター席を避け、店内一番奥の四人掛けの席を選んだ。

少女は素直に後についてくる。

目の細い喫茶店のマスターに、アイスコーヒーとアイスティーを頼む。

二人は、マスターが頼んだ品々を持って来ても、沈黙を保つたままだった。

光は少女が話し出すのを待っていたが、待っていても一向に話しうる気配がないことを悟り、自分から口を開くことにした。

「で、君は僕と何の話がしたかったのかな」

光の問いかけに、アイスコーヒーにシロップとクリームを入れて混ぜていた少女は、顔を上げた。

「あの……」

そこから話が続かない。光は溜息をつきたいのを我慢した。

「本当はナンパじゃないよね。ただ、僕から話を聞き出したかった。違う？」

重ねた問いに、少女は意を決したように、アイスコーヒーから光に視線を移した。光の瞳をしっかりと見つめる。

「どうして、分かったの？」

「そりや、普通ナンパするときはあんなにはっきり、はいナンパです。なんて言わないものだよ」

「うつ」

思い出したのか、少女は痛いところを突かれたような顔をした。少し頬が赤くなっている。

「それに君、僕たちが騒ぎ出す前、僕の連れが死人からのメールの話を始めてからずっと、こっちを気にしてただろう。君は僕たちの話が聞こえる程度には近いカウンター席にいたから、すぐに分かつた」

「気づいてたんだ」

驚いたように、少女はそう言った。それが肯定の言葉になつた。「実は、そのメール。私のところにも来てるの。あ、あなたの友達に相談したのは私じゃないけど」

少女はそう言つて、またストローでアイスコーヒーをかき回した。氷が音をたてる。

「そう。でも、僕はメールが来るとしか聞いてないよ。それ以外は何も分からぬ。君に何か言つてあげることもできないな」

相変わらず冷たく聞こえる声音だったが、少女は怯まなかつた。

「ねえ、一緒に犯人を探してくれないかしら」

「え？」

「私一人じゃ不安だし。こんな話、誰にも話せないし。でも、あなたは知ってるし、だから、一緒に犯人捜してくれない？」

少女の言っていることは、筋が通っているとは思えなかつた。普段なら即断つてゐる。だが、光は断る言葉を飲み込んだ。

どうせ、海は何を言つても、この話に首を突つ込むだろう。そして、人のいい海のことだ。絶対に巻き込まれるに決まつてゐる。それならば、先にこちらで動いてしまつた方が、海の危険を少しでも回避させることができるのでないか。そんなにたいした危機があるとは思えないが、少なくともそれを確認することはできるだろう。そんな思いが光の頭を過つた。

「分かつた。でも、一つ条件がある」

少女は緊張した面持ちで頷いた。

「う、うん。何？ 条件つて」

光はまた笑顔を浮かべた。海と喧嘩してからこつち、表情がゆるんでしまつたようだ。

「君の名前を教えて」

そう言つと、初めて少女は笑顔を見せた。

「あ、本当。まだ私たち名乗りもしてなかつたのね。私は静。伊藤いとう春名光<sup>すが</sup>。あなたは？」

「春名光」

光が名乗ると、少女は光に向かつて手を差し出した。少しの驚きと躊躇いを持つて、光は静を見返した。

彼女は言つた。

「握手しましょ。よろしくね。春名君」

光はゆっくりと手を差し出した。

喫茶店で静と別れてから、光は時間を確かめようと携帯電話を見て、着信があつたことに気付いた。空の自宅からだ。空はいまどき

珍しく、携帯電話を持つていなかった。

光は逡巡のあと、リダイヤルを押した。

『ありがとうございます。高橋ブック店でございます』

電話の相手がそう告げた。女性の声だ。光は店の方にかかってしまったのかと驚いたが、驚きは表に出ることはないかった。

「春名と申しますが、空君はいらっしゃいますか」

光が尋ねると、電話の向こうの女性の声が先ほどよりも低くなつた。どうやら先ほどの声は営業用だったらしい。

『ああ、光くんね。空からはよくお話を聞いてますよ。この間のテスト学年で一番だったんですねー。すばらわー。空に爪の垢でも煎じて飲ませてやりたいわ』

「いえ、別にすごくは……」

『あらやだ、謙遜しちゃつてー。また空に勉強教えてやつてくれさいね。あ、そうだ、今度ついでに飯食べにいらっしゃいよ。この間も海君がねー……』

口を挟む隙がない。

光がどうしたものかと思いながら、大人しく相手の女性の話を聞いていると、電話の向こうから空の母を呼ぶ声が聞こえた。

『あ、ちょっと待つてね。空が来たから。空ー。光くんから電話よ。電話の向こうで、なんで母さんが長々しゃべつてんだよ。とか、だつて一度話してみたかったのよ。などとこう会話が聞こえ、その後に空が出た。

『あ、ワリ。母さん話好きなもんだからわあ』

「おまえ、電話つて店と共用なのか？」

尋ねると肯定が返ってきた。

『うん。まあね。そんなことよつせ。どうなつてんだよ。海カンカンに怒つてるぜ』

『僕は間違つたことを言つてゐつもりはないけど』

『じゃなくて、女だよ、お、ん、な。女の子と一緒にいただりつ』

「見てたのか」

空の言葉に少なからず驚いた光は、無意識に口走っていた。

『見てたんだよ。海のやつ、光が海と喧嘩したこと全然気にしてないって言つて怒つてや。帰り道口きいてくれなかつたんだぜ？ あの海がだぜ？ ここはひとつ、光、お前が謝つとけよ』

光は見えないと分かつていながら首を横に振つた。遅れて言葉が漏れる。

「それは無理だ」

『なんですかー。一言謝ればすむことじやん』

「海が何に対しても怒つてるのかが分からぬ

『はあ？』

「そう言つことだか」

光はそれだけ言い残して電話を切つた。空が何かを言おうとしたが構わない。

そもそも海は何を怒つているのだろうか。

最初は光が優しくないと言つて怒つていた。

だが、空の話では女の子と一緒にいたのが気に食わないから怒つているところ。

女の子と一緒にいてなぜ腹を立てられなければならないのだろう。光は無意識に首をひねり、ケータイ電話を尻ポケットに突っ込むと、駅へ向かつて歩き出した。

## 第六章 本格始動？

『ねえ、ユ力。私たち、友達だよね』  
頷くと、嬉しそうに笑うエリ。

今でもあの時の笑顔が頭に浮かぶ。

そのたびに、ごめんなさいと心の中で許しを請う。  
『あの日。仲直りの記念に、お揃いのアクセサリーに行く約束したよね？』

『ごめんなさい。

もう、許して。

『ねえユ力。あの日、どうして私は死んだの？』  
手にした携帯電話のディスプレーに浮かぶ文字。

『ねえ、ユ力。私たち友達だよね……』

ストローに口をつけて吸うと、大きな音が鳴った。いつの間にかすべて飲み干していたようだ。ほんの少し口まで届いた液体は、オレンジジュースの味がかすかにする水だった。海は顔をしかめ、紙コップを握りつぶした。

駅前のショッピングセンターの、待合所に設けてあるベンチに座っていた。平日の昼過ぎとあってか、海の座るベンチ以外には誰もいない。

光と喧嘩別れしてから数日がたつていた。あれから一度も光に会っていない。思い出しただけで腹が立つ。だが、なぜそこまで腹が立つか、海自身にもよく分かっていなかった。

せっかくあの日、宿題全部終わらせたのに。

海はそう思つて溜息をついた。本来なら『宿題早く終わらせて遊びまくろう計画』の『遊びまくろう』を実行させていたはずなのに。

海はまた溜息をついた。

「おひまえ、溜息多すぎ。」この瞬間にも幸せがどんどん逃げてつてるんだぞ」

海の横から元気な声が聞こえてきた。

海はそちらに田を向ける。一重の、大きな茶色い瞳が海を見ていた。海はその瞳が、空の顔の中で一番好きだ。その瞳にあつらえたよつに似合ひの鼻や唇のせいで、一見すると少しやかなお嬢様顔の空だが、瞳に宿る勝気な性格が、空を元気な印象に変えていた。

無意識に、海はじつと空を見つめていた。空が沈黙に耐えかねたように眉を寄せる。

「おおーー。何放心してんだよ。お前大丈夫か？ 最近変だぞ」 小首を傾げるその姿を可愛く感じて、海は憂鬱だった気分を切り替えるべく、笑顔を作った。

「いやー。やつぱ空つて可愛いよなーって改めて思つてもうつたわ。でへつ」

頭に手をやつて表情を崩した海に、空は眉を吊り上げた。

「がーつ。何がでへつだ！ 可愛いって言うなつひとつてんだらうがつ。ほんつとムカつべ。つていうか、まだなの？ 一時に待ち合わせつつたじやん。今一時十五分だぜ？ 相談しよつていつのに遅れてくるとはどうこうことだ」

吠える空を見ていると、やはり子犬のようだと海は思つ。今日は風見に頼まれたことをしに来たのである。つまり、船島由香の相談に乗りにきたのだ。

海は空に捨ててと紙コップを手渡して、彼の気をそらせた。ちょうど彼の横にはごみ箱が置いてある。

「まあ、いろいろと事情があるんぢやつか？ なんやつたら空はもう帰つてくれてもいいけど」

「何それ。俺が邪魔つてことか」

「ちやうけど……なんや空、そんなに俺のこと好きなんかー。海子

嬉しーー」

そう言いながら、ふざけて空に抱きついた。空は大暴れである。

「だー、熱い、気持ちわりい。はーなーれーろー」

空がもがいているのが面白いので、海はもつじばらくへくついていることにした。

ひとしきりじやれあつていると、背後から呼びかける声が上がった。

「ちょっと、紫藤つてホモつ氣があつたの？」

聞き覚えのある声に空を抱いたまま振り向くと、面白がった顔をした風見と、隣に複雑そうな表情をした少女が立っていた。海は一人に笑顔を向け、空の背に回していた手を離す。

「そいやねーん。『レガ俺の愛しい人』

そう言つと、空に頭を殴られた。

「調子乗つすぎ」

「ははっ」

海は殴られた頭をさすりながら、笑つて誤魔化した。

「で、本当はどっちなのよ」

風見が近付いてきたので、海は立ち上がった。空も続いて立ち上がる。

「友達友達、ただの友達だから」

空は風見の言葉にむきになつて答える。

「あ、これが言つといたツレやから」

海は空を指差して一人に紹介した。空は、海にこれつてなんだよとくつてかかる。風見には事前に空が来ることを伝えていた。空がどうしても自分も行くと言つて聞かなかつたからだ。

「元気いーねー。男の子だよね？」

風見が尋ねると、空は頬をふくらませた。

「どつからどー見ても男だる」

空が吠えた。それに風見は苦笑いをみせる。きつとどつかひどく見ても、と言つほど男には見えないと思つてゐるのだろう。

「まあまあ。で、空。こっちの美人が風見で、そっちのかわいい子

が君島さんや」

海が手で一人を示しながら「うひー」と、君島と名を呼ばれた少女が少し目を見張った。

「あ、覚えててくれたんだ。紫藤くん」「

とても小さな声だつた。海は笑顔で頷く。

「え？ そら覚えてるわ。一年もたつてないのに、忘れてたら俺アホやん」

「あ、そうよね。「ermenなき」

謝りながら君島は微笑んだ。空はそのやり取りを見ながら首を軽く傾げている。

「もう、紫藤つてば罪つくりな奴なんだからー」

風見がそう言いながら肘で海の脇腹をつついてきた。けつこいつ痛い。

それに、風見の言つている意味が分からなかつた。

「なんやねん。どいつう意味や？」

「鈍感」

風見はそれだけ言つて、顔を背けた。

「あー？」

海は風見に声を上げる。そんな海の腕を空がつついた。

「なあ、こつまでこじこじする気？ それともこじで話すんの？」

空が聞くと、風見があつと声を上げる。

「そうだ。待たせてものよ」

海は空と顔を合わせてから、風見に問ひ。

「誰を？ 話は君島さんとやんな」

そう言つと、風見は綺麗に整えた眉を寄せた。

「それがさー。紫藤、他にもメールきてる子こじらつて言つたじやん

「ああ、言つとつたな」

「その、他の子も来てるんだよね。あたしん家に」

「ああ？ 何で」

声を上げた海に、怯えたよつて体を震わせて、君島が言つた。

「あ、あの。紫藤君」めんなさい。私がみんなに、紫藤君に相談することにしたってメールしたら、一度みんなで話し合おうってことになつて。第三者の意見も聞きたいから、紫藤君も呼ばうって

君島の様子に気づいた海は、笑顔を君島に向けた。

「あ、大丈夫やで。気にせんといでな、君島さん。や、行こか」海の声を合図に四人は風見の家に向かつて歩き出した。

## 第七章 話し合い

ショッピングセンターから五分ほどで、風見の家に着いた。ずいぶんと大きな家だ。一階建てで、駐車場がついている。駐車場には車が二台停められるスペースがあった。

「でっかい家だな」

空が言葉を洩らす。内心、光の家の方が大きいけど、と付け加えた。

「まーね。さ、あがつて。皆がいる部屋、二階だから」

そう言って、さつさと階段を上がっていく風見に、空たちもついて行つた。

風見に連れられて着いた部屋は、客間のようだ。クーラーのきいた部屋に、ほつとする。空の家のどの部屋よりも広いスペースに、大きなテーブルと、ソファーがいくつか置いてある。ざつと見て、八人くらいは座れるだろう。そのソファーに二人の少女が座つていた。

「おっそーい。ユカたち」

その内の一人が声を上げた。非難の響きに、風見は微かに気分を害した気配を見せた。空はそれに気づいて、内心喧嘩が始まらなきやいいけど、と思ったが、それは取り越し苦労であった。

「ごめんね。みんなの分の飲み物とかもついでに買って来たのよ。あとで、持つて来るからさ」

風見は由香の変わりにと「ううん」と、非難の声を上げた少女にそう笑顔をかえす。

少女は、肩をすくめて見せただけだった。

風見とはやりあいたくないのだろうか。

風見はついでにと、海と空を三人の少女に紹介した。

一人揃つて挨拶をした後、少女達を紹介してもらつ。三人の少女が立ちあがつた。

風見はまず、最初に声を上げた少女を手で示した。

「えーっと、彼女は石井睦子」

「どーもー」

やる気のなじよつた声を上げた石井睦子は、空たちに視線をやることもなく、軽く頭を下げた。空たちよりも明るい茶髪を、ポーテールにしている。その顔にはしっかりとメイクがほどこされていた。

空は、挨拶する時くらいこいつら見ろよと思ったが、口には出さなかつた。今日は、一応海の付添で来ているのだ。まだ、話も始まつていないうちから、事を荒立てる事もない。

風見は、石井の態度にまたもや氣分を害した様子を見せたが、こちらも口に出すことはなく、石井の隣に立っている少女に視線を移した。その隣に立つ少女はキャミソールミニスカートといういたちだ。細身の彼女にはとてもよく似合つていて、「で、隣にいるのが川崎杏奈」<sup>かわさきあんな</sup>

「どもども、紫藤はお久だねー」

石井と同様、しつかりとマイクをほどこした顔に笑顔をのせ、川崎杏奈と呼ばれた少女は海に手を振る。振った拍子に、手首にたくさんつけられたアクセサリーが音をたてた。

空が海の方を見ると、彼も軽く笑みを浮かべていた。

「おー。久し振り」

「何？ 知つてんの？」

空が聞くと、海は頷いて見せた。

「そう、俺のダチの元カノやねん」

海の言葉に、川崎は唇を尖らせる。

「もー、へんな紹介の仕方やめてよねー。あいつとは一ヶ月しか付き合つてなかつたんだから。今はフリーだよー。誤解しないでね、

高橋くん」

何故かそう話を向けられ、空は反射的に首を数度縦に振つた。

それに満足したのか、川崎は相好を崩す。

「はいはい、粉かけはあとにしてよねー。じゃ、最後ね。彼女は伊藤静」

風見の声で、空と海は示された少女を見た。一見おとなしそうな少女だ。石井や川崎と違い、ノーメイクで染めていない黒髪を左右でお下げにしている。服装も露出の多い川崎や石井と違い、白い半そでのブラウスに、紺色のひざ下丈のスカートと地味な出で立ちだ。

「はじめまして。伊藤です」

伊藤静と呼ばれた少女は、深々と頭を下げた。

空と海もよろしくと、あわてて頭を下げる。

「よし、じゃあ、紹介も終わったし、話し合が始めようか?」

風見の声を合図に空と海、そして少女五人はそれぞれ一番近い位置のソファーアにテーブルを囲むようにして座った。

「じゃあ、まず、何から……」

風見が話し始めたとき、その声を遮るようにして石井が声を上げた。

「あのやー。別に話すこともなくない? あんなの無視してればすむ」とじやん

「でも、ムツ「は怖くないの? あのメール」

石井は君島に鋭い視線を投げた。

「あのやー、ユカ。あんなのエリが送つてきてるとかマジに思つてんの? そんな訳ないじやん。あいつ死んだんだよ? 死んだあいつが、どうやってメール送つてくれるつていうのよ」

「だって、でも……」

言いよどむ君島に、石井は追い打ちを掛けるように口を開く。

「ムリよムリ。絶対ムリ。つづーかさ、あの内容でそんな怯えることない? それとも、なんかやましいことでもあるの? ユカ」「や、やましいことなんて……」

「だったら怯える必要ないじやん、……まあ、あんたがエリをやつたって言つんなら? 話は別だけど」

石井が侮蔑を込めたような目で君島を見る。そんな石井に反論の

声を上げたのは、君島ではなく、その隣に座っていた風見だつた。  
「ちょっと、石井。あんた言つていいことと悪いことの区別もつか  
ないの？ 由香がそんなことするわけないじゃない」

立ち上がって石井を見下ろすように言つた風見に、石井は冷たい  
眼を向ける。

「つるさいな、あんた部外者じやん。でしゃばってんじゃねーよ」「  
な、なんですってー」

石井のあまりの言いように、風見の堪忍袋の緒もとハリ切れた  
らしい。風見が大きく息を吸い込むのを見たとき、空も黙つていら  
れず腰を浮かした。

二人を止めるために、やめろと言おうとしたのだが、その言葉を  
発する前に空の隣から大声が響いた。

「わっ！」

その大声に、空は勿論、その場にいたほぼ全員がその声の発生源  
から身を引いて、そちらを見た。

注目を浴びたその人物は、不意に笑顔になると、一人一人の顔を  
眺めるように見回した。

「よつしゃ、静になつたな」

海以外の全員が、力が抜けたようにソファーにもたれる。

「もー、何だよ。俺心臓止まるかと思つた」

「アタシもマジビビつた」

「やめてよねー紫藤」

口ぐちに非難の声を上げる面々に、笑顔を持続させたまま答える。

「でも、みんな落ち着いたやろ？ これでちやんと話できるやん」

海の言葉に、風見と石井が顔を見合わせた。

「まあね、でも石井は言いすぎよ」

風見の言葉に、石井は不機嫌な表情を見せるも、溜息をついて君  
島に謝罪した。

「ごめん、ユカ。言い過ぎた。だって、なんかさ、イライラしちゃ  
つて。怖くはないけど気分悪いじやん。こんなメールが来るのつて」

君島は目を伏せて頷いた。奇妙な沈黙が辺りを支配する。普段は気にならない、クーラーのモーター音が耳につく。

「ねえ、みんなはどうして急にこんなメールが来るようになつたんだと思う?」「う

不意に上がつた声は風見からではなく、伊藤静からだつた。静は、ゆつくりと一人一人の顔を見回した。

「誰かのイタズラとしか考えられなくない?」

一番初めに意見を出したのは、先ほど風見に粉をかけるなど言われた川崎杏奈だつた。

「なぜ今頃? ハリが亡くなつたのって、一年も前よ」

冷静な声を出す伊藤に、川崎は肩をすくめて見せた。

「他には?」

「あのさあ、メール見させてもらつたんだけど、このメール送つてきてる人つてさ。ずいぶん桜田さんとあんたたちに詳しいわよね」風見はメールが来ている四人の顔を見回す。

「あー、それやけど。具体的にどんなんきてるんや? 僕、実際にメールの内容見せてもらつてないねんけど」

ここで海が話に加わる。川崎が、机の端に置いていた携帯電話を手にとつた。

「じゃあ、メールきた順番に読みあげるね」  
そう言って、川崎は声を上げた。

『アンナ。元気にしてた? 私かえつてきたよ』

『今日は、友達がいつぺんにできたのが嬉しかつたなー。アンナにムツコにシズカにユカ。ずっと友達でいてね』

『今日は楽しかつたね。ムツコとアンナが買つたストラップ可愛かつたな。私も買おうかなー。でも千一百円は高いよね』

『四人ではじめての遊園地。シズカが彼を連れてきてびっくり。だつて、シズカの彼つてばとつてもカッコいいんだもの。シズカつてば、大人しい顔して、結構やるなあ』

空は、川崎が読み上げるメールの内容を聞きながら疑問を覚えた。どれもこれも、日常の些細な出来事を綴つたものだつたからだ。死人からのメールといつから、もつといつ、おどろおどろしいもの想像していたのだが。

「この、ストラップとか、遊園地のこととかつて、ほんまにあつたことなんか？」

海が誰にともなく問い合わせる。

由香がゆっくりと頷いた。

「ええ。どれも本当のこと。どんどんと、エリが死んだ日に近づいていつてるの」

「えつと。このムツコが石井さんで、アンナが川崎さん。で、シズカが伊藤さんで、ユカが君島さんだよな」

空が、こんがらがつてきた頭を整理しようとした声を上げた。メールの内容を聞いただけでは、誰が誰かよく分からなくなつてきたのだ。「あつてるよー。高橋君。高橋君もアタシのことアンナつて呼んでくれていいからね」

甘い声でそう言つてくれた杏奈に、空は愛想笑いを返した。

そんな空の耳に、風見の咳払いが聞こえた。

「うおっほん。さ、そんなことより、メールの話でしょ。もちろん、メアドを変えたり、色々やつたのよね。でも、メールがくる。そういうよ？」

「そうよ。だから、気味悪いんじやん」

相変わらず不機嫌そのものの声で、睦子が肯定した。

「あら、ムツコは怖くないって言つてなかつた？」

静の言葉に、睦子は声を上げる。

「怖いとは言つてないでしょ。気味悪いって言つてんの。内容はた

いしたことないけど。こんなメール送つてくる意味が分かんないし、いまさら、こんな思い出語られても。『うしろつていうのよ』「だよねえ。ムツコの言つとおり。アタシもなんだか気持ち悪いな」杏奈が手にした携帯電話のストラップを弄びながら、同意の声を上げた。静がそれに頷いたのを見た。

自殺したという少女と、彼女たちの日常風景が書かれたメール。これにいつたいどんな意味が込められているのだろう。

はつきり言つてさつぱり分からぬ。嫌がらせにしては、大した効果もないようと思われる。確かに気味は悪いかもしけないが。空が首をひねつていると、由香が恐る恐るといった体で、口を開いた。

「あの、みんな気づいてた？ 最初に来たメールのアドレス。本当にエリの使つてたケータイのアドレスだつたってこと」

「え？ うそっ」

杏奈が氣味悪げに由香を見て声を上げる。

「マジで？ そんなの気付かなかつた。だって、エリが死んで、ソツコ一でアドレス削除したしさ」

「私も、ケータイ変えたとき、エリのアドレス削除してたから気付かなかつたわ」

静が、睦子に同意する。由香は心なしか青ざめた顔で、一同を見回した。

「本当よ。私、エリが死んだあとも、どうしてもアドレス消すことができなくて、ずっと残してたの。だから、メールが来た時驚いたの。誰かのいたずらとは思えなくて、本当にエリなんじゃないかつて……」

由香は体を縮こませるように、腕を抱く。そんな由香の言葉を遮るよつに、風見が声を上げた。

「ちよ、ちよっとユカ。そんなことないつて。ありえないつて。だって桜田さんは」

「死んでるのよ、ユカ。エリな訳がないの。でも、ユカの言うよつ

に、メールアドレスがエリのものだつたなら……」

そこまで、静が言つたときだつた。急に、杏奈の持つてゐる携帯電話が音を鳴らした。ほゞ、時を同じくして、あちらこちらから音が鳴る。携帯電話の着信音だ。海は空と顔を見合せた。由香や静。そして、睦子が自身の鞄を探る。

一人携帯電話を手にしていた杏奈が、声を上げた。

「ヤダ、何これ」

口元に手をやり、自身から遠ざけるように携帯電話を持った方の腕を伸ばす。手首につけたアクセサリーが音をたてた。

杏奈の携帯電話を半ば取り上げるようにして、海がディスプレーに目を落とす。空はそれを横から覗きこんだ。

「何だこれ。気持ち悪つ

思わず声を上げる。

『ねえ。私を殺したのは、誰?』

確認すると、四人全員に、同じメールが送られていた。

## 第八章 自殺じゃなかつたの？

夏は日が沈むのが遅い。

十分に明るい午後六時過ぎ。

まだまだ暑いが、温度の少しづつがつた風が通り過ぎ、一時涼を感じさせる。

空と海は由香を家まで送り届けるために、並んで住宅街を歩いていた。

すっかり意氣消沈してしまった由香は、黙々と歩みを進めている。その様子を窺っていた空は、黙つているのも性に合わないと口を開くことにした。

「なあ、えつと、君島さん」

由香が無言で空に顔を向ける。空は無理やり笑顔を作った。

「あのさ、何でみんなメールが来たんだろうな。殺したの誰つて、自殺なんだから自分だよな」

由香は小さく体を震わせた。その顔色が心なしか青くなつたことに気付いた空は、自分が失敗したことを悟つた。どうせなら、関係ない話をふればよかつたと後悔する。だが、後の祭りだ。

足を止めてしまつた由香に気づき、空は海とともに立ち止まつた。彼女は俯いてしまつている。

「ごめんなあ、君島さん。空ひでは空ひ読めへん奴やから」「悪かったな」

海を睨んだが、その声はどこか弱い。

海が自身の頭に手をやつて、髪をくしゃくしゃと撫でた。

由香に向と声をかけようとか考えているのだろう。

「……の、せいなの」

小さく、由香の声が聞こえた気がして、空は海と田を合わせた。そして、また、視線を由香に戻す。

「今、なんて言った？」

由香はゆっくりと顔を上げた。今にも泣きだしてしまったやうな歪んだ表情だ。

「私なの。Hリを殺したのは、私なのよ」

由香は大きな声でそう言って、手のひらに顔を埋めてしまった。肩が震え始める。泣きだしてしまった由香を前に、男一人は複雑な表情で顔を見合せた。

海はゆっくりと辺りを見回し、考えるように顎に手をあてる。

「あー、君島さん。この辺に確か公園あったよな。そこ行かへん？ ゆっくり話聞くから、溜まってるもん、全部吐き出してみようや」

海の優しい聲音が耳に入つたのだろう。由香はゆっくりと頭を縦に振る。安堵したような海の吐息が、空の耳に届いた。

ふと、空は海の言葉に引っかかりを覚えて、首を傾げる。なぜ、海がこの辺りに公園があることを知っているのだろう、そう思つたのだ。

中学三年生の時、由香はこの辺りに越してきたそつだ。中学校の学区とは離れた場所に、彼女の家はある。

海の家は、空の家を基準にして、ここから正反対の場所だ。この場所は、駅でいえば海の自宅の最寄り駅から一駅先になる。空の家の方が海の家より近いが、空はこの辺りの地理には明るくない。海がこの辺りに詳しいといつのが解せないのだ。

しかし、その疑問を口にする雰囲気が、今はなかつた。

泣きじやぐる由香を海に任せ、自動販売機で缶ジュークスを二本買

つてきた。空は、缶ジュークスを公園のベンチに座る海と由香に手渡し、自身もそのベンチに腰かけた。海と空で由香を挟むかたちだ。

遊具場を背に、広場の方に向けて設けられたベンチ。夕焼けが目に眩しい。午後七時を過ぎたせいか、広場に子供もの姿はなかった。

「落ち着いた？」

海の声が耳に届き、空は顔を横に向けた。隣に座る由香がゆっくりと頷いたのが視界に入る。

「ごめんなさい。泣いたりして」

相変わらず沈んだ声で謝る由香に、海は首を横に振る。

「そんなん気にせんでいいって。な、空」

「お、おう。全然気にしてないし。それより、ジュース飲めば？」

喉乾いてんだろ」

手渡したジュースを飲んでいないことに気づき、そう声をかけた空に、由香は小さく微笑んだ。

「ありがとう、いただくね」

そう言いはしたもの、プルトップを開けるのに苦戦している。そんな彼女を見かねてか、海が由香のジュースを取り上げて自身のジュースを差し出した。

「まだ、飲んでへんから」<sup>ヒツヂウモ</sup>

爽やかな笑顔を振りまく海に、由香は礼を言い俯いた。その顔が赤くなつて見えるのは、きっと夕焼けのせいだけではない。

空は溜息をつきたい衝動に駆られた。二人から顔を背け、口を歪めて思つ。

俺、お邪魔ですかー？ と。

一口飲んだジュースは、甘く口に広がった。

「ところで、君島さん。单刀直入に聞くで。さつき言つた話、エリを殺したのは私つて、どういう意味なん？」

いきなり核心を突く言葉に、空は背けていた顔を戻した。表情を強張らせた由香が、ゆっくりと顔を上げる。

また、泣きだすのではないかと身構える。だが、それは杞憂に終わつた。

「エリが死んだ日。私は、エリと会つ約束をしていたの。でも、行かなかつた」

「そんな、行かなかつたくらいで自殺なんかしないだろ

つい声を上げた空に向かって、静にじるといつように海が人差しが唇にあてる。

「でも、私が行つていればエリは死なかつたかもしない。私がエリを裏切つたから、エリはきっと絶望して死んじゃつたのよ。やつと喋つてくれたつて、喜んでたのに、それを私、裏切つちやつて……」

声が震えていた。口元にやつた手も震えている。

「あのさ、やつと喋つてくれたつてどういう意味？」

空は気になつたことをそのまま口にした。

由香は一度肩を震わせ、大きく息を吐いた。空は黙つて由香を見つめる。

「私たち、エリが死ぬ二週間前から、エリのこと無視してたの」「何で？ あ、泣くなよ」

問ひに顔を歪めた由香に、慌てて釘をさす。彼女は頷いた。

「理由はよく知らないの。ただ、ムツコとアンナが、エリのことムカつくから無視しようつて言いだして。私にも、エリを無視しなきゃ絶交だつて……」

尻すぼみになる由香の声。由香は何かに耐えるよつて、持つていたジュースの缶を握る手に力を込めた。関節が白く浮き上がる。

「あの時、凄く嫌だつたけど。でもムツコたちに嫌われるのも嫌で。ごめんなさいつてずつと思いながら、エリのこと無視してたの」

「そうか。しんどかつたな。それは」

海が呟くよつてうらららら。由香は一度口を開じて、目に溜まつた涙を指で拭つた。大きく息を吐き出し、また話しを再開する。

「でも、一週間前に入つた日に、エリに何で無視するのかつて問い合わせられて。全部話したの。私、自分の身可愛さにエリのこと裏切つたのに、エリ、笑つて許してくれた。ムツコやアンナに虐められたら、守つてくれるつて、そんな風にも言つてくれたの」

由香はそこで一度息をついた。手にしていた缶ジュースを口に運ぶ。

「強えな。その、Hリって子」

とても自殺しそうには思えないと続けようとして、自殺は禁句か

もしれないと思いとどまる。空の田に、由香の頷く姿が映った。

「とっても強い子だつた。私と違つてハキハキして。あの日、エリが亡くなつた日。仲直りの記念について、二人で遊ぶ約束をしてたの。でも、私は行かなかつた。その約束してたところをムツコたちに見られて……」

「行くなつて言われたんやな」

溜息混じりの言葉に、由香は肯定の意を吐いた。

「うん。行つたら一生いじめてやるつて言われて、私、怖くなつて。無視したときと同じこと、繰り返しちやつたの」

そして、次の日。

由香はエリの死を知つたのだ。

「私がエリを殺したようなものだわ」

どうして行かなかつたのだろう。

どれだけ自分を恨んで死んだのだろう。

それ以降、そんな思いが由香を苛んだ。

「理沙に……」

「リサ?」

「ああ。えつと、風見さんに、いつまでも落ち込んでたつて仕方ないつて、悪いと思つてるなら、エリの分まで由香が楽しんで生きなきやつて言われて、やつと前向きに考えられるようになつてきたのに……」

「メールが来るよつになつたんやな」

由香は無言で頷いた。空は、いたたまれない気持ちになりながら、視線を上へ向けた。日はもうずいぶん沈み、上方には星が瞬き始めている。

「何とか、何ねーのかな」

「そう、呟いていた。

「んじや、ちよつと調べみいひんか?」

空は、思いついたように声を上げた海に顔を向けた。

「どうやつて？ つていうか何をだよ」

海はよつと掛声をあげて立ち上がる。そして、一人を振り返った。

「もちろん。メールを送つてくる犯人や

言いきつた海は、不適な笑顔を見せる。

「そんなん出来んのかよー」

訝る空に、海はさあと首を傾げる。何とも頼りない。

「まあ、とりあえずは、桜田さんのケータイが今どうなつてるか調べてみよつ」

桜田の実家を知つてゐるかと尋ねた海に、由香は頷いた。

「ええ、時々お線香あげに行つてるから。それと、今度家に呼ばれてるわ」

「そりや、好都合や」

相好を崩す海に、何が好都合なのかと空は思つ。だが、海はそれには触れず、その日一緒に桜田絵里の家に行く段取りをとつた。

「んじや、そりこいつ」と。そろそろ帰らひつや。もつ七時半過ぎてるし

海はズボンの尻ポケットから携帯電話を取り出し、時刻を確認したようだ。

時刻を聞いて由香は慌てて立ち上がつた。空と海は当初の予定通り、由香を家へ送り届けた。

## 第九章 電話じゃなくてわ

夜の八時過ぎに家に着いた。

食卓に出された夕飯は、昨日の天ぷらの残りを乗せた天丼だった。タレの匂いが良い具合に腹の虫をくすぐる。空は、手を合わせていただきますと言つてから箸を手に取つた。

「空、遅くなるなら電話ぐらいしなさいよ。心配するでしょ?」

母が、横に大きな身体を揺らして、麦茶の入ったコップを手に空の前の席に座る。空は、かきこんだ「飯の咀嚼を終えてから、母に答えた。

「だつて、最近公衆電話ないじゃん。電話しようにもできないって反論した空に、母はそう言えればそうねえ、などと呟いている。

空は、ふと壁に掛けてある時計を目にし、母に声をかけた。

「ねえ、母さん。いいの? もう八時過ぎてるけど、いつも見てるテレビ始まってるよ」

「ああ、大変。お父ちゃん。何見てるー」

居間にいる父に呼びかけながら、母は立ち上がりダイニングを出て行つた。

漏れ聞こえる両親の声を聞きながら、ウチつて平和だよなと思つ。

勢いよく食事を終えると、皿を洗つてからダイニングを出る。そして、廊下に置いてある電話に向かつた。受話器を上げて、すでに頭に入つている電話番号を押す。

ほどのくして、電話がつながつた。

『もしもし? 空?』

「え? なんで俺つて分かんの?」

驚いて声を上げた空に、電話の相手は不機嫌な声を上げた。

『空、うるさい。何でそつ、声でかいんだよ』

「悪かつたな。コレが地声だつづーの。いい加減慣れろよな

『空、うるさい。何でそつ、声でかいんだよ』

開き直った空に、光の溜息が届く。

『で、要件は?』

端的に尋ねる光に、もつと話すことはないのかよと思つ。だが、口に出すことはやめた。どう言つても言い争いになりそうな気がして。争いをするために電話したのではないのだ。

「行つて来たぜ、今日。この間言つてた、死人からメールが来るつて子の所」

『へえ、どうだつた?』

お、珍しく話に乗つてきました。と、思つて、空は今日の出来事を語つて聞かせた。

「つてわけ。で、俺達、明後日にその死んだ子の家に行くことになつてんだ」

そう、話を締めくくつた。一拍の間をおいて、光の声が耳に届く。

『空も行くのか』

「まあ、いちおうな。あ、光も一緒に行く?」

光が一緒に来てくれれば、空たちが気付かない何かに気づいてくれるかもしない。以前事件に巻き込まれたときも、光はよく回る頭をフル稼働して事件の真相に迫つたのだ。

それに、そろそろ海と仲直りしてほしい。ケンカしてから一度も、光と海は会つていない。いつまでもこのままでは、空の気がもたない。

『いや、やめとくよ』

「何でだよ。いいじやん。暇だろ」

『空と一緒にしないでくれ。別に暇じゃない』

間髪入れずに返されて、空は頬を膨らませた。どうせ、見えはないが。

『空は行くんだろ? だったら、また教えてくれよ。どうだつたか。あと、亡くなつた子の家に行つたとき、聞いてほしいことがあるんだ……』

簡単な問い合わせ句。だが、空にはそんなことを聞いて何になるの

か分からぬ。

「え？ 何で？ つか、何でそんなこと聞かなきゃなんないわけ？」

興味がないのではなかつたのか。

空は、首を傾げつつ光の答えを待つ。

『嫌なら、別にいいけど……』

「あ、聞く聞く。ちゃんと聞いてくれるって。な。だからまだ切るな

よ」

慌てて声をあげて、空は一度大きく深呼吸した。回りくどいのは好きじゃない。いつなつたら単刀直入に言つてみよつと、空は心に決めた。

「あのむ、海と仲直りしろよ」

しばらぐ待つたが、光から返答はない。

空は、受話器から延びるコードを片手で弄びながらまた口を開く。

「せつかく、兄弟だつて分かつたんだし。仲良くなれたいじゃん。お前だつて、今の感じ嫌だる」

『まあ、な』

空は、光の返事に安堵の息をついた。よかつた。これで、別に何とも思つてないなどと言われたら、もつひとつしていいか分からなかつた。仲直りしたいと少しでも思つてゐるなら、今の関係を改善できるチャンスはある。

『でも、僕じやなくて、海が嫌なんだろ。僕には海が何に怒つてるか分からぬし、謝るつもりもないから。海が僕に会つてもいいと思つまで会つつもりはないよ。じゃあ、そろそろ切るから』

そう言つて、空の返答を待たずに、光は通話を切つてしまつた。

「もー、なんでそんな頑固なんだよ。光のバカ」

空は、通話の切れた受話器を握りしめ、そう叫んだのだった。

## 第十章 光はその日

駅前の繁華街を抜けると、急に寂しい住宅街になる。ビルや店のあかりで明るかつた路地は、住宅街へ入ると暗さが一気に増した。等間隔に並んだ街灯の数が不十分なのだと、彼女は思う。

送ると言つていた男に、頷けばよかつたと少し後悔する。彼氏と別れたらばかりで、下心のありそうな男性の申し出を受ける気がしなかつたのが、正直なところだ。だが、こうして人通りのない夜道を一人歩いていると、不安になる。その不安を煽るように、背後から足音が聞こえてきた。

驚き、彼女は振り返る。

だが、暗い夜道の向こうに人影はない。

気のせいか。そう思い彼女は、また前を向いて歩きだす。

心持ち、速度を速めて。

だが、その速度に合わせるように、また彼女の背後から足音が聞こえるのだ。

かかとを擦つて歩くような足音。

彼女のミユールの音が歩幅に合わせて、大きくそして早くなる。後の足音もそれに合わせるかのように速度を上げる。

つけられている。

彼女の中で、疑惑が核心に変わった。

振り返るのが怖い。

彼女は、全速力で家へ向かつて走った。

いつの間にか、足音は聞こえなくなっていた。

クーラーのきいた自室で、たつた今通話を終えた携帯電話を、ベ

ツドの上に放り投げた。

自身の身体もベッドへ投げ出す。すぐに顔を顰めたのは、先ほど放った携帯電話が背中に当たつたからだ。寝こんだまま少し背を上げて、手探りで携帯電話を取る。

さて、どうしようか。

そう思つて、光は携帯電話を顔の上に掲げた。逆光で影に隠れた携帯電話をただ見つめる。不意に、咳が襲つてきた。慌てて携帯電話を握つた手の甲を口元にあてる。

苦しい。咳が止まらない。

光はパニックになりそうな思考を抑えて、咳を繰り返しながら、注意深くゆっくりと、荒い呼吸を抑えるように息を吐く。

大丈夫だ。これくらい。大丈夫。

自分に言い聞かせながら、深呼吸を繰り返した。それでも合間に、咳が漏れる。

幸い軽い発作だったらしく、しばらくすると咳は治まった。薬を使うほどでもなかつたようだ。

楽になつてきた呼吸を整えるように、息を大きく吐き出す。まったく、こんなことで発作を起こすなんて。

しばらく、喘息の発作はでなかつたので、油断していた。

光が喘息の発作を起こすのは、心因的要因が大きいと医者に言わ  
れている。

今、考えうる心因的要因と言えば……。

海のことか。

そう、結論付けて、光は苦い顔をする。

いつものことじゃないか。嫌われるのは。

そう、いつものことだったはずだ。いつもの。

そこまで考えたとき、ずっと握つたままだった携帯電話が、バイ  
ブレーションとともに音をたてた。

半身を起こすと、相手を確かめずに、光は通話ボタンを押した。

「もしもし……」

『あの、春名くん?』

聞き覚えのある声に、思い当たつた顔を脳裏に浮かべる。

「ああ、伊藤さん。どうかした?」

我ながら、ひどい声だ。掠れたような低い声。さつきまで発作を起こしていたのだから仕方ないが。

『あ、ごめん。寝てた? 今、話しても大丈夫かしら』

掠れ声を寝ていたせいだと誤解したのだろう。静の言葉に光は苦笑いを浮かべた。

「いや、大丈夫だよ。何?」

問い合わせると、静は話し始めた。今日、メールの来ている友人たちと集まつたこと。その時、メールが来たこと。空から聞いたこととほぼ同じ内容だった。

『春名君はどう思つ? 誰が、私たちにメールを送つてきてるか、分かるかしら』

「分からんな」

間髪入れずに入れる。静からそれに対する返答はなかつた。

「でも、可能性のある人物なら数人いる」

『なら、聞かせて』

静の挑戦的とも取れる口調に、どこか違和感を覚えたが、光はそんなことはおくびにも出さずに口を開いた。

『それだけ君たちのこと詳しいなら、人数は限られる。君たちのまわりにいた人物、もしくは君たちの中の誰か』

そこで、光は一度息をついた。そして、沈黙を守つていてる静に届くように続ける。

「もしくは、君自信か……」

光の耳に、静の笑い声が響く。驚いて、光は少し携帯電話を耳から遠ざけた。

『ごめんなさい。あんまりはつきり言つからおかしくなっちゃつて』笑われるとは思わなかつた。笑い続ける静に、光は憮然とした表

情を作り、携帯電話をまた耳にあてた。

『ねえ、他には？

他にはいないの？』

笑いを押さえた静に問われ、光は一度顎に手をあててから口を開く。

「そうだな。あとは、亡くなつた彼女の家族の誰かかな」

『うん、実は私もその可能性が一番高いと思ってたの』

「どうして」

興味を引かれて尋ねると、静はどこか嬉しそうに先を続ける。  
『だつて、最初に来たメール。あれ、エリのケータイのアドレスと同じものだつたって、ユカが言つてたから。それが本当なら、エリのケータイを持つてる人物は、家族くらいしか思い浮かばなくて』  
確かにそうだ。一番、亡くなつた少女の携帯電話を手に入れやすい環境にあるのは、その少女の家族だ。静や、他の関係者では難しい。

「明後日、空たちがその亡くなつた子の実家に行くらしい」

『空つて、ああ、高橋君ね。仲直りしたの？』

聞かれて、思わず咳きこんだ。これは発作ではない。

「いや、仲直りつて。そもそも喧嘩してないし」

『でも、初めて会つた日、喧嘩してたでしょ……あ、喧嘩してたのは紫藤君とか』

言い当てた静に、苦い思いを抱きながら、光は溜息をついた。

『早く仲直りした方がいいわよ。で、それより明日なんだけど』

余計なひと言の後に、静が言い淀んだ。何かと思い言葉を待つ。

『明日、時間ないかしら。あの、会つてもらいたくて。ムツコたちに』

ムツコの名は空の口からも聞いている。空には暇じゃないといつたが、本当は特に用事はなかつた。それに、一度会つて話を聞いた方がいいだろう。海は光の危惧したとおり、この件に首を突っ込んでしまつたのだから。

もう一度溜息をついて、光は肯定の意を静に伝えた。

## 第十一章 女つて

今日もよく晴れていた。最近雨が少ない。このまま降らなければ、また水不足だと騒ぎ出すのではないか。

青空に目を向けていた光は、ゆっくりと視界を街中に戻した。行きかう人の多い、駅前の噴水広場。その噴水の縁に彼は腰かけている。時折飛沫が服の背にかかるが、気にしない。

あと五分で、待ち合わせ時間の午前十時半になる。ずいぶんと日も高くなり、暑さも増してきた。

「あ、春名くん？」

突然呼びかけられて、そちらに顔を向けた。そこにいたのは、見慣れた少女の姿だった。

「ああ、朝倉」

「すごい、偶然ね。信じられない。こんな所で何してるの？ 待ち合せ？ 私も今日は友達と待ち合わせなの」

嬉しそうに、駆けよってきて光の隣に腰かけたのは、クラスメートの朝倉有紀だ。朝倉は、光と同じクラス委員をしているので、光にとつては話しやすい女生徒だった。

「朝倉、そんなにいつぺんに言われても、答えられないよ」

「えへへ。ごめんね。だつて嬉しかったから、春名君に会えて。夏休みつてつまらないわよね。だつて春名君がいらないんだもん」

にこにこと笑顔全開の朝倉。どうして、いつも簡単に、人に好意を向けられるのだろう。

光には理解できない人種である。その、理解できない人種である朝倉を、ついまじまじと見つめてしまつ。すると、朝倉の頬がほんのりと赤くなってきた。

光は軽く首を傾げる。

「暑い？」

「へ？ 何で」

光は朝倉の頬の辺りを指差した。

「赤いよ、顔」

「もつヤダ、春名君つてばー」

言ひやいなや思いつきに背中を叩かれた。

かなり痛い。

「あ、ごめんなさい。春名君」

慌てたように声を上ずらせる朝倉に、なんでもないといつて元氣によつて手を上げた。

その時である。遠慮がちに、光を呼ぶ声が耳に届いた。

わちらを振り向くと、光の目に一人の少女の姿が映った。

白衣、レトロ調のワンピースを着た少女が光のもとへ駆け寄つてくる。

「あの、ごめんなさい遅くなつて。そちらは？」

そう言つて、伊藤静は朝倉に田をやつた。

「は、は、は、春名君。待ち合わせつて女の子だつたの？」

「ああ。じゃあ、また学校で、朝倉」

光は、朝倉にそう声をかけ、横に立て掛けていた折り畳み式の杖を手に、立ち上がつた。

「あ、うんバイバイ」

どこか力なく手を振る朝倉に背を向けて、静を伴つて駅の繁華街の道を進む。

「よかつたの？ 今の子、彼女？」

「いや、クラスメートだよ」

静は、ふーんと、どこか腑に落ちない顔をしている。先日はお下げにしていた髪を、今日は下ろしている。サイドの髪は後ろで一つにして、バレッタでとめていた。髪型を変えただけでも、ずいぶん印象が変わる。それに明るい色の洋服を着ているだけで、ずいぶんと垢ぬけて見えるのだ。

「似合つね」

「え？」

「その格好。見たときびっくりしたよ。可愛くなつて」

淡々と、表情すら動かさずに光は言ったが、静は恥じらいよう

目を伏せた。

「ありがとう。春名君、いつもわざわざうしと真顔でいうの？」

どういう意味か分からず、光は黙った。光は小さい頃から、育ての母に、女の子が普段と違う格好や髪形をしていたら褒めなさいと教えられていた。それに、母自身も髪形を変えたときに気づかないともぐれてしまうのだ。そのため、女性の変化には敏感になつていった。

静は、どこか落ちつかなげに、視線をやまなくさせた後、光の足元を見て口を開いた。

「私も、びっくりしたわ。足、悪いの？」

光は首肯した。以前、事故で足を負傷して以来、遠出をするときはいつも杖について歩いている。

「ああ、以前事故に遭つてね。それより、これからどうあるんだ」

「あ、ああ、あの、この近くの喫茶店で待ち合わせしているの」

静に導かれながら、光は目的の喫茶店に向かった。

午前十一時を過ぎたころ。暇を持て余していた空は、実家である本屋の前で掃き掃除をしていた。近くにある惣菜屋からとても、いい匂いがこちらに漂つてくる。遠く、魚屋の大将の客引きの声や、小さな子供の鳴き声も聞こえる。自転車が、ベルを鳴らして、空の横を通り過ぎた。

いつも通りの、商店街の風景だ。

あらかた、掃き終えて店内に戻るゝとしたときである。空はビックからか名前を呼ばれた気がして、そちらに顔を向けた。

「いーたー。高橋ー」

そう声を上げたのは、少女だった。まだ結構な距離があるが、そ

の声は商店街中に響き渡るような大声であった。

何事かと、店に前にいた空や、あちらこちらの店から店員が顔をのぞかせる。

「あ、朝倉？」

ようやく顔を認識した空の前に、ものすごい勢いで到着した朝倉は、空の首を絞めるかのじとく襟首を掴んだ。

「ちょっと、どうこいつことなのよ！ あの女誰！」

口調に呑わせるように、襟首を掴んだ腕を動かすので、空の体は前後に大きく揺れる。

「ちょ、ちょ、朝倉。離せよ」

空は、堪らず朝倉の手を無理やり外させた。

「おまえ、なんだよ。いきなり」

睨みつけるように、朝倉を見ると、朝倉は怒りの形相を空に向けた。

「だから、あの女誰よ！」

「知らねーよ。女って誰だよ！」

大声に大声で返す空。

「それは、だつて。うう」

走ってきた勢いはどこへやら。朝倉は顔を歪ませた。

それに、慌てたのは空だ。片足を一步引いて、朝倉の前に手をかざす。

「な、泣くなよ。頼むから」

気づくと、いつの間にか、自分たちは注目の的だった。人垣ができるつつある。様子を見に来たらしい、酒屋の店主と八百屋の店主から、ヤジが飛ぶ。

「おうおう、修羅場だな。空ちゃん」

「やるねー。空。いよっ、色男」

「やめろつづーの。オッチャンたち、面白がってんじゃねーよ」  
そのヤジに怒鳴った空に、穏やかな声がかかる。

「空、店の前じゃなんだから、上がつてもらいなさい」

声の方を見ると、声と同じ穏やかな表情の父がいた。

「ちょっとは落ち着いたかよ」

自室のドアを開けると、中にいた朝倉に声をかけた。空の手には母に渡された麦茶入りのコップが握られている。

「コレが、落ち着けるわけないでしょ！」

ものすごい剣幕で怒鳴られた。大変不本意である。小さな四足テーブルに麦茶の入ったコップを置く。それを朝倉は一気に飲み干した。その様子を、テーブルに肘をついて見ていた空は、朝倉に声をかける。

「つーか。何で俺が怒鳴られなきゃなんないわけ」

その言葉に、朝倉は虚をつかれた顔をした。

「何その顔」

一応突っ込んでおく。

「あー。「ごめん。ちょっと動転しちゃって」

浅倉は落ち込む様に肩を落とす。

「んで、何。女って」

「そう、女なのよ。春名君が待ち合わせで女だったのよ」

言いきつた朝倉に、空は変な顔をする。

「はあ？」

「違った。春名君の待ち合わせしてた子が女の子だったの。それも清楚系の。誰あの女。春名君のなんなの？ 彼女？ 「冗談じやないわ！」

思い切り机を叩く朝倉。手も痛いだろうに、その痛みを感じなくなるほど腹を立てているということか。

「え？ 光が女と待ち合わせ？」

昨日言っていた暇ではないといふ言葉が思い起こされる。彼女とデートがあるから暇ではないと、そう言う意味だったのだろうか。

何かムカつく。

「俺、あいつに彼女いたなんて初耳なんだけど」

剥れた様な空に、朝倉は眉を寄せた。

「何それ。高橋は春名君と仲良いくせに知らないの?」

「別に、何でもかんでも知つてゐわけじゃねーよ。あいつ、何考えてつか分かんねーとこあるし」

昨日だつてせっかく海と仲直りしようと勧めたのに、ヘンな理屈をこねて相手にしなかつた。

「高橋も知らないのかー。もう、最低。春名君は私のものなのにー。春名君ー」

「いや、光は朝倉のモノでは絶対ないから」

突つ込みを入れたとき、空は朝倉の鞄から音が漏れていることに気付いた。

「おい、朝倉。ケータイ鳴つてねえ?」

朝倉はその言葉に、鞄に目を向けた。そして、驚愕したようにカバンをひつつかんで携帯電話を取り出す。

「やばい、友達と待ち合わせしてたんだつた。ごめん高橋、行くわ言いながら、朝倉は部屋を飛び出した。

「嵐のような奴だな」

半ば呆然と空は朝倉を見送った。

## 第十一章 一人の言い分

あの日、彼女が来なければ。

きっと、今頃こんなことにはならなかつた。

あの日、自分があの場所へ行かなければ。

きっと、彼女は死ななかつた。

それを知っている誰かが、いる。

それを知っている誰かが。

案内された喫茶店は、少し空調がききすぎていた。暑い外から來たからそう思うのかもしぬないが。

店員が注文の品をすべて持つて来たのは、静がちょうど待ち合っていた二人の紹介を終えたころだつた。

「なんとかアタシ、最近ついてるなあ」

満面の笑みを浮かべ、静に川崎杏奈と紹介された少女がそう言った。意味ありげな視線を投げてくる。光はその視線に気づかないふりをして、杏奈の隣で落ちつかなげに座つている石井睦子を見た。

日焼けした肌が健康そうに見えるが、表情がやけに硬い。二人とも、どちらかというと派手な格好だ。おとなしいタイプの静とは縁がなさそうに見える。まあ、学校は制服であるし、見た目の違いは関係ないのかもしれないが。タイプというのは大体において、似て来るものではないのだろうかと、光は首をかしげた。

本当はもう一人誘つたそうなのだが、今日は別の予定があるということで、ここに来ることは出来なかつたらしい。

「いいなあ、シズカ。カッコイイー」

「アンナ。ダメよ」

静が、短く奢めるような声を上げる。

「あ、大丈夫よー。シズカの彼氏とつたりしないってー。アイツじやあるまいし」

「ちょっと、アンナやめな」

へらへらと手を振った杏奈に、睦子の鋭い声が飛んだ。

場が一気に静まる。光は、静の恋人として二人に紹介されていた。彼女がそう望んだからだ。静の狙いがどこにあるのかは分からないが、光にとつてもそれは望ましいことだつた。メールのことを調べていると言つて、下手に警戒されても困るからだ。もし、この二人の内どちらかが、あのメールに関わっているとしたら、上手く話を聞き出せない可能性がある。

「ごめんなさい、私、ちょっとお手洗いに」

沈んだ空氣に、居づらくなつたように、静が席を立つた。これは予定内の行動だ。

光が、彼女に一人に会つたら一度席をはずしてほしいと頼んだのだ。静が席をはずすことで、静がいるときには出ない話が出るかもしれない光は考えたのだ。もちろん、その考えを直接彼女に伝えはしなかつたが。

手洗い場に向かう静の背を見送つたあと、杏奈が声を上げた。

「ねえ、ねえ。春名くん、春名君つて超イケメンだよね。いいなー 静つてば。私もイケメンゲットしたいー」

睦子が杏奈に顔を向け、溜息をつく。

「アンナはイケメン好きだもんねー。」「ごめんね、春名くん。うるさくて」

「いや。それより、さつき言いかけてたアイツつて誰のこと?」  
睦子と杏奈の顔を代わる代わる見ると、二人は困つたような顔をした。

「そんなこと聞いてどうすんのよ」

不機嫌な声を出す睦子に、光は眼鏡の奥の瞳を向ける。

「気になつて。さつきの言い方じや、誰かに彼氏を取られたみたいだつたから。興味本位だよ。教えてくれないかな」

じつと、光は睦子を見つめた。しばらく見つめていると、耐えきれなくなつたのか、頬を赤く染めて俯いてしまつた。

「ムツコー。なーに、赤くなつてんのよお」

変な笑いをしながら、杏奈は睦子を肘でつついた。

「別に、赤くなんてなつてないわよ。それより、春名くん。アイツ

……のことよね」

睦子はまだ赤い顔を一度振つてそう言つた。

「教えてくれる？」

尋ねると、杏奈が大きく頷いた。

「アイツつていうのはー。アタシらの中学生んときのダチなんだ。シズカがアタシらに彼氏紹介してくれたのね。そしたら、その彼氏がさ、エリに惚れちゃつてー。シズカつてば振られてんの」

杏奈は、爆笑している。

「へえ。取られたんじゃなくて、振られたんだ」

「そう。でも、シズカはそう思つてなかつたみたい」と、睦子が口を挟んだ。どういう意味かと問い合わせ返せば、睦子は肩をすくめた。杏奈が代わりに答える。

「シズカつてば、ああ見えてプライド高いんだよ。だから、エリが……、あ、エリつていうのが中学んときのダチの名前ね。エリがシズカの彼を誘惑したんだつて言つてたの」

「そうそう。シズカつてお嬢だからさ。セレブよセレブ。男を金と顔でしか選んでないの」

杏奈と睦子は顔を見合わせると、ねーと声を揃えた。

「その点、春名くんは合格だよねー」

「ここにこと笑う杏奈に、曖昧に返事をして、光は少し考える。

エリという名前には、聞き覚えがある。あの、自殺した少女の名前が桜田絵里だつたはずだ。

「その彼氏はエリつて子と付き合つた?」

光はゆっくりと、眼鏡を人差し指で押し上げた。杏奈は笑いながら手を左右に振る。

「まっさか。だつて、エリそのあとすぐ死んじゃつ……」

「ちょっと、アンナ。喋りすぎ」

慌てたように、睦子が杏奈の言葉を遮った。

やはり、そうだったか。光は杏奈の言つエリが、亡くなつた桜田絵里だと確信した。空の言つていた、エリを虐めた理由が、この辺りにあるのかもしれない。

「ごめん。ムツコは本当におこりっぽいんだからー。ねえ、春名くん。シズカに飽きたらあ、私と付きあつてね」

笑顔全開で、杏奈が甘えた声を出した。光は返事に詰まる。なんと答えようかと思っていると、睦子が声を上げた。

「まつたー。アンナはすぐこれだ」

「えへへ。でも、ムツコだつてカツコいいつて思うでしょ。ムツコ、彼と別れたばかりなんだから、ムツコもお願ひしどきなよお。もちろんアタシの次だけだ」

「しないわよ。アンナじゃないんだから。アタシは別れてせいせいしてるんだもん。しばらくは独り身でいいの。だから、春名君。気にしないでね。シズカああ見えてお嬢気質などあるから、疲れるかもだけどさ。末永くよろしくしてやつて」

光は少なからず驚いて、睦子を見つめた。睦子はきまり悪そうに、光から視線を逸らす。

「君たちは本当に友達なんだね」

睦子は眉を顰めて光に目を向けた。

「何それ、どういう意味？」

「あはは、分かる。シズカつてば、見た目大人しいからさ。ぱつと見アタシらとタイプ違うじやん。だから、友達っぽく見えないんだよね」

杏奈はここにこと笑顔を光に向ける。

「いや、まあ。そうだな」

「つつわ素直に認めたよ。この人」

苦笑交じりに睦子が杏奈を見る。杏奈は口の端を上げた。

「まあ。そう見えちゃうのも仕方ないかなー。シズカって金払い良いんだよねー、お嬢だから。よくおごつてもらつてるもん。あ、だからと言つて財布代わりにしてたわけじゃないよ。嫌な奴なら、お金積まれたつて一緒にいないもん。ね、ムツコ」

「うん。あ、シズカが戻ってきた」

その言葉に反応するように、杏奈が手を振る。振りかえると、確かに静がこちらに向かつて歩いてくるところだつた。

戻ってきた静は、先ほどと同じように光の隣の席に着いた。「何の話してたの？」

「いや、春名君かっこいいからさー。シズカに飽きたらアタシんとこおいでつて言つてたのー」

「もー。アンナはすぐそれだ」

そう言つて、笑いあう女たち。光は疲れた気分で、壁に視線を向けた。

その時である。携帯電話の着信音が聞こえてきた。静と睦子の鞄の中から、音が漏れている。テーブルの上に置いた杏奈の携帯電話が、バイブレーションに合わせて音と光を放出していた。すぐに音が途切れたところを見ると、メールだったのだらう。

笑いが一気におさまる。それぞれの視線が自身の携帯電話のある位置に向かう。

「見ないの？」

問うが誰一人として、見よとはしない。

「静、見せて」

光は、静に片手を差し出す。彼女は、我に返つたように鞄に手を伸ばした。携帯電話を取り出すと、メールを開いてから光に手渡す。

『どうして、無視するの？　どうして？　あんなに、仲よくしてたのに。私が何をしたつていうの？　ひどい、ひどいよ。どうして、私を殺したの？　ひどいひどいひどいひどいひどいひどい…』

…』

ひどいといふ言葉が画面を埋め尽くす。スクロールを途中でとめて、光は静に目を向けた。

「何、このメール？」

静の言つていた、死人からのメールだということはすぐに分かつたが、光は敢えてそう尋ねた。静は、光に差し出された携帯電話を手に取る。文面を読んで、心無し青ざめた顔を光に向かえた。

「心当たりがある？」

静は、光から顔を逸らし俯いてしまった。その前で、恐る恐るといつた体で、携帯電話を開いた睦子は、悲鳴のような声をあげて携帯電話をテーブルに放り投げた。

「もう、嫌。これきっと呪いよ、呪いなのよ。エリの呪い！ そのうちアタシたち殺されるのよ」

頭を抱えて、机に突つ伏す睦子の肩に、杏奈が心配そうに手を置いた。

光は嘆息すると、注文していたアイスティーをすべて飲み干した。

「お茶も飲み終わつたし、石井さんが落ち着いたら場所変えて話しそう。いいよね、静、川崎さん」

尋ねると、静と杏奈はゆつくりと頷いた。

## 第十三章 いい加減にしろよ

お焼香を終えた人々が、彼に声をかけていく。しかし、彼にその言葉が届くことはなかつた。

ただ、彼女ともう逢えないのだということが、彼の頭を占めていた。

彼女の明るい笑顔や楽しげな笑い声も、見聞きしてきたはずなのに。

何一つ思い出せない。

いま思い出せるのは、宙に浮いた彼女の足が力なく揺れる様。自殺した彼女を発見したのは彼だつた。

どうしてあの日、早く帰らなかつたのか。早く帰つてきてと言われていたのに。なぜ、早く帰らなかつたのか。なぜ、どうしてと。後悔ばかりが、彼を苛んだ。

それは数年たつた今でも、彼を蝕み続けている。

落ち着いたかと尋ねた光に、杏奈は頷いた。喫茶店から一番近いということで、今は静の家に場所を移していた。

光の家と変わらぬほどの大きな邸である。大きなテーブルが真ん中に鎮座している。壁に掛けられた絵画は名のある画家が描いたものだ。壁際に置かれた棚には大きな壺が乗っている。こちらも高価そうだが、洋室であるこの部屋には不似合いだ。

ずいぶん成金趣味だな。この部屋に入った光の第一印象がそれだつた。

テーブルを挟んで向かい合わせに置かれた大きなソファーに、彼は座っていた。ちょうど杏奈の正面の位置だ。

光の隣には静が、杏奈の隣には睦子が座っている。

「「ゴメン。ちょっとさ、最近、メールの内容がこんなになつてきてブルー入つてたんだ。店で大声出してゴメン」

睦子は顔の前で手を合わせた。

「いーよー。気持ち分かるし」

「そうよ、ムツロ、気にしないで」

女性陣が睦子に口々に声をかける。光はそれを黙つて聞いたあと、ゆつくりと口を開いた。

「ところで、石井さん。さつき言つてた呪いつてどういう意味？」

单刀直入に聞いた光に、三人の視線が集中した。最初に口を開いたのは睦子だった。

「アタシ黙つてたんだけど、実は最近さ、ビリにも誰かにあとづけられてる気がして。それが、もしかしたらエリなんぢゃないかなあつて思うときがあつて」

「なにそれ。超怖いんだけど。そり言えば、私もそんな気がしなくもない時もあつたけど」

杏奈が声をあげた。結局どっちなんだと言いたくなる。静の方をそつと見ると、静は難しい顔で、立てた親指の爪を噛んでいた。

「静も、同じ目に？」

「え？　いいえ。私は……」

抑えた声を漏らす静。光は内心嘆息した。メールだけではなかつたのか。否、嫌がらせのようなあのメールのせいで、彼女たちの神经が過敏になつていてるだけかも知れない。

「必要以上には怖がらなくていいと思うけど、でも気をつけた方がいいな。夜遅く出歩くのを避けたり、どうしても気になるようなら

警察へ……」

行つたらどうかと続けようとしたが、それを遮るように、睦子が声をあげた。

「行けるわけないじゃない！　警察なんて！」

叩きつけるような言い方に、全員が睦子に目を向ける。

睦子は我に返つたように、目を見開いた。そして、そそくさと立

ち上がる。

「ゴメン、アタシ帰る」

「ちょっと、ムツコ。ムツコが帰るならアタシも帰るー」

すでにドアノブを掴んでいる睦子の背に声をかけ、杏奈も立ち上がる。せわしなく光たちに手を振つて、睦子に続いて部屋を出て行つた。

「彼女たち、どうしたんだろうな」

光が静に声をかけると、静は首を横に振つた。

「さあ、私には分からないわ」

静から、抑揚のない声が返ってきた。

伊藤家を後にした光は、タクシーを拾つた。

途中、病院に寄つたので思つたよりも帰宅が遅くなつてしまつた。光は腕時計に視線を落とす。針は六時半を示していた。この時間では、家政婦はもう家へ帰つているだろう。

誰もいないと分かつてゐるが、鍵を開けて家の中に入るとただいまと声をかけた。

もちろん、返事はない。薄暗い家の中へ上がると、光は一階にある浴室のドアを開けた。

「あ、お帰りー」

思いがけず声がかかつて、光は珍しく呆けた顔をした。口を大きく開けて、部屋にいた人物を凝視する。

「な、何してんだけ。ここで」

「何つて、おまえを待つてたんじやん」

あつけらかんと、空が笑つた。

光は頭が痛くなるような思いで、壁に寄り掛かる。

「坂内さんがさー、光居なつて言うから部屋にあがらせてもらつたんだ。今日はアイスケークリつつのをじあそうになつた。んまか

つたぞー。おまえんち、こつともお菓子あるから好き」

幸せそうにそう報告する空に、力が抜ける思いがする。坂内さんまで手なずけたか。光は内心苦笑した。

坂内さんは、この家の家政婦をしてもらっていた女性である。誰に対しても屈託なく接する空は、誰にでも大抵好意的に迎えられるようだ。

光はゆっくりと歩いて、床に座った空の前に腰を下ろした。片膝を立て、痛む足は伸ばす。

「おまえさー、あいつどりにかしるよ」

空は唐突に顔を顰めた。よくじるじると表情を変えるものだと感心する。

「あいつとは？」

簡潔に疑問を口にすると、空の表情がより苦々しいものになった。

「あいつだよ。朝倉。朝倉の奴、俺んとこ怒鳴りこんできたんだぜ」

怒ったように空は胸の前で腕を組んだ。

「怒鳴りこんできたとは、穩やかじやないな」

「だろ。しかもあいつなんて言つたと思つ? あの女誰! って言いやがつたんだぜ、人前で、俺に」

自身を指さす空。光は眼鏡の奥で瞬きを繰り返した。

「おまえたち、そういう関係だったのか」

その発言に、空は大声で答えた。

「お前まで言づか、ちっくしょー朝倉の奴、恨むからな」

頭を抱える空の前で、光は眉を寄せている。

「光、朝倉と会つたんだろ。朝」

聞かれて頷いた。確かに静と待ち合わせしていた噴水広場で会っている。

「けど、朝倉は友達と待ち合わせしていると言つてたけど」

「あいつ、忘れてたみたいだぜ。お前が女と待ち合わせしたことかよっぽどショックだつたんじゃねえ? 僕にあの女誰つて聞いただしに来たんだよ」

「へえ」

としか言いようがなかったのだが、空は不満だったようだ。むつりと頬を膨らませた。

「へえ、じゃ、ねえよ！ おかげで俺、二股かけたことが女にばれた男つてことになつたんだぜ、近所で」

空は、怒鳴つた勢いのまま床を叩く。

「空が、二股かける男？ ありえないだろ」

「だろだろ。なのに、そう思われちゃつてんの。親までさ、空に彼女ができたつつて、喜んじゃつて。二股は俺がやるわけないって思つてるみたいだけど。母さんなんか赤飯炊きそうな勢いでや」

「それはまた……」

光は緩みそうになる口元を押さえた。結構、大事になつてているらしい。はたから聞いていれば、面白いのだが、本人にしてみれば迷惑な話だろう。

「だから、面倒臭くなつて、逃げてきた」

「は？」

「今日泊めて？」

空は可愛く小首を傾げた。そんな仕草をすると、本当に女の子のようだ。そう思つたことは伏せておいて、光は無表情で応じた。

「何でそつなるんだ」

「ほら、ちゃんとお泊りセットも用意してきたしさ」

ポンポンと傍らに置いてあつた、少し大きめの鞄を叩く空。光は脱力した。答えになつていない。

「坂内さんも、俺の分の「ハハン用意してくれたしさー」  
いいだろ？ と聞いてくる空。

「坂内さんが？」

少し驚いてそう漏らした光に、彼は頷いた。

「そう。来たときちょうどみさきさんが帰つてきてて、すぐ出でつたけど、坂内さんに俺のこと頼んでつてくれたんだよ」

光は溜息をついた。まったく、女性陣は空に甘い。ちなみに、み

さきさんとは、光の母親だ。

「分かつたよ。泊つていけば」

「何その投げやりな感じ」

少し不服そうな空だったが、すぐに気を取り直したように笑顔になつた。

何かを思いついたのかもしれない。

「ま、いつか。ってことで飯食おうぜ。腹減つた」

どこまでも平和そうな空の顔を見ていると、肩の力が抜ける。

光は、夕食を取る気がなかつたのだが、仕方なく空につきあつことにした。

ケータイサイトで見つけた日雇いのバイトを終えて家に帰った海は、早速、皿洗いをさせられていた。むろん、母親の命令である。紫藤家では女性が優位なのだ。医者をしている父親は寡黙で、いつも母親が一方的に喋っている。

海自身は外で夕食を済ませてきたので、今洗つてこるのは両親の使つた皿というわけだ。

「海。話があるんよ」

母親が、背後から話しかけてきた。それに振り向くことはせずに、答える。

「何?」

手は規則正しく、蛇口から流れる水で皿を濯いでいる。

「今度の、お墓参りやけど……母さんたち、仕事で出なあかんのよ。だから、皿をすらして……」

海は水を止めて、母親を振り返った。皿洗い終了だ。

「いいつて。俺一人で行つてくるわ。俺の問題やし、おばさんにおき合つてもらわんでもええよ」

海は目を伏せるようにしながら、口元だけで笑顔を作った。

「でもなあ。こつからいやと遠いし、あんた行き道分かるんか?」

「あのなあ、おばさん。俺をいくつやと思つてんねん。遠いつたつて、じつから三駅くらいしかないやん。関西に住んでる頃に比べたらぐづつと近いやんか。それに、おじさんに行き道聞いたらいけるつて」

海の言つおじさんとは、今の父親のことです。おばさんとは今まで前にいる女性だ。外では便宜上、今の両親を『父さん』、『母さん』もしくは、『おとん』、『おかん』と呼んでいるが、面と向かってそう呼んだことはなかった。いつも『おじさん』、『おばさん』だ。

「ほん、生意氣やこと。つここの間までペーペー泣ことつたくせに」

「いつまでも昔の話ばかりして。年取った証拠やで、減らず口を叩く海の頬を、近づいてきた母親が容赦なく捻つた。

「痛へへへ

「そんなことをこゝの口はいの口か

「いじ、ごめんなさい

「よひしこ

素直に謝ると、あっさりと手を離した。痛む頬をさすって恨みがましく母親を見る海に、彼女は表情を引き締めて声をかけた。

「あんた、最近イライラしてるや。やっぱり、あることが原因か？ 前から思つてたんやけど、あんた毎年この時期になると情緒不安定になつてる気がするんよ」

海は一瞬言葉に詰まる。一度顔を伏せた後、母親に田を合わせた。柔らかい笑顔をつくる。

「気のせいや。で、洗いもんも終わつたし、風呂に入るわ

そう言つて、母親の横をすり抜けた。母親から見えない位置になると、海の顔から表情が消えた。

田を覚ますと、すぐ田の前に人の顔があつて、空は悲鳴のような声をあげた。

「ぎやー、おばけ！」

そう叫んだのは、横にあつた顔が妙に綺麗だったから。

腰を浮かせて、身を引いたら浮遊感に見舞われた。

落ちる。

思わず田を瞑つたところで、腕を掴まれた感触とともに、身体が引き戻される。心臓が煩い。

「朝から、何やつてんだよ。つていうか、誰がおばけだ」

疲れた声が耳に届く。

うつすらと田を開けると、光が空を見上げていた。

混乱する頭で周りを見回して、ここが光の部屋であること、そして何故か、同じベッドで眠っていたことを知る。横になつてこぢらを見上げている光の手が、空の腕を掴んでいた。

「な、なんで俺たち一緒に寝てるの？」

腕を掴まれたままゆっくりと背後を振り返る。ベッド脇の床に、布団が敷いてあるのが見える。昨夜、自分で敷いてその上に寝ていたはずなのだが。

「おまえが……」

「え？」

光の声に思わず、目線を下げた。いまだ横になつて、空を見上げている光の顔はいつにも増して不機嫌そうだ。

「おまえ、途中でトイレいつただろう。部屋帰ってきたと思つたら、寝ぼけてこっちに入つてきたんだよ」

「お、起こしてくれればよかつ……あー『ゴメン』

よかつたのにと続けられなかつたのは、自分が一度眠りに落ちたらちよつとやそつとじや起きないと知つてゐるからだ。

ベッドが少し、軋む。光が半身を起した音だ。

「僕が下で寝ようと思つたけど、おまえ僕の服掴んで身動きとれなかつたし」

「だから、『メンつて』

「別に謝つてもらうことじやないよ」

空は田をぱけくつした。

「あ、そう?」

なんとなく今の発言に驚いて、氣の抜けた声が出た。

「行くんだが、今日」

「へ? どこに?」

唐突な言葉に、思考回路がうまく働かなかつた。寝起きでもしつかりと思考回路が働いているであろう光の顔に、バカと書いてある気がした。それも大きく。

「悪かつたな」

「まだ何も言つてないだろ」

「どうせ、今バカつて思つたくせに」

そういうと、光がかすかに驚いたように眉をあげた。ほんの少しの表情の違いが分かるようになつてきたのが不思議だ。

「少しさは賢くなつてきたじゃないか」

「うるせー」

大いに？れて空はそっぽを向く。

「で、行くんだろう？」くなつた子の実家に。いいのか？ ゆっくりしてて。もう、十時過ぎてるけど」

言われて、壁掛け時計に目をやると、確かに十時を五分ほど過ぎている。ずいぶん寝坊してしまつたようだ。これも夏休みの特権である。

「大丈夫。夕方、えつと、三時に待ち合わせだから

「そうか、なら、それまで図書館付き合つてくれ

「え。勉強は嫌だぞ」

そういうと、光がふつと笑みを漏らした。微かな、口元だけの笑みだつたが、久しぶりに見た気がする。

「勉強じゃない。ちょっと調べたいことがあるんだ」

そう言つた光の顔は、もういつものポーカーフェイスに戻つていた。

朝食兼昼食を食べ終えたあと、光と空はそろつて図書館に來ていた。

あいた席に腰を落ち着けると、光はふらりとどこかへ行つて、古い新聞紙を手に戻つてきた。何を調べるのかと問うても、ろくな返事が返つてこない。何かに没頭するといつもこうなる。

暇つぶしにマンガでも取りに行こうかと、空が考えていたとき、光が小さく声をあげた。

「あつた。」これだ

「何？」

空は横から、光の指さす記事に田を落とした。

『廃病院の屋上から転落か？』

と、見出しのついた小さな記事だった。

「これって、もしかして」

「そう、桜田絵里の記事だ」

頷く光の前から新聞を引っ張つて、自分の前に置くと記事に田を通す。

『一十日午後六時』いろ、美晴市美晴町の廃病院の敷地内で、近くに住む桜田絵里さん（十四）が、頭から血を流し死亡しているのを、肝試しに来た大学生が発見した。

美晴署によると、現場は廃病院の裏庭。絵里さんは、この建物の屋上からなんらかの理由で落ちたものとみられる。同署は自殺と事故の両面で調べを進めている』

「へー、最初から自殺だつたつて分かつてたわけじゃなかつたんだな」

「ああ、そうみたいだ」

光は、かけていた眼鏡をはずすと眉間に指でもんだ。空は、首をかしげる。

「あれ？ でも、何で光が桜田さんのこと調べてるんだよ」

光は空から田を背けた。

「ちょっと、気になつて」

「ふーん。何だかんだ言つて、やつぱ気になるんだ。へー

からかい調子で、光の顔を覗き込むと、顔を手で押しやられた。その手をはずさせて、また覗き込む。

「んだよ、照れてんの」

「おまえウザい」

「うおつほん」

背後から、咳払いが聞こえて、空と光は動きを止めた。どうやら、知らず知らずのうちに声が大きくなっていたらしい。

光は外した眼鏡をかけなおしたあと、腕時計に目をやった。

「いいの？ そろそろ一時半になるけど」

海たちとの待ち合わせ場所へ行くにはそろそろ出ないといけない時間だ。

「やべつ。俺行くわ」

そう言って立ち上がった空の腕を、光が掴んだ。

「空、覚えてるか？」この前僕が電話で言つた質問。忘れずにしてこいや

空は口を開け、光を凝視した。

「えつと、何だっけ」

光は思いつきり溜息をついた。

それに、文句を言つ前に、光は質問内容を空に伝えた。

## 第十四章 実家へ行く前に（後書き）

「んにちは。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。

いかがでしたでしょうか。

久々に海が登場いたしました。今回は初めて、海の家族が登場しました。

そして、空と光も初体験しております。こんな書き方すると妙な感じですね。

次回もまた火曜日に更新予定です。

実は昨日、三兄弟の番外編的な位置づけになる「ラボ小説」をUPしております。

伽砂杜ともみ先生作の時間シリーズと三兄弟とのラボです。

『かさなる時間』

<http://ncode.syosetu.com/n1231m/>

約27分の短編です。

舞台は、三兄弟の通う清秀高校の文化祭です。

三人が、走ったり、テンション上げたり、女装したりしております（笑）

事件のからまない三兄弟をかけたのは楽しかったです。  
こちらと合わせて、お気軽にご覧いただければ幸いです。

それでは皆様。

また、お会いできることを願つて。

愛田美月でした。

## 第十五章 実家へ行く

どうして、あなたは死んでしまったのだろう。

どうして。

どうして。

どうして？

待ち合わせ場所に着くと、海と由香は先に来ていた。  
待ち合わせ時間の五分前だつたが、なんとなく申し訳ない気持ち  
になる。

三人そろつて待ち合わせ場所から、由香の案内に従つて住宅街を  
進んだ。

「あ、ここよ」

そう言つて立ち止つた由香の視線の先には、一戸建ての住宅があ  
つた。こじんまりとした一階建ての家だ。

もとは白かつたであろう壁は少し黄ばんで、この家の古さを思わ  
せた。よく見れば、ひびを修復した後もある。

表札には、桜田とあった。

由香が代表してチャイムを押すと、ほどなくして中から中年の女  
性が現れた。

彼女が桜田絵里の母親だろう。

「いらっしゃい。よく来てくれたわね。由香ちゃん。それとお友達  
もはじめまして。さ、中へ入つて」

存外明るく出迎えてくれた。もっと、暗い雰囲気の、やつれた女  
性が出てくるものと思つていた空の予想は外れた。

彼女は、太つているとまではいかないが健康そうな体型で、笑顔

の中にも活力があふれているように見える。こいつでは失礼かもしれないが、とても子どもを一人亡くした母親には見えなかつた。

家に入ると、まず始めて、仏壇に手を合わせた。仏壇の横にある棚には少女の写真が飾られている。可愛らしい、元気な笑顔。これが、桜田絵里か。空と同じ年のこの少女は、もうすでにこの世にいないので。

手を合わせた後、仏壇のある部屋から隣に移つた。その部屋は、居間として使われているであろう、和室だつた。

小さめの四足テーブルの前にあぐらをかいて、空と海は並んで座る。その前に緑茶の入った湯呑を置き、女性が海の正面に座つた。由香はその隣だ。

「今日はありがとうございました。由香ちゃん。それと君たちも柔らかな笑顔とともに、絵里の母親は口を開いた。空と海はそれぞれ軽く頭を下げた。

「今日は、三人で押しかけてすみませんでした。君島さんが今日行くなつて聞いたんで、一緒にと思って」

敬語を使うときの海は関西弁ではなくなる。以前も聞いたことがあつたが、妙な違和感がある。

「ええ、どうもありがとうございました。生前、仲よくしてくださつたんだつて？ 来ていただけて絵里も喜んでるわ」

そう言つて、絵里の母親は襖の方へ目をやつた。襖の向こうには元々ある。

由香はどうやら、空と海のことを、同じ中学校の友達だと話していたらしい。嘘をついていふことに罪悪感を覚えるが、この場合仕方がないだらう。

「今日、由香ちゃんに来てもらつたのはね、形見分けをしようと思つて」

絵里の母親は少し、寂しそうにほほ笑んだ。由香は驚いたように田を見張った。

「え？ 形見分けつて」

「もうすぐ、引っ越すのよ。……実は、再婚することになつて」

「すっげ、おめでとうございます！」

「ありがと！」

空の言葉に、絵里の母親は幸せそうに頷いた。由香もお祝いの言葉を述べる。初対面での彼女の印象が明るかつたのは、娘の死を乗り越え、前を見据えていたからだろうか。

「それでね、一からやり直す意味で、絵里の持ち物を少しだけ残して、後は処分することにしたの。だから、絵里の物で使えるものがあつたら、何でも持つて行つていいくから。見てくれる？」

由香はおとなしく頷いた。視線を受けた空たちも頷く。

「あ、そうだ。おばさん。桜田さ……絵里さんつて、日記書いてました？」

空は思ひ出しあつたように声をあげた。女性は面食らつたように空を見る。由香や海も同様だ。唐突だつただろうか。だが、聞かなければならなかつたのだ。

「ええ、書いてたわよ。あの子の父親が教師でね。日記は田口を見つめることに役立つとか言つて、毎年誕生日に日記帳をプレゼントしてたけど。でも、それがどうかした？」

尋ね返されて、空は慌てたように声をあげた。

「え？ エエット、あの、そう。どうしても思い出せないことがあって、それで、絵里さんが日記に書いてないかなーと思って」

「そーらー、お前慌てすぎやな。何やその思い出せないことって、恥ずかしいことなんか？」

空が嘘ついていることを知つているはずの海が、にやにやと笑いながら空の肩に手を置いた。

「べ、別にそんなんじゃねーよ

海の手をはずさせて、大きな声をあげた空の反応がどう映ったのか。絵里の母は目を細めて空たちを見る。

「ふふふ。あなたたち仲いいのね。楽しいお友達がいて、絵里も幸せね」

「え、いや。そんな」

嘘をついていることが、胸に痛い。

「あ、あの、おばさん。日記で思い出したんですけど、私たち、交換日記してて。それ、あつたらぜひもらいたいんですけど」

由香の遠慮がちな声に、彼女は笑顔を向けた。

「あら、じめんなさいね。日記はここにはないのよ。間が悪かったわね。先月だつたかしら、あの子の父親が持つていつたから。たぶん交換日記も彼の持つて行つた日記に交じつてるのじやないかしら。……何なら、見せてもらえるように話をつけるわよ。由香ちゃんたちなら、絵里も日記見せたつて怒らないでしょ？」、交換日記も探せるでしょう？

どうする？ と、聞かれて真っ先に返事をしたのは、海だつた。

「ぜひ、見たいです。お願ひします」

海の言葉に頷いて、絵里の母は立ち上がりと、三人を連れて二階に上がつた。

一階奥の部屋が絵里の部屋だつた。クーラーのきいていない部屋はとても暑い。窓は開いているが、カーテンは動いていない。風が吹いたところで熱い風が入つてくるだけだろうが。

狭い部屋には、壁に沿うようにベッドや机、そして本棚が置いてある。ベッドカバーはピンク地に苺柄の女の子らしいものだつた。机の上には黒い鞄が置いてある。学校指定の鞄だろう。中に教科書が入つているのが少し見える。

部屋は毎日掃除されているのだらう。目立つた埃はなかつた。まるで今も、この部屋の主が生きてここで生活しているかのようだ。「好きに見ていいから。の人には、私から時間作つてもらうよ」に連絡するわ」

そう言って、絵里の母は部屋を出て行った。

「嘘、つこちやつた」

静かな口調で、由香が呟いた。部屋の中を見回していた海が、声にひるむよつてひらへ視線を向ける。

「嘘？ 何が嘘なん？」

「交換日記。交換日記は私が持つてる」

「え？ そつなの」

空が大声をあげた。海が慌てて口をふさぐ。

「むがつ。何すんだよ」

海の手をじけて、睨む。海は両手を肩の高さほどに上げた。敵意がないことをアピールしたのだ。だが、注意は忘れない。

「空、声でかいつちゅうねん」

「悪かったな！」

ふんっと、れた空を見て、海は由香に肩をすくめてみせた。

由香は軽く笑みを口元に上らせる。だがすぐさまその笑顔は消えた。

「私が、絵里の物、も「うつ資格なんてないの」

「君島さん」

由香は、ゆづくじと机に近づき、机の上に乗つている鞄に手をやつた。それを悲しげな、それでいて懐かしむような顔で撫でる。そんな様子を見つめていた海は、一つ首を振ると空に向き直った。「空、さつき何でいきなり日記なんて言いだしたんや？」「え？ まあ、首を傾げる空。海は呆れたように口を開けた。

「さあつて、お前が自分で聞いたんぢやうん」

「ああ、まあ。そつなんだけどさ。聞けって言われたから」「誰に？」

空は明らかに動搖した様子で、海から顔を背けた。そして、口笛を吹きだす。

由香は明るかに動搖した様子で、海から顔を背けた。そして、口笛を吹きだす。

由香は明るかに動搖した様子で、海から顔を背けた。そして、口笛を吹きだす。

「あ。これ……」

由香が持ち上げたのは、鞄の下に挟まれていた布製の筆箱だった。  
「これ、私が誕生日にエリにあげたの。学校では使ってなかつたのに、家で使つてくれてたんだ……」

掴んだ筆箱を胸に抱いて、由香は肩を震わせた。

泣いているようだ。

空は頭を搔いた。海と田を合わせる。

そんな三人の背後から、部屋のドアをノックする音が聞こえてきた。振り向くと、絵里の母親がドアを開けたところだつた。

「どう? 持つて帰れそうな物ありそう?」

「はい、これいただいていきます」

由香の言葉にそちらを向ければ、田元をぬぐつて笑顔を見せる由香が田に映る。

「あ、そりや。おばさん。絵里さんのケータイつて今どうなつてます?」

海が今日の目的だつた携帯電話の話を向ける。絵里の母親は不思議そうな顔で小首を傾げた。

「ケータイ? あの子、ケータイはもつてなかつたわよ」

「え? そんなことないです。エリはちゃんと持つてたわ。私とおそろいの莓のストラップ付けてたもの」

由香の言葉に、なおも首を横に振つた。

「いいえ。そんなお金もないし、あの子にはケータイなんて持たせてないわよ。誰かと間違えてるんじゃない?」

空は海と田を合わせた。

彼女が嘘をついているようには見えない。

だが、そんなはずはないのだ。

桜田絵里が携帯電話を持っていたのは、由香だけでなく、杏奈たちも見ている。

「そうですか」

そう言いはしたもの、すつきりしない想いが三人を支配するの

だった。

桜田絵里の家を出た空と海は、用事があるとこいつ由香と別れ、駅へ向かっていた。このまま、桜田絵里の父親に会って行こうといつことになったのだ。

「そーらー。何か隠してるやろ」

横を歩く海が何気ない口調で問う。空は、顔をゆっくと海と反対の方向へ向ける。

「な、何のことかなー」

一歩一歩三歩。それでもう一歩。無言のまま進む足。

空は、一度大きく息を吐きだして海を見た。

「なあ、こいつ光と仲直りすんの?」

無言のまま、海の足は進む。

空は立ち止って、遠ざかる海の背を見つめる。一メートルほど歩いた後、海が振り返った。

「空?」

「なあ、こいつ、光と仲直りすんだよ」

大股で、空は海の前にくると、挑むような目を向ける。

「何で、仲直りする必要があるんや。あいこつ、何も言つていつくんし、俺のことなんてあいこつは何とも思つてへんのやろ」

「そんなことねーよ。仲直りする気はあるんだろうって聞いたら、まあつて言つてたし、それに日記のことだつて……」

「日記? さつき、おばさんにしてた質問、光に言われて聞いたんか? でも何で光がそんなこと。空が相談したんか? 光に

眉を潜めて聞いたりす海に、空は頷く。

「ううん。ん? 相談はしてねーよ。意味分かんねーけど。聞いてこいつて

「何であいこつが、関係ないやろ?」

「せりや、やつぱりお前のことが心配だからじゃねーの？ 気にな  
るのかって聞いたら照れてたし」  
その情景を思い出したのか、ひひひ、と妙な笑いを口元に上りせる

空。

海はふーんと言つて、しばらく黙つた。

「でも何で日記なんだろなー。光に聞いても自分で考えたりつたり  
教えてくんねーんだよ」

歩き出しながらそう聞いた空に、海は答えを出した。

「そりゃ、あれやろ。もし、家族の誰かが桜田絵里の名前を騙つて  
メールを送るにしても、あれだけ詳細な内容をかけると思うつか？」

空は一度、口元に拳をあてて考えた後、首を横に振つた。

「いや、思わねーな。例え生前、話をしてたとしても、誰と誰が買  
つたストラップがどうのとか、はつきり覚えてねーとゆづ」

「そりゃ。でも、日記があつたらどうや？ 日記を見れば、詳細  
なメールを送ることもできるつて訳や」

なるほどねーと、空は顎に手をやつして感心するように頷いた。

「じゃあ、やっぱ同じのは、その日記を持つてる桜田絵里の父  
親つてどこだな」

「ああ。今から会えるわけやし、犯人やつてばれたら、やめてくれ  
るやろ。こんな嫌がらせ。これでやつと自殺がらみの事件ともおそれ  
らばなできるわ」

海は万歳をするように両手を上げる。空は、海の前に回り込むと、  
後ろ歩きしながら海の顔を覗き込むようにして笑顔を作つた。

「んじや、ねむらばできたら、光と仲直りしてくれよ

「まだ言つか。しつこいなー空は」

「おつ、俺はしつこいぜ」

威張る空に、海は苦笑する。

「威張つていいくことやないやろ」

「くくっ」

「」の事件が終われば、きっと光と海の仲も元に戻ってくれるはず

だ。

光明が見えた気がして、空は密かに笑いを口元へ上らせた。

## 第十六章 思わぬ再会

二人が最寄りの駅に着いたのは、午後五時半頃だった。相手から五時半以降に来いという指定があつたのだ。

桜田絵里の父親が住むというアパートに着いたのは、午後六時近くなつてからだ。駅から五分とかからないと聞いていたのだが、目的のアパートが民家の入り組んだ場所にあり、三十分ほど道に迷つたのだ。

ずいぶんと古ぼけたアパートだつた。外付けの階段はさびていて、所々塗装がはげている。足音高くその階段を上がつた二人は、岸谷と表札の掛かつた家のドアをノックした。インター ホンを探したがみつからなかつたのだ。

返事がないので、繰り返しノックする。

「はい」

中から低い声が聞こえたかと思つたら、ドアがゆっくりと開いた。ドアを開けたのは、中年の男性だつた。絵里の父親なのだから、相応の年齢といったところか。学校の先生だと聞いていたから、もつとハキハキとした人が出てくるのかと思つたが、随分と陰気に見える。無精髭を生やした顔は表情が乏しい。

「あの、桜田絵里さんのお父さんですか？」

海が尋ねた。男は返事をしようと口を開いたようだが、言葉を発することはなかつた。代わりに大きく目を見開く。

その表情に、訝しげな顔を見せた海だつたが、ふと何かに気づいたようにこちらも驚いた表情になる。

「もしかして、斎藤か？」

海を見つめて言つ男に、空が違うと声を上げようとした。だが、

その言葉を遮るように、海が口を開く。

「はい。今は斎藤やなくて、紫藤ですけど。……名前見たとき、ま

さかと思つたけど、やつぱり岸谷先生なんですね」

「そうか、紫藤か。そうだつたな。それにしても大きくなつたなあ」

破顔する男に、海も笑顔を見せる。何やら分かり合つてゐる二人

に、置いて行かれた氣分で、空は海の肘をつついた。

「おい、どういうことだよ、海」

小声で聞くがあつさり無視された。

とにかく上がりなさいと、部屋に入るよつて促されて、一人はおじやましますと口々に言いながら中へ入つた。部屋のほぼ中央に置かれた、小さな丸テーブルの前に、二人は岸谷と対面するように座つた。

「にしても、絵里の友達が来るつて聞いてたんだがな。まさか男の子が来るとは思わんかったな」

最初に対面した時の暗い雰囲気はどうへやら、田に焼けた髭面に快活な笑顔を見せる。

「ああ、俺ら、まあ代理なんです。な、空」

「あ、そう。そうです」

不意に声をかけられ、空は慌てて男に向かつて頷いてみせた。

「そうか。で、交換日記を探してたんだよな。君たちが来る前に一通り見たんだが、見つからなかつたんだ。日記の束の中にも無かつたよ。せつから来てもらつたのに悪いなあ」

頭を搔きながら、本当にすまなさうに言つ男に、空と海はいえいえと首を横に振る。

そもそも、交換日記は由香が持つてゐるのだから、ここにあるはずがないのである。むしろ、あつたなんて言われたらびっくりだ。

「あ、あの、その日記つて、見せてもらつたりできませんか」

空が尋ねると、岸谷の口に焼けた顔が少し困つたようになる。

「そうだな、申し訳ないけどね。日記というのは、自己を見つめる手段として書くものであつて、人に見せるために書くものではないんだよ。だから、絵里の許可なしには見せることはできないな」

「はあ、そうですか」

はつあいつ拒否された。とても、残念だ。空は、心の中で舌打ちする。

「あ、そつそつ。これも頼まれとつたんですけど」

「ん?」

声に反応した岸谷が海みると、海は笑顔を作った。

「絵里さん、ケータイ持つてましたよね。それに、ストラップついとつたらしいんですけど。苺の形した、ストラップ。それ、貰えるならほしにして、君島さんが」

「君島さんといふと、ユカちゃんか」

思ひ出すように言つ岸谷に、海が頷く。

「会つたことあるんですか?」君島さんに

空が尋ねると、岸谷は首を横に振つた。

「いや、絵里が生前仲のいい友達だつて話してくれたんだよ。ちよつと待つてる。ケータイだな。持つてくるよ」

そう言つて、膝に手をついて立ち上がつた男は、背後にあつた押入れの襖を開けて、そこから段ボールを取りだした。ひざに背を向けたまま、段ボールの中を探つている。

「やつぱり、桜田絵里はケータイ持つてたんやな」

男に聞こえないよう、海が空に耳打ちする。

「うん、お母さんは持つてないつて言つてたのにな」そこまで答えたとき、男がこちらを振り返つた。

「あつたよ。これがケータイだ」

そう言つて、丸テーブルの上に置かれたのは、ピンク色の携帯電話だった。

「おばさんに聞いた時は、絵里さんケータイ持つてないつて言つてましたよ」

何気ない風を装つて、海が告げると、岸谷は照れくわいつな笑顔をつくつた。

「ああ、絵里にねだられてな。あいつには内緒で買つてやつたんだよ」

空と海はなるほどと頷いた。どうやら絵里は、母親にばれないよう上手くやっていたようだ。

携帯電話には、由香から別れ際に聞いたように、母のストラップがついていた。

「あ、これこれ、このストラップつかな」

そう言って、海がその携帯電話を手に取った。

「あ、開いて見てもいいですか？ 僕、前これと同じ機種やつたんですよ。懐かしいな」

「そうか。触るのはいいが、そのケータイは使えないぞ」

「ええ？ 使えないんですか」

思わず大声を上げた空の横で、海が額に手をやつた。岸谷は驚いたように空を見ている。

「あ、すみません」

「いや、いいよ。使う本人がいないからな。たまに、充電してるから中を見ようと思えばみれるが」

「やうか、そりやそうですよね」

空は、乾いた笑いを口元に上らせた。

その横で、海は慣れた手つきで携帯電話を触っている。しばらく触つて、海はありがとうございましたと携帯電話を返した。その前に母のストラップは外している。

「じゃあ、これ貰つて帰りますね」

「ああ、どうぞ」

「ありがとう」それこます。で、先生」

「ん？ なんだ」

穏やかに聞き返した男に、海は少し表情を曇らせて言葉を口にした。

「最近、絵里さんの名を騙つて変なメールを送るやつがあるんです。先生んとは何かそういうメールきてませんか」

空は、はじかれたように海を見た。

そんないきなり、直球かよ。と、思ったのである。

海はどこか緊張の面持ちで男を見ている。

「いや、俺のところには来てないが。絵里の名を騙ったメール？」

「いや、いいんです。すんません。気にせんといてください。たぶんただの悪戯やと思います。そのうち犯人も、こんなこと何の意味もないことやつて気付いてくれるって信じてますから」

海は半ば岸谷の言葉を遮るようにそう告げ、立ち上がった。

丁寧に部屋に上げてもらつた礼を言って、一人は岸谷の部屋を後にした。

「かーい。どうこう」とか説明しないよ

アパートの敷地を出てすぐ、空が声を上げた。若干声に不機嫌さが滲み出ている。

やつぱり来たか。そう思つて、海は息をついた。

「説明つて何を？」

とぼけて尋ねると、即返答があつた。

「桜田絵里の父親どどうこう関係？」

眉間に皺を寄せて半ば睨むようになりながらを見つめる空に、海は淡々と答えた。

「俺、実は小学校の一年までこいつにおつてな、そんで。あの人は小一の時の担任やねん」

「ふーん。じゃあ、斎藤つてのは？」

顰めのまま聞かれた言葉に、海は真顔で答えた。

「日本人の名字やな」

より一層睨まれた。

海は苦笑して、ゴメンと謝る。

「俺な、実はお前に嘘ついた。俺、最初に貰われたん、紫藤の家やないねん」

空は、何も言わずじっと海を見つめている。海はいつになく堅い表情で、空を見返した。

「それ以上は言いたない」

きつぱりと告げた。拒絶の言葉と取られても仕方がない。ゆっくりと田を逸らした海の背を、空が思い切り叩いた。

「痛つて」

「うん、分かった。お前が話してもいいって思つままで待つてやる」  
その言葉に逸らした田を戻すと、空の笑顔が映る。  
どこかほつとした気分で、海は笑顔を返した。

## 第十七章 まさか……

また、誰かが後をつけてくる。彼女の履くミュールの音が、夜道に響く。その後に、微かな靴音が続く。

彼女が足をとめれば、後ろの靴音が少しづれてとまる。もう嫌だ。

どうして、つけてくるの？

彼女は足を速めながら、鞄の中の携帯電話を探つた。家まであと数メートル。あの角を曲がって少し行けば家に着く。彼女はさりに歩みを速めた。

携帯電話をようやく鞄から取り出して、開こうとした彼女の手が止まる。メールが来たことを知らせるマークが点滅していたのだ。

また、エリから？

もう、嫌！

手にした携帯電話を、路面に投げつけたい衝動を抑え込む。

後ろから、足音が聞こえてくる。つかず、離れず。彼女は後ろを振り向いた。街灯から離れた場所に人影が見える。

背筋が凍る。

彼女は走り出しながら、携帯電話を開いた。メールは無視して、電話をかける。

ワンコールで出た相手に、彼女は声を上げた。

「もうイヤよ。ねえ。もうイヤ、またつけられてるの。きっとエリの呪いよ。アタシ達呪われてんのよ。アタシ、もう警察行く。警察言つて全部話す。そうすれば……」

『何言つてるの？ 落ち着いて。今どこ？』

相手が、驚いたように声を上げた。

彼女は今いる場所を言いながら、角を曲がつた。その時。

彼女は横の路地から伸びてきた手に、捕らえられた。叫び声を上

げようとした口を背後から塞がれる。そのまま細い路地に引き込まれていった。

夜九時過ぎ。

今日も泊りに来た空は、光の座る机の後ろで、健やかな寝息を立てている。夕飯を食べて風呂に入つたあと、すぐに寝てしまったのだ。別の部屋を用意すると言つたのだが、せっかく泊まりに来たのに一人じゃつまらないと、空は主張した。その割に早く眠つてしまつたのだから、意味がないのではないかと光は思う。

彼は、することもないでの、机に向かつて予習をしていた。

それもひと段落し、強張つた肩をほぐすように動かした。

夕食の時、空に聞いた話を思い出しす。それを整理するために、ノートを一枚しきつて、そこに思いつくまま書きだした。

- ・一番最初のメールは、絵里のメールアドレスから送られてきた。
- ・内容は細かく、すべて真実。
- ・メールに書ける内容が書いてあるであろう日記は存在した。
- ・桜田絵里の母親は、日記の存在を認めたが、携帯電話を持つていたことは知らなかつた。
- ・父親の方は、どちらの存在も知つていた。
- ・絵里の携帯電話は、父親が持つていた。
- ・そのケータイ電話は使用不可能だつた。
- ・その携帯電話から、メールが送られた形跡はなかつた。

じつやつて書き出しても、一番怪しいのは、携帯電話と日記を持っていた父親だつ。空の話から、海もそう考えたことがうかがえる。

海が桜田絵里の父親に対して、メールが送られてくることを告げ

たのは、父親に対しての牽制だらう。そうでなければ、信じている  
という表現は使わないはずだ。

そこまで考えた時だつた。携帯電話が机の上で、動き出した。マ  
ナーモードにしていたので、振動したのである。  
机から落ちたところを、キャッチして、光は携帯電話を開いた。  
「もしもし」「助けて、春名君

『静だ。緊迫した声に、嫌な予感を覚えた。

「どうした』

『ムツコから電話があつたんだけど、途中で切れちゃつて  
「それで?』

『だから、ああ。えつと、ムツコ後をつけられてるつて怯えてて。  
家の近くだけど、警察行くつて、そしたら電話切れて』

『分かつた。とりあえず、そつち行くから。今どこ?』

『ムツコの家の近所まで来てるの、亀公園近くの大きな交差点のと  
こ』

そこなら知つている。光はすぐさまその辺りの情景を思い浮かべ  
た。車の通りも、人の通りも多い場所だ。

『じゃあ、そこで待つて。すぐ行くから』

そう言つて、電話を切つて。光は立ち上がつた。ドアまで歩いて、  
一度後ろを振り返る。

空がちょうど寝返りを打つたところだった。

幸せそうな寝顔が目に入り、光は空をおいて行くことを決めた。

『春名くん』

タクシーを降りたところで、声をかけられ、光は声のした方向へ  
視線を向けた。

静が街灯の近くで手を振つていて。そひだり歩み寄つて声をかけ

た。

「大丈夫？」

「ええ。でも、どうしよう」

「警察に連絡は？」

静は首を大きく横に振った。

「警察にいつたって、きっと信じてくれないわ。それより、ムツコ 捜さなきや」

「……分かった。この辺りにいるって彼女は言つてたんだね？」

「ええ……」

不安に強張つた顔の静。光は彼女の肩に手を置いた。

「不安だらうけど、とりあえず彼女を見つけることだけを今は考え よう。いいね」

ゆつくりと言い聞かせるような声音に、静は頷いた。

まず、睦子の家に電話をかけた。もしかすると、睦子は家にいるのではないか。そんな希望的観測からだ。しかし、睦子は家に帰つていなかつた。家の人々に、睦子が帰つてきたら連絡をくれるようにお願いして、通話を切つた。

一人は睦子の家の前まで来ると、その付近を捜して回つた。だが、どこにも姿はない。この辺りの道は、人通りが少ないせいもあってやけに静だ。

街灯も少なく、暗い路地を、目を凝らして捜す。

「あつ。春名くん」

細い路地を覗いていた静が声を上げた。そちらに歩み寄つた光に彼女が何かを差し出す。

それは、小さなキー ホルダーのようだつた。

「これ、中学の修学旅行で買つたやつなの。監色違いで。この色はたぶん、ムツコのだと思つ」

光はそのキー ホルダーを街灯のある方へ掲げてみた。

ハート型のキー ホルダーだ。よく見ると、爪切りとしても使えるようだ。土産物というだけあって、地名も入っている。

少し傷はあるものの、たいして汚れてはいない。最近落としたものだろう。

「この、路地の先には何がある？ 例えば、人目につかないような場所はないかな」

静は、眉を寄せ考へるよじこしたあと、何かを思いついたよじこ声を上げた。

「あ、廃ビルならあるわ。この間、ムツコに聞いたの。一、二年前に立て直すって言つてたけど、そのまま放置されてるビルがあるつて。そこなら、中へ入つてしまえば、周りからは見えないかも」

「行つてみよう」

光は、静の背を押して促し、自身も歩き出した。

細い路地を抜けてすぐ、その廃ビルに着いた。五階建くらいの小さなビルだ。月をバックに建つ廃ビルは、さながら悪の巣窟といった雰囲気だ。街灯の光も弱いため見えにくいが、壁のあちこちに罅が入つている。

入口には立ち入り禁止のロープが張られているが、入ろうと思えば誰でも簡単に入れだらう。

「中へ入つたことは？」

光が尋ねると、静は激しく首を横に振つた。こんな薄気味の悪いところに入るわけないとでも言つたげだ。

「ねえ、中入るの？」

怖気づいたような静の声。

「僕一人で入るうか？」

その言葉に、静は大きく首を左右に振つた。

光が、ビルの中へ向かうと静が慌ててついてくる。

中は真っ暗だ。月明かりもほとんど入ってこない。光は、ポケットから携帯電話を取り出した。開くと、明るいひかりが周囲を照らす。射光は弱いがよりはましだ。

床は、砂のようなもので汚れて、足跡がいくつも残っている。コンクリートの欠片なども落ちており、壁には無数の落書きがあつた。ふと、何かが落ちていた気がして、先ほど照らしたばかりの場所に携帯電話の弱いひかりを向ける。そこには、カゴバッグが落ちていた。

### 「このバッグ」

光の呟く声が届いたのか、静がそちらに歩み寄ってバッグを拾い上げた。

「これ、ムツコのだわ！ ムツコここに来たのよ」

静に手渡されたピンク色のカゴバッグは、確かに光も目にしたものと同じである。一度、睦子と会ったときに彼女が手にしていたものと同じだ。

だが、なぜこんなところに落ちている？

「ムツコー。いないの？ いるなら返事して」

静が声を張り上げる。光が階段を見つけてそちらに進むと、静が光の片腕を掴んだ。

ちょっととした重みに驚いて見ると、不安げな表情の静と目が合う。溜息をつきたいのをこらえて、静に掴まれた腕はそのまま、光はゆっくりと階段を上りはじめた。足が痛いがそもそもいつていられない。

「あ、そこ危ないわよ。大きな穴があいてるから」

言われて、携帯電話を下に向けてそこを照らせば、コンクリートが削れたようになっていた。穴というほどではないが、ここに足を取られたら転んでいただろう。暗くて、見落とすところだった。光は眉をひそめたあと、静に顔を向けた。

「……ありがとう」

呟くような小さな声だったが、光に身を寄せている静には聞こえ

ただろつ。

しばらくして、一階に着いた。

こちらも、ひどく荒れている。壁の落書きも一階と同様に、所狭しと描かれていた。とても口には出せないような下ネタに、相合傘も書かれている。

「ムツコー、いないの？」

廊下にむなしく響く声。

何故か落ちている段ボールやゴミをよけ、光と静は一階にあるフロアをすべて見て回る。

三階、四階ともに見て回るが人の姿はどこにもない。ここにはいないのではないか。そんな思いが頭をかすめた。

五階の最後のフロアに来た時だつた。静は携帯電話を取り出し、睦子に電話をかけた。

しかし、「ホール音が鳴るばかりで、電話がつながる気配はない。何かに気を取られたように、窓の外を見た静が声を上げる。

「春名くん」

呼ばれて歩み寄ると、何かの音が聞こえる。はやりのアイドルの歌声が微かに。音に気を取られていると、静がまた光の腕に抱きついた。勢いに危うくバランスを崩しかける。

「どうした？」

「外、外見て」

震える声で促され、光はゆっくりと窓に近寄り、外に目をやる。月が見えた。そして、町の明かり。

先ほどより、はつきりと聞こえる音。

「下、下を見て」

言われて下を覗き込む。

息を飲んだ。

月明かりの下。

ビルと堀の狭間。

そこに見えるシルエット。

人が、倒れている。

月明かりをもつてしても、ここからだと人物の特定はできない。

「音が、ムツコの着うた……ムツコ、なの？ ねえ、ムツコなの？ どうして……」

震える静の声を聞き、光はそつと静の背に片腕をまわした。

## 第十八章 証言

廃ビルの裏側に、人が集まっていた。

夜の十時過ぎだというのに、辺りは騒然としている。

ビルの入り口付近には、立ち入り禁止のテープが張られ、見張りの警察官が立っていた。その近くには、警察関係の車両が駐車している。

そしてまた、車が一台停車した。

そこから降りてきたのは、二十代後半くらいの男性と、五十代半ばほどの、こちらも男性だった。

二人は立ち番の警官と一緒に三言二言話しかをすると、立ち入り禁止のテープを潜り、現場へと足を向けた。

この廃ビルの裏手で、女が亡くなっていたという通報があつたためだ。

一人は、カバーの掛けられている遺体に近寄ると、しゃがんだ後、そろつて合掌し、カバーをめくる。

まだ年若い少女だった。高校生くらいだろうか。男がそう考えていたら、先に着いていた新米刑事の河合が彼の考えを裏付けた。

「該者は石井睦子、十六歳。持っていた生徒手帳から、愛聖女子学園の一年生であることが分かりました。死亡推定時刻は、午後七時から十時の間。死因は転落死ではないかということです」

「ふーん。若くて可愛かつただろうに、勿体ない」

「おい、私市。お前はそんな感想しか持てんのか」

中年の男性が、若い方の男に呆れた声をかける。私市と呼ばれた

男は、整った顔に笑顔をのせた。

「本音、聞きたいですか？ 虬さん」

虹さんと呼ばれた中年の男性は、嫌そうに顔を歪めた。

「いらん。どうせろくでもないこと言つんだろうが。で、河合。第

一発見者は？」

河合は緊張の面持ちで、私市たちの背後を指さした。河合はまだ、この中年刑事に視線を向けられると緊張するようである。

「あつちで待つもんります」

河合の指し示す方向を田で追つて、私市は軽く驚きの声を上げた。

「あれ？あの子は……虹さん、あの子」

「え、ああ？見覚えある顔だな」

第一発見者という少年と少女。私市たちが注目したのは、少女ではなく綺麗な顔をした少年の方だった。

「やあ、春名くん。久しぶりだね」

にこやかに私市は話しかけたが、少年は眉間にしわを寄せ、私市を見上げた。そんな顔をしていても、綺麗だ。

「あれ？僕のことは憶えてないかな？」

苦笑いを作つてみせると、少年は首を横に振つた。初めて会つた時も思つたが、どうにも表情のえしい少年だ。彼が以前、フィギアスケートの選手として活躍していたことを知つている私市は、その頃とのギャップに首を傾げたくなつてしまつ。本当に同一人物なのがと。

「いえ、私市さん。その節はありがとうございました」

言葉の後半で頭を下げる少年に、私市もつられて頭を下げた。

「いえいえ」

そのやり取りを見て、少年の横に立つた少女が目を丸くしている。刑事と知り合つたことに驚いているようだ。

「おい、私市。何やつとんだ。まつたく」

頭を平手で叩かれ、恨みがましい目で叩いた相手を見やつた。

「虹さん、子どもの前でー」

「煩い。遊んでないで、さっさと話し聞かんか」

心の中で、へいへいと返事をして、私市は手帳を取り出した。

その手帳を見て、少女がまたもや驚きの顔を作つた。私市が出した手帳はクマとウサギのキャラクターが描かれた、とてもファンシーナ物だ。私市の趣味ではなく、姉からのプレゼントである。この

間まで使っていた黒革の手帳を使いきったので、机の奥にしまった物を急場凌ぎのつもりで持ってきていたのだ。しかし、この手帳を見た人の反応が面白いので、そのまま使つことにしようと思つてゐる。

何か言われる前に、私市は素早く質問を口に上らせる。

「君は、春名光くんだね。では、お嬢さん。お名前は？」

「え、えつと。はい。伊藤静です」

おとなしげな少女である。亡くなつた石井睦子はどちらかといえば派手な格好をしていたが、こちらの少女は、服装もおとなしめである。

「そう、伊藤さんね。一人はどうして、こんな時間にこんな場所に来てたのかな？ デートつてわけではないよね」

そう尋ねたのは、一人の間に色恋特有の甘いムードが見られなかつたからだ。まあ、死体を発見した直後では、そんなムードを出しそうがないだけかもしれないが。

「はい。あの、ムツコから電話貰つたんですけど、その電話がおかしくて、それで春名くんと一緒に捜しに……」

「ふむ。ムツコつていうのは、亡くなつた石井睦子さんのあだ名かな？ 二人は友達？」

優しげなといえは聞こえはいいが、気だるげともとれる口調で私市が問う。

「はい、中学からの友達です」

静が頷きながら言葉をつむぐ。それに頷き返して、やうに問いを重ねる。

「ふむふむ。仲は？」

「良かつたです」

静から即答が返ってきた。私市が睦子と静の仲を聞いたのは、彼女たちの服装の違いに違和感を覚えたからである。友人というのは、どことなく服装が似通つているものだと私市は思つていたからだ。まあ、学校では制服だし、服装の好みは関係ないのかもしない。

「一人の関係は調べれば分かつてくるだろう。」

「私は頭を切り替えた。」

「そう、じゃあ、その電話の内容は？　どうおかしかったのかな」  
静は一瞬言い淀む様子を見せたが、光が頷いたのを見て話し始めた。

「夜の九時前だつたと思います。ムツコから急に電話がかかってき  
て、またあとをつけられてるつて。これから警察に行くつて。その  
途中で電話が切れたんです」

それは、穩やかじやないな。静の話を手帳に記しながら思つ。

「あとをつけられてるつて言つたけど、またつてことはそういうこ  
とが頻繁にあつたつてこと？　ストーカー被害にでもあつてた？」  
「いえ、ストーカーではないと思います。ムツコはエリの呪いだつ  
て思つてたみたいです」

私は隣に目をやつた。虹さんの眉間に大きな皺が寄つている。

彼は呪いなどの非科学的なものは嫌いなのである。

「エリっていうのは？」

「一昨年亡くなつた、友人です。最近、その亡くなつたエリの名を  
騙つたメールがくるようになつて、それでムツコも私も気に病んで  
たんですね。だから、ムツコ、追い詰められてたんだと思います」  
うーんと私は唸つた。

隣を見れば、虹さんがただでさえ怖い顔を顰めている。

「虹さん、私は市さん」

突然名を呼ばれて振り向くと、河合が白い手袋をつけた手に、携  
帯電話を持つてやつて来る姿が見えた。

「これ、見てください」

そう言って、私は市と虹さんの間に身を割り込ませた。

彼の持つている携帯電話のディスプレーを見て、私は眉を寄せ  
た。

『私を殺したのは誰？』

メールの画面にはそう書かれていた。

「これ、これが君たちの言つていた悪戯メールかな」

私は、河合の手首を掴んで、二人に画面が見えるように動かした。河合が痛がっているが、気になった様子も見せず、二人の答えを待つ。

「はい、そうです」

伊藤静の答えに、私は頷いた。河合の手を離してやると、河合に恨めしそうな眼で見られた。

「私はさーん。酷いつすよ。つて、あ、違うんすよ。私はさん」

河合が思い出したように声をあげる。なんだと言つようこ、視線を河合に向ける。

「これ、メールじゃなくて、このケータイに直接入力されてるんす」「新規メールについてことか？」

河合が頷く。虹さんは要領を得ない顔をしていた。虹さんを置き去りに河合は話を進める。

「犯人が、入れてつたんすかね」

河合には答えず、私は自身の顎に手をやつた。

これは、単純に自殺という線で、片付けられなくなりそうだ。亡くなつた少女の名を騙るメールは、ただの悪戯である可能性も高いが、かといって無関係であるとも言い切れない。つけられていた、というのが事実であれば、ストーカーもしくは変質者の線も考えられる。

携帯電話に入れられた文字は、本人が入力した可能性もあるだろうが、この文面を入力する意図が分からぬ。第三者が、入力した可能性の方が高いように思われる。

とにかく、調べてみるしかない。これから忙しくなりそうだ。

## 第十九章 後悔

空が目を覚ましたのは、廊下で鳴り響く電話の音のせいである。眠い頭を一つ振つて、部屋を出た。空の家とは違ひ、広く長い廊下は静で、人の気配がない。

光の名を自慢の大声で呼んだが、返事はなかつた。

電話が鳴り続いている。

電話機を見つけて、空はその前で少し迷つた。  
他所様の電話に出てよいものか考えたのだ。

結局、いつまでもなり続ける電話を前に我慢できず、空は受話器に手を伸ばした。

「もしもし」

『その声、空か?』

唐突に相手が大声を上げた。空は一拍の間をおいて思いついた名を上げる。

「海? え、何で……」

光とは喧嘩してたのに。そんな疑問が頭をかすめた。

『おまえん家に電話したら、こっちやつて言われてな』

「ん? ジャあ俺に用な訳か?』

『そりやねん。君島さんから連絡あつてな』

そこで一度、海は言葉を切つた。その間がやけに長かつたので、空が不審に思つた時、海の声が耳に届いた。

『石井睦子が亡くなつたんや』

「え? 嘘だろ……」

空はそのまま絶句した。石井睦子が倒れていた場所へ向かうといふ海の言葉に、自分も行く、それだけ言つて通話を切つた。

亀公園近くの交差点で待ち合わせて、空と海、そして由香は睦子が発見されたという廃ビルへ向かった。

その廃ビルが視界に入る前に、人のざわめきが空たちの耳を打つた。

それが、野次馬の声だと分かったのは、その廃ビルの前で立つ多くの人影を見つけたからだ。

その中に割って入るようにして、空たちは人垣の前に出た。先ほどまで、人の頭や背中で遮られていた視界が広がる。立ち入り禁止のテープの向こう。

結構な数の警察関係者と思われる人の中で、見知った人物を見つけて、空は大声を上げた。

「あ、光！ 何でここに」

空のあまりの大声に、一瞬身を引いた海は、はっとしたように空の視線の先を追つた。

そこには、以前学校で起つた事件の時に顔を合わせた中年の刑事の傍らに、光と伊藤静の姿があつた。

「何で、伊藤さんと一緒におんねん」

「俺に聞かれても」

不機嫌な声を上げた海に向かつて、空は困ったように頬を人差し指で搔いた。

「ていうか、何で刑事と一緒にやねん」

「だから、知らねーっつうの」

光は家にいるはずだと思っていたのだ。空が床に着くまでは確かに部屋にいた。

家を出て行つたとするなら、空が寝ていた間だつ。

「の人、シズカの彼氏でしょ？ アンナが電話で言つてた。シズカが、彼氏と一緒にムツコを見つけたつて。紫藤くんたち知り合いなの？」

聞かれて、空と海は顔を見合わせた。

「おーい。光！ こっち来いよ」

空はまたも大きな声を出す。

喧騒の中でも、よく響いたその声に、光は顔をこじりに向かへて、微かに眉をひそめた。

そして、刑事に何か話してから、空たちのもとへやつて来る。「空。起きたのか」

光は開口一番そう言った。

「悪かつたな、寝穢くて」

「誰もそんなこと言つてない。で、要件は」

相変わらずの無表情で問う。海はそんな光に不機嫌な眼差しを向けた。

「おまえ、ちょっとこいつち来いや」

そう言つて、海は光の手首を掴んで引っ張つた。光は立ち入り禁止のテープを潜るしかない。

そのまま一人は人垣の向こうへと消えていく。

「え、ちょ。おいてけぼり？ 僕たち」

「どうしよう」

由香に不安そうな顔で見つめられ、空は反射的に笑顔を作つた。「俺、あいつら追いかけるからさ。君島さんは川崎さん来るのここで待つてて。来るんだよな？ あの子」

「う、うん」

頷く由香にせつたここの動くなと言つて置いて、空は海たちの後を追つた。

しばらく歩いて、足をとめる。

細い路地へと続く角の向こうから、声が聞こえた気がしたのだ。そちらに向かうと、案の定、光と海がいた。

壁に背を持たせかけて立つ光の前に、海が腕を組んで立つている。

「田記のこと、空に聞いておかしいなとは思つとつたけど。まさか

お前が調べてるなんて思わんかったわ」

光は無言で眼鏡の奥から、海を見つめている。

「俺が、メールのこと言つた時は他人なんか関係ないとか、やめろとか言つたりたくせに、どうこうことや！」

詰め寄る海を前に、光は溜息をつくと顔を背けた。

「別に……」

「別について何やねん！」

怒鳴る海と光の間に、空は割って入る。

「まあまあまあ。海、落ち着けって。そんで、光。さつき君島さんが、お前が伊藤さんの彼氏だつて言つてたけど本当？　伊藤さんに言られて、事件調べてたのか？」

取り合えず話題を逸らそうと、気になつたことを聞いてみた。だが、聞いた内容は話題を逸らしたことになつてい深い。

光は相変わらず表情一つ変えずに、口を開いた。

「関係ないだろ」

抑揚のない声が耳に届き、空は短気ぶりを發揮して怒鳴ろうと口を開けた。

「か……」

「関係ないって何やねん」

空が声を上げた声にかぶせるように海が怒鳴った。空は度肝を抜かれて、口を開けたまま海を見る。

「俺ら、兄弟やろ。そういうこと、何も言わんとこんなことに巻き込まれて、俺がお前に相談した時は、動じうともせんかったくせに。女に言われたら動くんか。最低やな」

怒声を上げて疲れたのか、肩で息をしている海の前で、光は俯き、口元に手をやつた。

そして、ふつと鼻で笑う。顔をあげて、冷たい視線を海に向かた。「そう思いたいなら、そう思つてればいいじゃないか

光と海の視線が交錯する。

海を突き放すように見る光の視線。

その視線を感じた刹那。

海は手を上げていた。

あつという空の声。その前に響いた乾いた音。

海はゆっくりと、己の右手の平に視線を落とした。

「海、何も殴ることないだろ？」

その声を聞いて顔を上げる。頬を押さえて、珍しく驚いた表情をしている光と目があった。眼鏡が、ずれている。

「あ、俺」

しびれるような手のひらの痛み。

海は後退りした。

「俺は……俺は謝らへん！　お前なんか、もう知らん。大嫌いや！」  
大声を上げ、踵を返して走り出す。

「待てよ、海」

空の声が背にかかるが、海は振り向くことができなかつた。

見知らぬ夜道を、海を捜して走り回るうちに、小さな公園に辿り着いた。そここの遊具場で、海の背を見つけて空は安堵の息をつく。彼が、海と呼びかけようとしたとき。

「うがあ！　やつてもうた」

海は妙な声をあげると、頭を抱えてしゃがみこんだ。

「ぬあ、何つて声出すんだよ」

驚いた空は、自身も妙な声をあげて、海に駆け寄つた。

「空？」

「おう。空もまだつーの。お前、殴った拳句何で逃げてんだよ

「光は？」

問いに答えず尋ね返した海に、空は呆れたような眼差しを向ける。

「戻ったよ。まだ帰るなって刑事に言われてんだってさ」

「そうか……」

空は、海に手を差し出した。暗に立てと黙つてゐるのである。海はその手を取つて立ち上がつた。

一人して公園を出る。由香を待たせているのだ。もう杏奈も着いている頃だらう。

空は、海の顔をしばらく見つめたあと、口を開いた。

「やつぱ、お前最近変だ。変だよ変」

「へんへん言つなや」

「変なものは変だよ。光と喧嘩するしぃ。かと思えば殴るしぃ。普段のお前なら絶対しないだり。光の言つことなんかにこやかに聞き流せるだろ。いつものお前なら」

俺は聞き流さないけどな。と、続ける空の横で、海はしばらく無言のまま歩みを進めた。

「光、殴つてもうなたなあ、しかも大嫌いって、俺は小学生か。ほんま俺何やってんねやろ」

大きく溜息ついて、掌を見る海。空はそんな海に目を向けた。

「後悔するなら、やんなきやいいのに」

「……そうやな。俺、あいつに八つ当たりしてくるんかもしれん」

「え？」

「最低なんは俺の方や……」

意味がつかめず問い合わせ返したが、海は言ひなおすことはしなかつた。

石井睦子の葬儀は、睦子の遺体が見つかってからちょうど一週間後に行われた。

睦子の遺体は司法解剖に回されたと聞く。空はお焼香をあげたあと、海や由香たち五人で葬儀会館を後にした。光は別行動を取つている。

日が沈んだばかりの道は街灯が少なく、暗い。人通りの少ない坂道をゆっくりと駅に向かつて下つて行く。

「どうして、こんなことになつたんだろう？」

由香が涙声で呟いた。

きつとこの場にいた全員が思つてゐた言葉だ。「う。

杏奈が、流した涙をぬぐつて声を上げた。

「ユカは、喜んでんじやない？ アタシのこゝと本当は恨んでんじよ」

泣きすぎたせいではねぼつたくなつた田で、由香を睨む。

「川崎、何で、そんなん言うねん」

海が鋭い声を上げる。杏奈は俯いた。

「だつて、そだもん。アタシらユカがおとなしいから、けつこうやりたい放題やつてたし。さまあみろつて思つてんじよ。本当は足を止め、拳を握りしめて叫ぶよつて言つた杏奈に、全員の視線が向かう。

由香は一度、大きく首を横に振つた。

「違う。そんなことない。悲しいよ。悲しいに決まつてるじゃない。中学の時、友達できなかつた私に、はじめて声掛けてくれたのムツ」「とアンナだつたじゃない。嬉しかつたのよ。本当にうれしかつた。あれから、今まで、ヒリのことがあつても。私のこと見放さないでいてくれたじゃない。さまあみろなんて、思つわけないじゃない」珍しく大きな声をあげた由香を、驚いた顔で杏奈が見詰めた。

「私たち、友達でしよう」

涙ながらに訴える由香に向かつて、杏奈は手を伸ばした。ゆつくりと、由香の体を引き寄せる。

「「メン。「メンねえユカ。変なこと言つて「メンねえー」

抱き合つたまま、声をあげて大泣きする一人を黙つて見ていた空は、どうしようかと海を見る。海は肩をすくめた。

どれくらいたつただろうか。空と同じく一人を静觀していた静が動いた。

一人の肩に手をおいて、宥め始める。

しばらくそんな様子を眺めていた海が、三人にそろそろ行こうと声をかけた。

また、五人で駅に向かつて歩き出す。湿っぽい空氣の中、静が声を上げた。

「やっぱり、あのメールを送つた人がムツコを殺したのかな」

「そんな」

由香が怯えたように声を上げた。

「でも、ムツコ誰かにつけられてるって言つてたし、どうこう理由かは分からぬけど、エリを私たちに殺されたって思つてる犯人がムツコを……」

「やめて、シズカ！ そんなこと、あるわけないよ」

由香が耳をふさいで、首を振る。

静は、由香に目を向けた。

「なら、ムツコが言つよつてエリの呪いだつていうの？ それこそあるわけないでしょ」「う」

静の冷静な口調に、空は、それは確かにそうだよなと思つ。

そんな空の横で、杏奈がこぶしを握つた。

「どつちにしろ、ムツコを殺した犯人、アタシは許さないけどね」前へと向けられた強い視線。

杏奈の言葉に、全員が彼女に視線を向ける。

「絶対に、許さない」

彼女の言葉が、暗い夜道を通つて消えた。

## 第一十章 記憶

あの日、早く帰るから。そう言つたのに。  
あの日、早く帰つてきて、そう言われたのに。  
帰りが遅くなってしまった。  
だから、彼女は死んでしまったのだろうか。  
だから、彼女は自分を待たず死んでしまったのか。  
だから、これは自分の罪。  
自分の罪だ。

蝉の鳴き声が、周りに大きく反響している。養父に手書きしても  
らつた地図を片手に、最寄りの駅に降り立つた。

地図を見すとも、ある程度の記憶がよみがえり、足がかつてに墓  
場へ向かう道を行く。一年に一回とはいえ、何度もなく来た道だ。  
十分ほどで、墓場に着いた。

墓の位置も、だいたい把握している。墓石が立ち並ぶ道へゆつくりと歩みを進めた。

もうそろそろ、田的の墓に着く。

そう思つて、心なし俯けていた視線を上げて、海は足をとめた。  
海が目的としていた墓の前に男がいる。手を合わせていたその人  
が、立ち上がつたのが目に映る。

男がこちらに気づいた。ゆっくりと笑顔になつたその顔を、海は  
知つている。

「私市さん、来てはつたんですか  
小走りに私市のもとまで来ると、声をかけた。  
「ああ。ここで会うのは初めてだね」  
穏やかな聲音が海の耳を打つ。

毎年、自分が来る前に供えられていた花。

花を供えてくれていたのは、この人だつたのか。

「毎年、来てくれてはつたんですね。ありがとうございます」

そう言つて頭を下げれば、また穏やかな声がその頭に振ってきた。

「そりゃあね、俺にとつては、憧れの人だつたからな」

そう言つて墓を見る。

海も墓に目をやつた。

墓石には、斎藤家の墓と彫らでいる。

海の血の繋がつていない両親が眠る墓だ。

海がお父さん、お母さんと呼ぶのは、この下に眠つてゐる一人だけ。

私市が火を点けたのだろう線香の香が、この辺りにまだ漂つている。綺麗な花も飾られていた。海の手にも、花がある。

海は花を置いて、墓の前で手を合わせた。

高校生になつたこと、兄弟を見つけたこと。いろんなことを報告する。

そして目を開けると、後ろを振り返つた。

私市は、海が墓参りを終えるのを待つていてくれたのだろう。所以在無げにたたずんでいた。

男前なのにどこか眠たげな、そしてやる気のないような表情は、昔から変わらない。

私市と初めて会つたのは、もう随分と前になる。海がまだ、こちらに居た頃のことだ。近所に住んでいた彼は、海の父親を兄のように慕つてよく家に遊びに来ていた。

海の彼に対する認識は『よく遊びに来る面白いお兄さん』だった。小さな甥っ子がいるとかで、子どもの扱いに慣れている人だった。

そんな彼とは、今年八年ぶりに再開した。数ヶ月前に起こつた事件の捜査に、海の通う学校へ來たのだ。

最初は、まったく気付かなかつた。昔のことは、あまり思い出さ

ないよにしている。八年といつ歳月が、記憶を曖昧にしていた。彼から話しかけられなければ、ずっと気付かなかつたことだらう。話しかけられてすぐに思い出したもの、彼が海の父親と同じ刑事となつていたことにまた驚いた。海の父親は、殉職している。そして、母親もその後を追つようになつた。

「海くん？ どうした」

声をかけられ、海は我に返つて私市を見た。

彼の顔には心配そうな色が見て取れる。

「な……んでもありません。ちょっと、思い出したから」

「そうか……」

私市は、大きな掌を海の頭にやつて荒っぽく撫でた。海は慌てて頭に手をやつて、髪を整える。

「何するんですか。俺、もう子どもやないですよ」

拗ねた口調で文句を言つと、私市は笑顔を作つた。

「ははは。君はまだまだ子どもだよ。さ、せつかく会つたんだし、ゴハンでも食べに行こう。昼まだなんだ？」

聞かれて、海は素直につなづいた。

私市に連れられて入つたのは、駅前のそば屋だつた。広い店内には、結構な数のテーブルが並んでゐる。奥には、座敷も見えた。四人掛けの席に案内された二人は、注文を終えると、冷たいおしおりを手にとつた。

私市がそのおしおりで顔を拭いているのを見て、おっさんやんと思つたことはふせておく。

「君はうどんを頼むのかと思つたよ」

唐突に言われ、冷たいお茶の入つたコップに向かつて伸ばしてい手を止める。

「だつてほら、関西の人はうどんが好きだろ？」「うどんが好きだらう。

私は真面目な顔をしている。海は思わず噴き出した。遠慮なく笑つてから、手を上下に振つて私の気を引く。

「何言つてるんですか、俺もともとこっちの人ですやん。それに、関西にやつて蕎麦好きの人もいますよ」

「そうなのか？ 大阪に友達がいるんだが、蕎麦屋でもわざわざうどんを頼んでいたのが印象に残つてたんだ。だつて蕎麦屋なのにさ、何でわざわざメインの蕎麦を頼まずにうどんにいくんだつて思わないか？ 絶対蕎麦の方が美味しいだろうに」

私は腕を胸の前で組んで、首を捻る。相変わらず、妙なところにこだわる人だと海は思う。

「まあそうですよね。俺はうどんより蕎麦派なんで、うどん屋入っても、蕎麦があつたら蕎麦頼んでまいりますけどね」

「ほー。そういうもんかな」

「そういうもんですつて、あ、来たんちゃいます？」

海が厨房の方からお膳を持つてくる店員を見かけて、声を上げる。案の定店員は、一人の前に天ざるの乗つた膳を置いた。

しばらく無言で天ざるを食す。

海はすべて平らげた後で、ごちそうまでしたとしつけられた通りに手を合わせた。

それを見た私は慌てたように手を合わせるのがおかしい。

「あの、私はさん」

声をかけると、無言で問い合わせるように表情を変える。そんな私はに向かつて、海はおずおずと口を開いた。

「石井の件つてどうなつてます？ 犯人捕まりそうですか」

じつと、私は海に視線を注いだ。それに耐えるように見返していると、不意に私の視線が逸れた。

「そうか、君も彼女と面識があつたんだつたね。例の悪戯メールの件で」

海は頷いた。石井睦子の葬儀の数日前に、警察が海の家にも話を

聞きに来ていたのである。私市は当然そのことも知っているだろ？

「はい。犯人つて捕まりそうですか」

もう一度聞いてみた。せつかくの機会だ、答えてもらえないかも  
しれないが、駄目でもともとである。

私市は、自身の頭に手をやつて、少し長めの前髪を掴んだ。

「んー。まあ、頑張るよ」

なんとも頼りない返事である。

「メールを送つて来る犯人と、石井を殺した犯人で同じなんでしょうか」

海の問いに、掴んでいた前髪を放して、少し崩れた髪型を戻すよう  
に撫でてから、私市は口を開く。

「それを今、皆で調べてるところだよ。海君は気にせず、春名君と  
仲直りすることだね」

海は目を見張った。

「な、何で知ってるんですか？ 僕らが喧嘩したこと」

私市は無言で自身の頬を指さした。

「彼の頬が赤くなつてたからね。君と一緒に一人で出て行つて戻つた後に  
「はつ……」

笑あうとしたが、できなくて。海は大きく息を吐きだした。

「さすが、よう見ていますね」

テーブルの上に置いた手を合わせて、指を組む。そして、強く握  
りこんだ。

「私市さん。俺、怖いんです」「

私市の視線を感じる。海はもう一度、ゆっくりと息を吐き出して  
から、声を絞り出した。

「俺、人から必要とされてないと怖いんです。あいつは、光は俺の  
こと必要やないんですよ。そんなんあいつのせいやないのに、俺、  
あいつに奴あたりしてもうた……」

視界に私市の手が入つた。その手は握り締めた海の手の上に乗る。  
彼の手がゆっくり一度、海の手を優しく叩く。

海は顔を上げた。私市と目が合ひ。

「後悔してゐるなら、謝るのが一番だね」

私市は笑顔を浮かべる。

「経験談。それに、君は春名君が必要なんだろ?」

海は目を伏せた。

海からの答えはない。

私は、そろそろ出るかと、海を促して立ち上がった。

海が墓場で手を合わせていたころ、高橋空は笑顔全開で昼食のそ  
うめんが入った器の前で手を合わせていた。

「いつただつきまーす」

元気にそう言つて、箸に手を伸ばす。いつもなら、窓を開けて扇  
風機をつけながら昼食を食べるのだが、今日はクーラーのついた涼  
しい部屋で昼食にありつけている。それもこれも、光さままだ。  
つまり、空は数日ぶりに光の家に遊びに来て、ちゃっかり昼食をこ  
ちそうになつてゐるのである。

「悪かつたな。そうめんしかなくて」

珍しく殊勝な物言いをしたのは光である。光は、薬味のネギを麺  
つゆに入れている。そのネギの切り方が歪なのは、空が刻んだから  
である。

「いいよ。俺そうめん好きだし。っていうか、『じきわうになつてん  
の俺だし』

いつもなら、おいしい手料理をじちそうしてくれる家政婦さんが、  
夏バテで急きょ来られなくなつたそうなのだ。

出前を取ると言つた光に、勿体ないと台所を物色して、見つけた  
そうめんを茹でることを提案したのは空だった。

慣れない手つきで作つた割には、なかなか美味しい。そうめんは時  
間通りに茹でただけ、つゆは市販のものだから、美味しいのは当たり

前かもしれないが。

「でも、意外だつたな。おまえん家にそうめんがあつたの」空がそう言つてそうめんをすする。光はたいして興味を示す風でもなく淡々と口を開けた。

「ああ、たぶんお中元で送られてきたんだと思つ」

「なるほど、おまえん家、すっげーいっぱいお中元とかきそつだよな」

なんとなく、金持ちの家とこつのはそんなイメージだ。

その言葉に対し、光は否定も肯定もしない。黙々とそうめんを口に運ぶ。

空は、会話の糸口を探してふと思つたことを声にだした。

「なあ、なんかさー、うやむやになつちやつたよな。メール」

「桜田絵里からの?」

問われて、空は頷く。冷えた麦茶を一口飲み、言葉を続けた。

「この間、葬式行つただろ。あの後、川崎さんに聞いたらさ、石井睦子が死んだ後、ふつつりとメール来なくなつたんだつて」「へえ。他の一人も?」

尋ねた光に、空は頷いて見せる。

「らしいよ。あれつてさあ。あれかな。桜田絵里の靈が、恨んでた石井睦子を殺して、成仏したからかな」

空は言葉の途中で、身体の前で手をもたげて、幽霊のポーズを取る。

光は呆れたように、鼻で笑つた。

「あ、何その態度。ムカツク」

短気な空がすかさず声を上げる。光は、それを抑えるように手を軽く前に出した。

「空の話を前提として聞くけど。どうして桜田絵里は、彼女だけを殺して成仏するんだ? 絵里を虐めていたのは石井睦子だけじゃないはずだろ。石井睦子だけを殺して、メールが来なくなるのは変じやないか?」

言われて、確かにそうかも知れないと思つてしまつた。なんだか悔しい。

「そもそも、どうして桜田絵里が石井睦子を恨んでいると思つんだ？」

「どうしてって……」

それは、石井睦子が桜田絵里を虐めていたからだ。だが、虐めていたのは他の三人も同じだ。そう気づいて、空は言葉を切つた。メールの内容にもあつたように、石井達がしていた虐めは、無視をする程度のものだつたようだし、それは由香の証言とも一致している。

由香自身は、絵里が自殺した原因は自分ではないかと思っていたようだが、もしそれが原因なら殺されていたのは由香だつたはずだ。空が由香から聞いた限りでは、桜田絵里は前向きで元気な明るい性格という人間像が見える。そんな人が、自殺するというのがどうにも解せないのである。

「空、人を殺せるのは幽霊じゃなくて、人だよ」

光の声が耳に届き、思考の中に埋もれていた意識が顔を出した。

「お、俺だつて本氣で幽霊が犯人だとは思つてねーつて」

声を上げた空に、光が疑いの眼差しを向けてくる。半分は本氣だつたことを見抜かれてるんじゃないか、といつ疑惑が湧く。

「いや、嘘じやねーよ？」

「まあ、どつちでもいいけど」

光は興味無さそうにそう言つて、ゆっくりとテーブルに手をついて立ち上がつた。

「とりあえず、皿を洗つてからもう一度、最初から考えてみないか？」

空は、賛成と挙手をして、皿を運ぶために立ち上がつた。

## 第二十一章 犯人像

皿洗いは一人ですればすぐに終わつた。二階の光の部屋へ場所を移して、空はテープルを挟んで光の前に胡坐をかいた。

光は机の上にルーズリーフ用の用紙を置いて、シャーペンを手に空に目を向けた。

「桜田絵里からメールが来たのが事の始まりだな」

「うん。で、海が相談されたんだよな。えっと、君島さんに死人からメールが来るって」

光は紙に、横書きで『君島由香』と書いた。

「君島由香の他にメールが来たのが、伊藤静、川崎杏奈、そしてこの間亡くなつた、石井睦子」

光は言いながら、用紙に名前を記入していく。名前を線でつなげると円になるような書き方である。光は、その円の中に、桜田絵里の名前を書いた。名前の下には自殺と記入する。

「この五人は友人関係で、自殺した桜田絵里との仲が拗れていた」「ん、だな。その辺は、全員がそう言つてた。君島さんが言つには、桜田絵里とは仲直りしかけてたけど、石井さんと川崎さんがその仲直りを邪魔したって話だつたな」

空は、公園で聞いた君島由香の言葉を思い出しながら光に説明した。

「ああ、聞いた。僕が聞いた話で推測すると、桜田絵里と四人の関係がこじれたのは、伊藤静の彼氏が、桜田絵里に気持ちを移したのが原因みたいだな」

「マジで？ 別にそんなの桜田絵里は悪くないじゃん。それで無視かよ。女つて怖え」

嫌そうに顔を顰めた空に、光は目をやつた。

「あくまで推測だよ。で、亡くなつた後、一年も経つた後に、メールが来るよつになつた」

無理やり話しあげて、光は桜田絵里と書かれた部分から四人の名前にそれぞれ矢印を引いて、メールと記入する。

「そうそう。君島さんが言うには、一番最初のメールアドレスは桜田絵里のメールアドレスと同じだつたって」

「でも、そう証言しているのは君島由香だけだよな」

紙に視線を落としていた空は、顔を上げて光に目をやつた。

「そうだけど。何？　君島さんのこと疑つてんの」

「いや、別に。ただ、嘘である可能性もあるつてだけの話だ」

空は納得できないように、うーんと唸つている。

「まあ、それはひとまずお」といて、次行くぞ」

放つておけばいつまでも、唸つていそつた空に声をかけて、光は眼鏡を人差し指で押し上げた。

「空は、どうして一年も経つてからメールが送られてきたんだと思う？」

「さあ、それは分かんねー。けど」「けど？」

空が言い淀む気配を見せたので、光はもうひと押しする。

「何か考えがあるなら言ってくれ」

空は拳を口元にあてる。空が何かを考えるときににする得意のポーズだ。

「あああ。よくよく思い出すとさあ。桜田絵里の父親。あの人に桜田絵里の日記が渡つたのが今年みたいなんだよね」

「そうなのかな？」

空は頷いた。思い出すように、視線を上に向けて口を開く。

「そう。確かに、桜田絵里の母親が先月日記を父親に渡したとかいうようなことを言つてたから。それ思い出してさ」

光は頷いて、空が続きを話すのを待つようにじっと視線を注ぐ。

「もし、もしだよ。父親が犯人なら、今年になつてメールが来たのは、今年日記を手に入れた父親が、その日記を読んだからなんじゃないかと思って」

尻すぼみになりそうな声を押し出して、空は上目使いで光を見る。彼は大きく息をついた。

また、馬鹿って言われるのかと身構えた空に、光は告げた。

「確かに、それ、良い線いってるんじゃないかな？」

「そうだよな。やっぱそんなわけない……って、え？　お前今、良い線いってるって言つた？」

半ば腰を浮かせて、驚きに声を上げる。

「ああ。言つたけど。……なんだよ空。その馬鹿面」

空は呆けた顔で光を見返し、ゆっくりと半分上げていた腰を下ろした。

「いや、また馬鹿にされると思ったからや。まさかお前が俺を褒めるとは。……つてちょっと待て。お前今、馬鹿面って言つた？」

喋つていてる途中で馬鹿にされたことに気付いた空が声を上げると、光は手を挙げて空を制した。

「そんなことより。こっち。桜田絵里の父親がメールを送つてくる犯人だと仮定するなら、君島由香の言つていた最初のメールアドレスは、絵里の持つている携帯電話のアドレスと同じだつたっていう証言も、嘘ではない可能性が高くなる」

空は首を傾げた。何故、可能性が高くなるのだろうか。絵里の父親が持つていた絵里の携帯電話は使用できなくなつていた。イコール、アドレスも使えなくなつていてるのではないか。空はそう、考えたのである。考えをそのまま光に伝えた。

「いや、そつとは言い切れない」

光は机の上に置かれた紙を裏返すと、長方形を一つ並べて書いた。そして右側の長方形の上に、空から見てちゃんと読めるように『新田』と記す。左側の長方形の上には『新』と書いた。

「じつちが、桜田絵里の持つていた携帯電話だとするだろ」  
シャーペンで空から見て右側に書かれた長方形を示す。

「携帯電話は解約しても、もちろん使えなくなるけど、機種変更することでも、古い方の携帯は使えなくなるんだ」

「んー？」

要領を得ないと首を傾げる空。

「空、機種変更の意味、分かるよな？」

そう尋ねた光を、空は睨んだ。

「おつまえ、また馬鹿にしてるだろ！ 機種を変えるんだろ？ 新しく

光は肩をすくめると、先を続けた。

「まあ、そんな感じだな。機種変更って、ケータイを持つてない空には馴染みがないだらうけど。こっちのケータイで使っていたドレスを、そのままこっちの、新しいケータイでも使えるんだよ」

そう言いながら、右側の長方形から左側の『新』と書かれた長方形に向かつて矢印を書きこむ。

空は拳を口元にあて、しばらくその紙を見つめた。少し俯き加減になつたおかげで、大きな瞳に影ができる。

「んつと、だから？」

拳を口元にあてたまま、首を傾げたその姿は、妙に可愛いらしく見える。普通の人ならば、その可愛らしい姿に顔を赤らめそうな程だが、光は平然と、否、少し苛立つたように眉を寄せた。

「少しばかりは考えようよ

「考へても分かんねーから聞いてんだろ」

口元にあてていた拳をはずして、空は勢いに任せて机を叩いた。

「馬鹿つて言うなよ

言われる前に牽制しておく。

光は大きく息を吐いた。

「はあ。まあ、いいけど。つまり、桜田絵里の父親は、桜田絵里の使っていたケータイの契約を引き続き行つているんじゃないかつてことだ」

そう言つたが、まだ要領を得ない顔をしている空に、もつ少し分かりやすく伝えることにした。

「だから、そうだな。桜田絵里の父親は絵里のケータイを機種変更

して、使つてゐるんじゃないかつてことが言いたいんだ。つまり、絵里の使つていたケータイの契約を切つた訳ではなく、契約は引き続いだまゝ、新しいケータイに変えたんだ。その時、メールアドレスは変更せずにそのまま二年間ケータイを使い続けていた

空は、大きく手を打つた。

「あ、そうか。分かった。桜田絵里の父親は、絵里のケータイを機種変更したあと、その電話を自分で使つていたんだ。父親は、自分の携帯電話からメールをしたけど、君島さんから見たら、絵里のケータイからメールが来たように見えたんだ。メール内容も絵里からのように書いてあるし、余計だよな」

空は感心して光を見る。これで、絵里のアドレスからメールがどうやつて来たかという謎は解けた。だが、次の疑問が空の頭を過ぎる。

「あ、でも。桜田絵里の父親はどうやつて、四人のアドレス知つたんだろう。最初のは、ケータイに入つてたとして。途中で何度もアドレスえたのに、メールはどんどん来てたつて言つてたし」

光はそうだなと呟いた後、おもむろに紙をまた裏返して、先ほど名前を書いた面を表に向けた。

そして、桜田絵里の名の上に父と記し、シャーペンで君島由香他四人の名前を順にさした。

「例えば、この四人の内の誰かが、メールを送つた犯人、今は桜田絵里の父親だと仮定して、この父親と繫がつていたとしたら？」

「繫がつてたつて、共犯でことか？」

驚きの声を上げた空に、光は頷く。

「そう、共犯なのか、脅されてそうしたのか。理由は分からぬけど、この中の誰かが、アドレスを犯人に教えていたとしたら、犯人はメールを送り続けることができる」

「そんな、だつて。みんな気味悪がつてたし、そんなことするなんて思えねーよ」

空はテーブルについていた手を、きつく握り締めた。

「ああ、今言つたのは可能性の一つに過ぎない。彼女たち全員のアドレスを知る他の方法もあるかも知れないしな」

でも、それは気休めだと空は思つた。

言われてみれば、光が言つた可能性が一番高いように思えたからだ。この中に裏切り者がいるかもしれない。そんな風には思いたくないが。

「何で、あんなメール送ろうとしたんだり」

やるせない氣分で、空は呟いた。光は、持っていたシャープペンシルを机の上に置いた。

「桜田絵里はこの四人の中の誰かに殺された。そう思つたからじゃないか」

唐突に言われた言葉に、空は勢いよく顔を上げる。

「え？ なんで？」

「メールに書いてただろ『誰が私を殺したの？』『私を殺したのは誰？』って。日記に、そう思わせるようなことが書いてあったのかも知れないな」

空は目を大きく見開いた。

「それで、犯人は石井睦子を殺したのか？ 絵里を殺した犯人だつたから」

そう言つと、光は首を横に振つた。

「話が飛躍しすぎだ。可能性はあるかもしれないが、そもそも、石井睦子を殺した犯人とメールの犯人が同一人物とは限らないだろ」

「そうだけどー」

空は拗ねたように唇を尖らせた。

「とにかく一度……」

光がそこまで言つた時、テーブルの上に置いてあつた携帯電話が音を立てた。マナーモードになつていたせいか、バイブ音だけだ。光はそれを耳にあてた。

どうやらメールではなく電話だつたようだ。

光は言葉少なに通話を終えると、空に向き直つた。

「出かけるぞ」

それだけ言つて立ち上がる。空は訳が分からず光とおなじようこ、立ち上がつて後に続いた。

「コーヒーショップの店内に入ると、すぐにこちらに向かつて手を上げた人物に気付いた。空は、光と連れだつてその人物の座る席まで行く。

「あはっ。高橋君だー。何で一人が一緒に来んの？　あ、一人知り合い？」

明るく声を上げたのは、先ほど光との話の中でも名前の挙がつた川崎杏奈だ。その杏奈に、光は頷いた。

「ああ、クラスメイトだ」

空は光とともに杏奈の前の席に座る。

「へえ、同じガツコなんだ。そつ言えばどこのガツコ？」

聞かれて答えると、杏奈は驚きの声を上げた。

「ええ？　清秀高校つてあつたま良いガツコじやん。わお、すごい！」

何故か拍手をする杏奈。空は照れて頭を搔いた。

「別にすごくないよ。で、大事な話つて？」

余計な話をしたくはないのか、光が相変わらずのポーカーフェイスで割り込んだ。

杏奈は、少し怖気づいたように光に目をやつてから口を開く。

「うん……。あの、エリンこと」

「エリつて桜田絵里？」

興味をひかれて尋ねた空を見て、笑顔を作ると、杏奈は続けた。

「ん、そう。最初さ、ムツコ、メールのことあんまり気にしてなかつたのに。最近急に呪いだとか言いだしたからー、おかしいと思つてさ。問い合わせたんだあ」

杏奈はその時のことを思い出しているのが、苦い表情を作る。中身の少なくなった「コーヒーのタンブラーを軽く振つてから、コーヒーを口に運ぶ。

よく、あんな長い爪で物を持てるよな。と、空は、奇麗にネイルが施された杏奈の爪を見て、そんなことを思った。

「ムツコは……」

言い淀んで顔を俯けた杏奈に、先を促すように光が声をかける。

「石井さんは？」

「ムツコは？」

「え？」

杏奈は顔を上げた。一度大きく息を吸つて口を開く。

「ムツコは、エリが死んだ時、その場にいたんだって……」

「え？」

「亡くなつた桜田絵里を発見したのは、大学生だつたはずだけど」光の咳くような声に、杏奈が反応した。

「うん、表向きはそうなつてゐる。だつて、ムツコ、屋上から落ちたエリを置き去りにして逃げたつて……」

空は軽く息を飲んだ。嫌な気分になつて隣に座る光に視線を送る。その視線に気づいたのか、光は一度こちらに目を向けて嘆息すると、杏奈に視線を戻した。

「何で、それを僕たちに？」

「自分で仕舞つておくには、重すぎたから、かなー」

杏奈は口元だけで笑みを作つた。空と光は目を見合わせる。

「ムツコが呪いだつて言ひだしたのは、エリからのメールがどんどん詰めてた頃の内容になつてきて、もしかしたら、メールを送つて來てる犯人が、自分のしたことを知つてゐるんじゃないかつて思つて、怖くなつたからなんだと思つ」

そこまで言つて、彼女は残つていたコーヒーをすべて飲み干した。

「それに、最近。外にいると誰かにあとをつけられてたみたいだし。そう言ひのも重なつて、ちょっと鬱っぽくなつてたんじゃないかな」

「石井さんも悩んでたんだな」

空は小さく咳いた。石井睦子の印象は、空にとつて決していいも

のではなかつた。初対面で、挨拶したときに田も合わせなかつたり、君島由香につつかかつたり。そんな態度の裏に、睦子もまた、絵里の死に対する罪悪感に苛まれていたのだろうか。その罪悪感から逃れるために、気を張つて。あんな態度ばかりとつていたのか。そう考えると、悲しくなつてくる。

「桜田さんが屋上から落ちた時、その場にいたのは石井さん一人だつた？」

光の尋ねる声が耳に入つて、空は知らず下がつていた視線を上げて杏奈を見る。いつも笑つているような杏奈の顔から、表情が消えた。

「春名君はどう思つ？」

杏奈の言葉に、光は顔を顰めた。

杏奈は光の表情を氣にも留めず、あつと声を上げた。

「そうだ。春名君にお願いがあるんだけど。これ、シズカに渡してくれないかな。次会つた時でいいからさ。お願い」

光を拝むように手を合わせた後、杏奈が差し出したのは、可愛らしいパンダのキャラクターが描かれた封筒だった。

光が難色を浮かべた。杏奈は唇を尖らせて、持つていた封筒を光の手に押し付けた。

「もう。それくらいしてくれてもいいでしょー。春名君。シズカのカレシなんだしい」

渋々といった体で封筒を受け取つた光に、笑顔を向けた後、杏奈はまたもや声をあげた。

「あ。そろそろ時間だ」

杏奈は左腕につけていたカラフルな腕時計に手をやつて、確認するように頷いた。そして、光と空へ笑顔を向ける。

「話し聞いてくれてありがと。ちょっとすつきりした。アタシこれから人と会う約束してんだ」

「あ、じゃあ」

そう言つて、空は椅子から腰を浮かせた。それに合わせて他の二

人も立ち上がる。そのまま、コーヒーショップの外へ出た。入口の脇で立ち止まり、挨拶を交わす。

「最後に一人に会えてよかつたよ。アタシ、高橋君の顔超好きなんだー。春名君みたいなキレイな顔も好きだし。なんていうの？両手に花みたいな？」

杏奈の邪氣の無い笑顔に、空もつられて笑顔になる。

「訳わかんねーし。つていうか、最後って。また会おうと思えばいつでも会えるじゃん」

空の言葉に、杏奈はそつだねと返した。そのまま、手を振つて空たちは杏奈と別れた。背を向けた杏奈の姿が小さくなつていく。

「あっ」

空は小さく声を上げ、胸を押さえた。

「どうした？」

光に声を掛けられ、空は首を横に振る。

「何でもない」

ほんの一瞬、嫌な予感が空を襲つたのだ。

空は、慌てて頭を振つて。その予感を追い払つた。

## 第一十一章 容疑者

海と別れた後、私はその足で署に戻った。一時間ほど抜けさせてもらつていたのだ。結局、一時間を少し超えてしまつたが。

「おう、私は戻つてたのか。どうだ、進展あつたか」

「ないですなー、残念ながら。虹さんの方は？」

入口から顔を覗かせた中年刑事に質問すると、彼は私は手招きした。

「ちょっと来いや。面白いもんがみつかつたぞ」

面白いもんとは、なんぞや。

頭にそつ疑問を浮かべながら、私は虹さんの広い背中を追つた。

別室のドアを開けると、一人の刑事が椅子に座つて、小さなテレビを見つめていた。

その二人の内の一人、新人の河合が気配を感じたのかこちらを振り返る。

「ああ！ 私市さんつ。勝手にいなくならないでくださいよー。俺、迷つちやつたつすよ」

恨みがましい目で見上げられ、私はふやけた表情を見せた。実は、私は河合と一緒に聞き込みに出かけたのだが、墓参りへ行くために彼の隙をついて、抜け出したのであつた。上司の許可は取つていたが、河合に説明するのが面倒くさかつたのだ。

「ははは。君が勝手に迷子になつたんだろう。こうやって再会出来たんだから、ま、良しとしようや。で、何見てるんですか？ 梶谷さん」

私は話を逸らすべく、河合の横に座る梶谷に目を向けた。視界の片隅に、納得いかない顔の河合が映るが、気にしないことにする。

「ああ。石井睦子の家の近くにあるスーパーの監視カメラの映像を借りてきたんだ」

私市の質問に答えた梶谷は、細面の顔に細く鋭い目が印象的な男だ。私市より六つ上と聞いたことがあるので、年齢は三十三歳だろうか。今日は珍しく眼鏡をかけている。

「で、なんか面白いもんでも映つてたんですか？」

私市が一人の後から腰をかがめて、テレビに顔を近づけると、その横で虹さんが頷いた。

「まあ、見ろや。おい、河合のボウズ。ちやつちやと回せや

「ぼ、ボウズって言つのやめてくださいよ、虹さん。巻き戻しつす

ね。分かりました」

拗ねた顔で河合は小さく唇を尖らせた。声も小さかつたのは、虹さんが怖いからだろう。

河合の操作で、巻き戻しされたビデオテープが再生される。

どこかの駐車場が映っていた。その手前にある道も映っている。

商品を納品に来た車などを映すために設置されている監視カメラの映像だろうか。

時刻は夜の九時を過ぎている。そうと分かるのは、画面の右下に時刻がしっかりと表示されていたからだ。

暗いが、街灯や店舗に備え付けてあるライトのおかげで、それなりに周りがよく見える。

「人っ子一人通りませんね」

しばらく見て漏らした感想に、虹さんが反応した。

「河合、お前、回しすぎたんじゃねーだろうな」

「だ、大丈夫ですよ。もうすぐ、もうすぐ映りますから」

焦ったように、立つたままの虹さんを見上げて上ずつた声をあげる。そんな河合の様子に口元を緩めてから、私市はテレビの画面に視線を戻した。

その時である。画面の左端から女性の姿が現れたのだ。顔立ちや

背格好から石井睦子であること間に違いないと思われた。

彼女はどうやら、ケータイ電話で通話中のようだ。特に急ぐ気配も見せず、ゆっくりと画面の中を通過していく。

「こんな人通りの少ない道をわざわざ通らなくとも、あの家ならもうちょっとと明るくて大きい道があつただろうに」

つい、そう呟いた私市に、梶谷は頷いた。

「おい、来るぞ」

虹さんが突然声を上げた。私市は、画面から逸れた意識を戻した。

「あ、こいつは……」

私市は画面の中に現れた人物に、見覚えがあった。  
数日前に話を聞いた関係者の一人だ。

名前は植田和樹。二十歳の大学生で、石井睦子の元恋人だつた。  
「何でこんなところに、この時間は確か友人と会っていたんじゃ」

「そうつすよねー。おかしいっすよね。私市さん」

河合が眉を寄せている。彼も一緒に話を聞きにいっていたのだ。  
植田の友人にも事実確認を行つていたのだが。嘘をついていたとい  
うことか。

私市はテレビ画面から視線をはずし、眉間を指で揉みながら声を  
上げた。

「虹さん、ニンドウしますか？」

「ああ。だな。課長には俺から言つとくから河合と一緒に行つて来  
い」

「はい、了解です」

勢いよく立ちあがつた河合は、早速ドアへ向かう。私市はゆっくりと腰を上げてその後を追つた。

植田和樹の自宅は石井睦子の自宅から五キロほど離れた場所にあ  
る。

質素なアパートの一階。一〇一号室が植田の部屋だつた。

平日の昼間だが、彼は在宅していた。

部屋から顔を出した植田は、ドアノブを掴んだまま、胡散臭そうな顔で私市たちを見る。

彼は茶色く染めた、少し痛んだ髪に指を突っ込んで、頭を搔きながらあぐびをした。

「あー。刑事さん。なんか用つすか」

「ああ。またちょっと聞きたいことがあってね。できれば署まで」同行願えないかと思つてね」

「はあ、まあ。いいんですけど」

あつさりと植田は頷いた。ちょっと待つてくださいと言い置いて、彼は部屋へ入つて行く。ドアが閉じないようドアノブを掴んでいた私市は、我知らずそれを強く握り締めた。

傍らで、河合が息を飲む音が聞こえる。

一間続きの部屋が彼らの視界に入っていた。半分ほど閉められた襖の向こう。おそらく寝室として使用されている部屋の壁一面に無数の写真が貼つてある。

それは、全て、石井睦子を隠し撮りしたと思われる写真だった。

私市は取調べ室の椅子に腰かけていた。

机を挟んだ正面に、植田がだらしない格好で座っている。

「だからー。その時間はダチと一緒にいたつたつしょ。あいつ等にも聞いたんじゃねーの。けーじさん」

自信満々にそう言った植田に、私市は写真を見せた。それは、監視カメラの映像をデジタルカメラで撮影したものである。荒いが、人の顔が判別できないほどじゃない。

「これは、君だよね」

植田はその写真にちらりと見やつて、すぐに目を背けた。

「やー。どうすかね」

足を組んで、身体を半ば斜めにして座る植田の態度は、決して良いとはいえない。

私は机の上に置いた写真に手をやると、滑り出るよつと植田の方へ近づけた。

「もう一度よく見て、これは君だね」

ゆづくとした口調の中に威圧を込めると、植田は渋々といつたていで写真に視線を落とした。

「はあ、まあ。俺ですね」

頷く植田に、間髪入れずに次の質問をする。

「そう。じゃあ、これがどこだか分かる?」

「さあ? 暗いし良く分かんないっすね」

私は、机の上に身を乗り出して、笑顔を作った。

「これは、石井睦子さんの家の近くにあるスーパーの裏道だ」

無言で、植田は私は写真の一部を指さした。  
「これは、石井睦子さんの家の近くにあるスーパーの裏道だ」  
植田は口を開かない。

「日付を見てくれ、小さいけど見えるだろ?」  
これは石井睦子さんが亡くなつた日だね」

覗きこむようにして、植田を見るが、彼は返事をしなかつた。

私は嘆息して、話を続けた。

「この時間、九時二十八分。この時間は君、友達といったということになつてゐるけど。どうして、こんなところを歩いていたんだい?」

「お友達の姿は見えないようだけビ。虚偽の証言をすると、どうな

るか知ってる?」

あくまでにこやかに話をする私は、薄気味悪く見えたのだろうか。植田は両手で頭を搔くと、その手をテーブルの上につけて私は正面から見つめた。

「だって、しょーがねーじやん。アイツ俺のこと振りやがつたんだぜ。散々貢いでやつたのにわ。アイツは俺のモンなのに。自由にな

りたいとかぬかしやがつて

「ふむ。それで、殺した」

その言葉に、植田は目を見開いた。

「ま、まさか。俺は殺ってねえよ！だから嫌だつたんだ、言うの。俺は、アイツのあとつけてただけだよ。アイツ。電話しても会つてくんねーし。だったら、話する隙狙うしかねーじゃん」

私はテーブルから身体を離して、背もたれに体重を預けた。腕を組む。

亡くなる数日前から、石井睦子は誰かにあとをつけられていると言つて怯えていたと、周囲の人間から証言を得ている。あとをつけていたのは、どうやら彼で間違いなさそうだ。

「で、結局話はできた？」

その問いに、植田は力なく首を横に振つた。

「いや、途中で見失つちまつた。アイツん家の近くまで来た時、アイツ急に走りだしちまつて、まかれた。アイツも馬鹿だよなー。逃げなきや死なずにすんだかもしんねーのに」

植田は片手の肘をテーブルに付き、その手の上に額を乗せた。その姿を図るよう見ていた私の耳に、ノックの音が聞こえてきた。事情聴取に立ち会つていた刑事がそのドアを開ける。私はその刑事に呼ばれて立ち上がつた。

ドアの外へ出ると、相も変わらず厳めしい顔をした虹さんの姿があつた。

横に大きいが背の低い虹さんを、私は見下ろす格好になる。

「で、どうだ。やつこさん。なんか吐きそうか？」

「さあ、どうでしよう。まだ分かりませんね」

そう言つと、ふむと唸つて、虹さんが顔を上げた。

「おい、私はちょっと変われや。俺が話を聞いてみつから。その間に飯食つてこい」

言われて、腕時計に目を落とすと、午後五時三十分を回つたところであった。

定時が五時三十分であるから、今日も残業決定である。  
私は虹さんの言葉に甘えることにし、自分の席へ向かうべく歩  
きだした。

## 第一二三章 また……

暗い河川敷を彼女は進んだ。

連れはその後をついてきているはずだ。

ポンポンポンとある街灯の光は、ここまでなかなか届きにくい。しかし、月明かりのおかげでまったくの暗闇ということはない。夕立があつたせいだろう。ミコールを履いた足に当たる草が濡れている。踏んだ草が少し滑つて歩きにくかった。

足を止めて、連れと会話を交わす。

必ず白状させてやると彼女は思っていた。

許さない、許してやるものか。

自分は知っているのだ。何もかも。

憎かつた、大事な友人を殺した目の前のこの人物が。警察になど突き出してやらない。

一生、自分に弱みを握られて生きていけばいいのだ。死ぬまで苦しめてやる。

憎しみをこめて、目の前の人物を睨んだ。

暗い感情に身を投じてしまつた彼女の目に、明るい光が入ることはもう、一度となかつた。

何をする氣も起きず、海は自室のベッドで横になつていた。

午前十一時を少し回つたところである。パジャマを着替える氣も起きない。

昨日の私市の言葉が、ずっと頭に残つていた。

『君は、春名君が必要なんだろう』  
と、いうその言葉が。

必要だと即答できなかつたのは、躊躇いと驚きがあつたから。

海はいつも人と関わる時、一線を引いていた。

それは血を分けた兄弟である光も空も同様だつた。親しく会話を交わしても、これ以上好きになつてはいけない、近づいてはいけないとストップをかける自分がいる。

それなのに、私市の言葉で気づいてしまつた。自分が光を必要としていると、気づいてしまつた。

だが、必要だと口にしてしまえば、失うのが怖くなる。

光は大事な存在だ。もちろん同じように血のつながつた空も。それでも、やはり怖いのだ。

大事な人を失つた時のショックは、嫌というほど経験しているから。

大事な人ほど、簡単に海の前からいなくなる。自分が必要としている人間は、自分のことを自分ほど、必要としていないということを知つてゐるから。

海は寝返りを打つた。

その拍子に、ベッドの脇に置いた携帯電話が目に入る。その時、その携帯電話が光を発した。通話ボタンを押すと、突如大きな声が耳を打つた。

『かーいー。暇、遊んで』

開口一番それかと、思わず突つ込みたくなる。

「空やな？ 今日は家の手伝いする言つてなかつたか」

そう尋ねると、少し間を開けて空が答えた。

『んー。実はさあ。お盆休みなの忘れててさ。宿題全部終わつちまつてるしい。親は商店街の皆と温泉旅行に出かけちまつたし。暇なんだよー』

駄々をこねるような言葉に、海の口元に笑みが浮かんだ。暗い気分が少し飛んだ気がする。

「ええよ。どうする？ 頃飯でも食いに行くか？」

その言葉に、元気な返事が返ってきた。

それはもう、思わず携帯電話を耳から遠ざけたほどの大声だつた。

駅前のショッピングモールの中で、ラーメンを食べた。『じつで』してスープと超さっぱりスープが選べる有名なチエーン店だ。そこですっかり満腹になつた一人が、店から出ると、海が呼びとめられた。空と二人、その声の方へ振りかえる。空には見覚えのない、同年代の男性一人がこちらに向かつて手を振つていた。一人は黒ぶち眼鏡をかけたインテリタイプ。もう一人は爽やかなスポーツマンといった印象を空に与えた。

「おー。柏木と浅川やん。偶然やな」

海はイエーイと二人それぞれとハイタッチを交わす。  
空にスポーツマンという印象をもたれた柏木が、にこやかな笑みを空に向けてきた。

「お、何、紫藤の彼女？」

その言葉に、海は慌てたように手を上げたが、空が口を開く方が早かつた。

「彼女、だとお。誰が女だこるあ！」

大音声が辺りに響く。

かなり驚いた顔をしている浅川の横で、柏木が平然と、空の方へ手を伸ばした。

「あ、本當だ。胸ないや」

空の胸辺りに手を置いて、柏木が笑顔を作つた。それを見ていた海と浅川が、凍りついたように動きを止め、表情を歪める。

空は握つた拳を震わせて、柏木の尻を蹴りつけた。

痛いつと大声を上げた柏木に、腹でなかつたことをありがたく思えと言いたい。

「うう。痛つてーな。この蹴りはさすがに女じや無理だわ」  
はははと片手で尻をさすりながら、爽やかに笑う柏木だった。まったく懲りていらない。空がまたも拳を震わせている。

空がまた暴力沙汰を起こす前に、海が声を上げた。

「あー、あの。あれや。ホレ、空。こっちの二人は俺の中学生時のダチでな。浅川と柏木」

空は、不機嫌な顔で柏木と浅川に視線を送る。浅川は苦笑いで少しずれた眼鏡をなおした。その横に立つ柏木は満面の笑みだ。

「で、こっちは高橋。高校の同級生やねん」

「よろしく」

柏木が爽やかさを發揮して、手を差し出しだが、空はその手を払って海の背後に隠れた。まるで威嚇するかのように、海の後ろから半分顔を出して柏木を睨む。

柏木は差し出した手を、頭にやつた。

「あはは。嫌われちゃったかー」

「あー。あの、せつかくやし。どつかで茶ーでもするか」

海の提案で、ショッピングモール内にある「一ヒーショップ」でお茶することになった。

それぞれに買ってきた飲み物を持って、席に着いた後。海と浅川は、柏木に空へ謝罪させた。熱しやすく冷めやすい空の性格が、こういうときには良い方向へ働く。柏木の謝罪を受けて、空の機嫌が少し直ってきたので、しばらく取りとめの無い話題で話に花を咲かせることができた。

「そう言えばー。紫藤知ってる？ 中学ん時の同級生の女子が、この間死んだこと」

話題の切れ間、浅川がそんなことを言い出した。

「アーチつてる。石井だろ。俺も聞いた」

柏木が頷く。

「ああ、知つとるわ」

心なし、声のトーンが下がったことに気付いた空は、海にそつと

視線を向ける。表情はいつもと変わらない。

「俺聞いたんだけどさ、犯人。石井の元彼らしいぞ」

浅川が声を潜めてそう言った。空は驚いて、浅川に目を向ける。

「え？ マジかよ。そんなのニュースでやつてたっけ」

空の言葉に、浅川は首を横に振つて見せた。

「違う。俺の兄貴の友達の従兄の妹が友達の友達に聞いたらしいんだけどさ」

「随分遠回りしてんな」

海は性分なのか、突つ込みを入れる。浅川はあからさまに顔を顰めた。

「いいんだよ。そこは流せつつーの。で、その兄貴の従兄の友達の妹がさ」

「さつきより減つてね？」

今度は柏木が突つ込みを入れた。空も確かにさつきと違うような気がすると思う。話の腰を折られた浅川は、黒ぶち眼鏡の軽く押し上げて、少し不機嫌な声を出した。

「だから、いいんだよ。とにかく、その石井の元彼が警察に連れて行かれる所見たんだってさ」

「へえ」

空は海と顔を見合させる。

犯人が石井の元彼であるならば、悪戯メールと石井睦子の死は関係がなかつたということになる。

「そういうえば、一人つてさ、海と同じ中学だったつてことは、桜田さんつて子のこと知つてるんだよな」

思いつきで、空は一人に話を振つてみた。柏木と浅川は顔を見合わせる。

「あー。あの子もなー。可哀相だつたよな。可愛かったのに」

「俺は同じクラスになつたことないけど、知つてるぜ」

二人それぞれの答えに頷いて、空は聞いてみることにした。

「その子、自殺したつて本当？」

またも二人は顔を見合せた。

「あれ、事故じゃなかつたんだっけ？」

柏木が問えば、浅川が首を横にふった。

「いや、結局自殺でかたがついたはずだよ。遺書も何もなかつたし、事故が自殺か判断難しかつたらしいけど」

浅川はそこまで言つて、アイスコーヒーを啜つた。

「桜田の親が虐めがあつたんじやないかつて、学校側に問い合わせに来てたーとか、聞いたことある」

その言葉に、柏木も頷いた。

「ああ、それは俺も聞いた。実際虐め、あつたらしいし」

それは知つてゐる。虐めていた本人たちから話を聞いたのだ。だが、そんなことは口にできないので、空はただ頷いた。

「へー。そうなんだ」

「それにして、桜田の噂つて他校の生徒にまで伝わつてんだなあどこか関心したよ」と、柏木が言つた。

「え、ああ。まあね」

しどろもどろになる空であつた。思わず助けを求めるように海に目を向けた空は、眉を顰めた。その表情を目にし、柏木や浅川も海に視線を送る。

海は心ここにあらずと言つたいで、窓の外に視線を向けていた。こちらの話など耳に入つていなかのようだ。

「かーいー。お前人の話聞いてる？」

空が海の肩に手を置いて軽く揺さぶつた。

我に返つたように、海は瞬きを繰り返して空に顔を向ける。

「え？ なんか言つた？」

その言葉に、浅川が苦笑を洩らす。

「まだよ。お前クラス会の時もぼーっとしてたよな

「なんだ、夏バテか？」

少し心配そうに声をかける柏木に、海はイヤイヤと片手をあげて

左右に振つた。

「ちやうちやう。ちよつとだけ考え方してただけやから」

「ふーん。何、女のことかよ」

からかうような口調で浅川が問う。

「何？ 恋煩いか！ 紫藤。話せよ」

柏木が浅川の話に乗る。慌てて否定している海の様子がおかしくて、空は笑った。

だが、頭の隅で、何かが変だと思つていた。

これから服を見に行くという柏木達と別れた後。空と海は家電製品の置かれたフロアを歩いていた。大きなテレビが並ぶ売り場の横を通り、海が突然歩くのをやめた。

「なあ、空」

「ん？」

一メートル程先を歩いていた空が、その声に振り向くと、海はどこか思いつめた表情を見せていた。

「俺、お前が好きや」

「……」

空は驚いた表情で、しばらく海を凝視した。

その後、口元に手をやつて、一度視線を上に向けた後、海に目を戻す。

「何、恋煩いの相手つて俺」

からかうような口調で、自分を指さす空に、海は撫然とした顔を向ける。

「あほ」

空は、海との距離を縮めると、彼の目を覗きこんだ。

「ゴメン。俺も好きだよ」

そう言つてニシヒキ笑つてやる。海はあからさまに女堵の表情を浮かべた。

「つて、何この会話」

「どこか照れくさくて、空はそつと笑つた。だが海の表情はすぐ暗くなる。

「どうした?」

「また海の田を覗きこんだが、海の視線は逸れて行く。

「光は……」

「光?」

呟くように言われた言葉を、確認するように繰り返す。

「光はどうなんやろ」

「どうって、どういう意味?」

尋ねた空に、海は首を振つて見せた。

そして、不意に空に抱きついてくる。

「ちょっと! これはさすがに周りの視線が痛いって、海!」

空にしては抑えた声を上げて、周りをうかがいながらも海を引き剥がそうとする。平日の昼間とあって、周りに客が少ないのがせめてもの救いか。一人にあからさまに好奇の視線を向けてくる者もいれば、すぐに視線を逸らしていく者もいる。

空は、いい加減にしろと海の肩を繰り返し叩いた。その動きを止めたのは、海の一言が耳に入つたからだ。

「なんか、もう疲れた」

空の肩に額を乗せて呟かれた言葉。

珍しい海の弱音を聞いて、空は海に視線を向ける。肩に額を乗せられているせいで、空には海の顔が見えない。

俺、もしかして甘えられてる? そう思つて、空は片手を海の背にあてて、ぽんぽんと叩いた。

しばらく周りからの好奇の視線に耐えた後、そろそろ行こうかと告げようとして、ふとテレビから聞こえてきた声に気を取られる。

近所の川の名前が、テレビから聞こえてきたのだ。そちらに田を向けると見覚えのある風景が映つていた。何度も足を向けたこともある、栖川すがわという名の川だ。

「海、栖川映つてる」

空は海を揺さぶつて、テレビの方へ顔を向けさせた。知っている場所がテレビに映つてるのは、変な感じがする。

『……未明。川の中で女性の遺体が発見されました』  
アナウンサーの声とともに、空と海のよく知る人物の名前が被害者として、テレビ画面に映し出された。

川崎杏奈。

|画面に映つた名はそれだつた。

## 第一十四章 次のターゲット？

ショッピングモールの電化製品売り場で、ニュースを見た直後。風見から海へ、呼び出しの電話がかかった。

空と二人、風見の家に行くと、そこには彼女の他に由香と静の姿があつた。一人とも、意氣消沈としている。

海は、由香と田があつた。彼女の田につつすらと涙が溜まる。

「紫藤くん。アンナが、アンナがあ……」

声を詰まらせた由香に、海が慌てたように走り寄った。

「君島さん」

肩に手をかけようとした海よりも、由香の動きの方が早かつた。由香は縋るように海に抱きつき、声を上げて泣きはじめた。顔を歪めて由香を見た海は、囁くように声をかける。

「うん。辛いよな。ええよ。いっぱい泣いたらええかい？」

海は、泣きじゃくる由香の頭に手を置いた。

「高橋君ちょっと」

名を呼ばれてそちらを見ると、風見が片手でドアを開けて、空を手招きしている。部屋の外には静の姿も見えた。

空は一度海たちに田をやつた後、風見に続いて部屋を出た。

ドアを閉めた風見が、暗い表情で空と静を交互に見る。

「ゴメン。しばらく、一人にしてやってくれないかな」

風見は閉じられたドアに視線を向けた。

「由香、相當まいってるから」

悲しげな聲音に、空も胸が締め付けられる。杏奈とは、昨日会つたばかりだったのだ。またいつでも会えるだろつと、別れ際にそう言つたのに。

もう、杏奈に会うことはできない。

あの無邪気な笑顔を見ることは、もうできないのだ。

そう思うと辛かつた。

最後に見た彼女の、どこか寂しそうな表情が思い出される。たつた一度会っただけの空でさえ、悲しいのだ。中学時代ずっと一緒にいた友達なら、なおさら辛いだろう。

「君島さんって、やっぱ海のこと好きなんだ」

気を紛らわせるために言つた空に、風見は少し笑顔を見せた。

「そう。紫藤には内緒ね」

そう言つてたてた人差し指を唇にあてる。

そんな風見に、空も微笑み返す。そして、ふと静のことが気になつた。彼女もまた、亡くなつた石井睦子や川崎杏奈に近しい友人だつた。そう気付いたのだ。

今日も、静は以前と変わらず大人しい格好をしていた。白いブラウスの上に水色の七分袖のカーディガンを羽織つている。その肩にはお下げにした黒髪がかかつっていた。

「あの、伊藤さんは、大丈夫？」

尋ねた空に、悲しげな笑みを見せて、静は口を開いた。

「まだ、実感わかなくて」

「だよな。俺もまだ信じられない。昨日会つたばつがだつたし」

そう言つと、風見と静は驚いた顔をした。

「どうして？」

「アンナ。高橋君に何か言つてた？」

二人に詰め寄られて、空は思わず一人を制すように、胸の前に手を上げる。

「いや、あの。俺はオマケつていうか。光が呼ばれて一緒に。光に何か言いたかつたみたいなんだけど、結局たいした話はしなかつた」空は、あえて言うこともないだろうと、杏奈が明かした、睦子の話は伏せておく。

「そうなの。春名君に」

「「ウツて誰？」

そういえば、風見は光と面識がなかつた。遅まきながら、そのこ

とに気が付く。

空は風見に、光は友人で、メールの件に関わっていることを伝えた。

「なあ。伊藤さんって、光と付き合つてるってホント?」

光に聞いてもろくな答えが返つてこなかつたので、この際だと聞いてみることにする。静は一度風見に目を向けた後、少し間を開けて頷いた。

「ええ。私が逆ナンしたの」

小さく呟かれた言葉に、空は目を剥いた。

「マジで!」

「ちょ、高橋君。声大きいから」

慌てたように、風見が空を窘めた。空は風見にゴメンと謝る。その一方で、何故隠しているのだと、光を恨めしく思う。光の顔を思い浮かべた時、何かがふと頭をかすめた。

封筒。

そうだ。パンダの封筒。

「伊藤さんに、川崎さんが手紙を渡そうとしてた!」  
声を上げた空を、驚いた顔で見つめる一人。空は、静に目線を合わせると、もう一度同じことを口にした。

「川崎さんが、伊藤さんに手紙を残してる」

もしかしたら、そこに、杏奈の死の真相が書いてあるかもしねない。

空はそう思った。

川崎杏奈が死んだ。

光がその事実を知ったのは、伊藤静からのメールだった。自室で携帯電話の一コースを検索すると、そのコースは確かに存在していた。

嘘であれば良いという願いは、叶わなかつた。

その記事には、杏奈の死が事故ではなく、他殺の線が濃厚であると書かれていた。

どうして、人はこんなに呆氣なく死んでしまうのだろうか。

そう思ふと溜息ができる。  
何のために、人は生きて行くのだろう。こんなに簡単に、命は奪われていくのに。

嫌な思いが、光を支配しそうになる。自殺しようと考えていた頃の気分が、また蘇つてしまいそうだ。

光は開いていた携帯電話を閉じて、目を瞑つた。

昨日、杏奈と話していた時。彼女の様子はどうだったのか。何か見落としていることがあるのではないか。昨日の様子を頭の中で反芻する。杏奈は何かを隠していたように思う。光の質問にも答えなかつた。

それが、杏奈の死の理由と関係があるだろうか。

そもそも、何故。杏奈は一度しか面識の無い光を呼びだしたのだろつ。

何故、睦子の話を由香や、静ではなく、光に話したのだろうか。杏奈が何を考えていたのか、よく分らない。

それとも、由香や静には話せなかつたのか。もしくは、一人ともその事実を知つているから、話す必要がなかつたのか。

否、それは無いだろう。

彼女は、自分で仕舞つておくには重すぎたからと言つていたではないか。

光は座つていたベッドから立ち上がると、机に歩み寄つてその上に置かれていた物を手にした。

それは昨日、杏奈から託されたものだ。静にあてた手紙。

別れ際、杏奈は『最後』という言葉を使つた。『最後に会えてよかつた』と。

杏奈は自分が死ぬと予想していたのかもしれない。

あの言葉に違和感を覚えていたのに、もつとちゃんと話を聞いていれば、今のような事態は避けることができたかもしない。

後悔が、光の胸に湧きおこる。

とりあえず今は、この手紙を静に渡さなければならぬ。

とりあえず今は、この手紙を静に渡さなければならぬ。

光は静と連絡を取るべく、携帯電話に手を伸ばした。

光からの電話を受けた静は、風見家にいた全員と、光と待ち合わせした場所へ向かった。場所は近くの公園だ。夕焼けに染まつた街の中を、無言で進んだ。日中の暑さは随分と弱まり、少し涼しい風を運んでくる。

「光！」

待ち合わせ場所の公園に着いて、いち早く光の姿を見つけた空が声を上げた。光は遊具場の端に設けてあるベンチに腰かけていた。大人數で来たことに驚いた様子は見せず、ゆっくりと立ち上がる。そんな彼の元へ全員で駆け寄ると、光は静に封筒を差し出した。空は知っている。それが、杏奈から託された封筒だということを。

「これ、川崎さんから預かつた」

静は、それを受け取ると、ゆっくりと封を切った。

中には一枚の便箋が入っていた。封筒とお揃いのパンダが描かれた便箋だ。皆が見守る中、便箋に目を落とした静の表情が歪んで、どこか驚いたように光に視線を移した。

「春名君。どういうこと？　これ」

そう言って、静は便箋を見るように光につきつけた。

空もその便箋に書かれた内容が見える位置まで動いて、そこに書かれていた文字を目にし、驚いて光を見る。

光は眉間にしわを寄せ、少し困惑したような表情を見せる。

「春名君は全て知ってるって。おい、光。これってどういうことや  
便箋に書かれた内容を声に出して、海が光に詰め寄った。

海の言つた通り、便箋には『春名君は全部知つてゐる』それだけしか書かれていなかつた。

「そうよ、答えて。春名君は何を知つてゐるの」

静が声を上げた。便箋を握る手に力がこもり、紙が音を立てる。注目を集めた光は、ゆっくりと息を吐き出すと、いつもの無表情へ戻つた。

「知らない。僕は何も知らない」

「嘘つくなや！ お前はいつもそうや。何で肝心なことを隠すねん！」

海は光の腕を掴んで、怒鳴つた。光は冷たい目で海を見る。その視線に、射すくめられたように、海の腕の力が弱まつた。それを見逃さず、光は海の手を振り払つて、告げた。

「僕は何も知らない。それが事実だよ」

光と海の間で、冷たい視線が交錯する。

「もう、いい加減にしてくれよ」

二人の間に割つて入つたのは空だつた。

「今こんなところでいがみ合つたって、何にもなんないだろ」

空の言葉に、光と海は互いの視線を逸らした。空はそんな二人の様子に、唇を噛む。

「ごめんなさい、私のせいなの。私のせい、ムッコもアンナも、私のせいで死んだの」

急に声が上がり、空たちはその声の主に目をやつた。

風見の横で、顔を覆つよつにして由香が泣きだす。

「由香、何言つてるのよ」

「そうよ、ユカ。ユカは別に悪くないわ」

静が、そう言つて由香の肩に手をおくる。由香は顔を上げて、静の腕を掴んだ。

「痛つ」

「シズカは何も知らないからそんなことが言えるのよ！ 本当のことを知つたら、シズカもきっと、私を軽蔑する

鬼気迫るような由香の迫力に、静も周りの皆も圧倒されていた。

そんな中、一人動いたのは光だった。由香に歩み寄り、静の腕を掴んでいた手をはずさせる。次いで、静の腕を取ると、あろ「ことか、

彼女のカーディガンの袖をまくりあげた。

現れた腕を見て、光は静に声をかけた。

「この怪我。どうしたんだ？」

彼女の腕には白い包帯が巻かれていたのだ。由香が静の腕を掴んだ時に痛いと声を上げたのは、由香が怪我の部分を掴んだためだつたらしい。

静は、強張った顔を光に向ける。光が静の腕から手を放すと、彼女は捲くられたカーディガンをもとへ戻した。

「……本当は言いたくなかったんだけど」

静は自身の身体を抱くようにして、身をすくませた。

「昨日の夜、変な男に刃物で切りつけられて」「えっ」

驚きの声を上げた空に、静が目を向けた。

「でも、見てもらつたら分かる通り、大事には至らなかつたの。近くを人が通りかかつて、犯人は逃げて行つたから」

「それ、警察には言うたんか？」

海の言葉に、静は首を縦に振つた。

「一応。でも、捕まるかどうか」

「どうして黙つてたのよ」

風見の言葉に、静はゆっくりと由香に目を移した。

「だつて、杏奈がこんなことになつて、ただでさえ動搖してゐるのに。これ以上由香を怖がらせたくないで」

「シズカ……」

由香はゆっくりと膝を折つて、地面に座り込んでしまつた。風見がその横に慌ててしゃがみこむのとほぼ同時に、由香の声が辺りに響いた。

「私たち、殺されるのよ。きっと、殺される。ムツコも、アンナも

死んで。後残つてるのは、私と静だけだもの」  
夕暮れの公園に、遊具や木々の長い影ができる。空たちの影  
もまた長い。その影が闇と同化するのは、もう、わずかな時間を残  
すのみ。

## 第一十五章 謎の男

女性が倒れているとの一報が入ったのは、作日の朝、七時過ぎだった。

栖川という名の川に身体を半ば沈めた状態で発見されたこの女性は、まだ高校生だった。

駆け付けた捜査員の数名が、彼女の顔と名前を知っていた。

川崎杏奈。

先日亡くなつた、石井睦子の友人だった。

聞き込みから戻つてきた私市は、額に浮いた汗を拭くこともせず、荒々しくデスクの椅子に腰かけた。

その横で、新人の河合が荒い声を上げる。

「あの時アイツを帰さなきやこんなことにはならなかつたのに」  
河合の言葉を耳に止めたのか、紙コップのコーヒーを飲んでいた虹さんが顔を上げた。

「何があ河合。おまえ、あの野郎が犯人だとでも思つてんのか」

虹さんの言うあの野郎とは、数日前、任意同行した植田のことだろう。私市はデスクに肘をついて、その手に頬を乗せると、河合を見上げた。憤慨した表情が目に映る。

「そうすつよ。あいつが犯人に決まつてます。石井睦子に気持ち悪いほどの執着を持つていた植田です。彼女に、植田と別れるように勧めたのは川崎杏奈だつたらしいですし。それを知つた植田が逆恨みして……」

興奮した河合の顔は赤くなつてゐる。私市はそんな河合に、声をかけた。

「じゃあ河合は、今回のヤマは連續殺人だつていうのか」

「そうに決まりますよ」

荒々しく頷く河合に、冷静な声を投げかけたのは虹さんだった。

「おじおい。石井睦子に関しちゃ、まだ殺人と決まった訳じゃねえだろ？」「

「じゃあなんで、川崎杏奈は殺されたんです」

むきになつて言い募る河合の肩に、私市は立ちあがつて手を置いた。

「間違えるな河合。それを調べるのが俺たちの仕事だ。自分の思いこみで、周りを見失うな」

河合の顔を覗きこんで言つと、河合の目から興奮した色が薄らいでいつた。

「すみません」

悔しげに、小さく呟く彼の肩から手を放して、また自分の席に腰を下ろした。

私市とて、年若い少女の命が奪われたことに、腹も経てば、悲しみも湧く。もしも、自分たちが犯人の手に踊らされているのだとしたら。そう思うと、いてもたってもいられなくなる気持ちも分かる。だが、冷静に判断しなければならないのだ。

捜査はまだ、始まつたばかりのだから。

私市は嘆息して、デスクの上に置いてあつた写真に手を伸ばした。それには、川崎杏奈の遺体が写っている。全体を撮つたものと、局部的に撮られたものが数枚ある。手の傷を写した写真に目を落として、ふと違和感を覚えた。

傷にたいしてではない。この傷は、おそらく川原の石か、近くに生えている草の葉か何かでついた傷だろう。

私市が違和感を覚えたのは爪だった。  
妙に短い。綺麗にマニコキアの塗られた爪だが、何といつかおかしいのだ。

「なあ、河合くん

「なんつすかー、私市さん。私市さんにくんとかつけられると妙に嫌なんすけど」

先ほどいの興奮はだいへやひ。河合は沈んだ声で答えた。

「これ、どう思う?」

「どうって、傷つすよね」

私市は、写真を覗きこんでいる河合の額を、人差し指ではじいた。いわゆる「ペン」というやつである。

額を隠すと、彼は涙田になつて抗議の声を上げた。

「痛つ! 痛いつすよ。何するんすか」

「何じやないよ。違うだろ。爪だよ爪」

もう一度河合に写真をつきつけると、河合は唇を少し尖らせながらも、写真に目を向ける。

「爪……。何かこれ、模様が途中で切れてしまんか? すっげえ中途端な感じ。それに深爪つすよね」

「そうか。やつぱりそう思つつか」

私市は写真を自分の前に戻して、頷く。

白で塗られた爪の下部にはストーンで花の模様が作られている。その爪をよく見ると、上部が数ミリほどピンク色になつていて、分かるのだ。数ミリだけピンクにするのはかなり難しいだろひ。これを塗つた時には爪が長かったと仮定するほうが自然だ。

「普通は、こうじう。何て書つんだつけ」

爪を指しながら河合を見ると、河合は簡単に答えた。

「ネイルつすか?」

「そう。それをしている時は、つけたまま爪を切るのが普通なのかな」

「いやー、普通はとつてからじやないつすか? 切りにくわいじやないつすか。つーか、ネイルとかやつてる子だつたら、普通はこんなに短く切らないつすよ」

河合の意見に頷き、私市は呟いた。

「じゃあ、何で彼女の爪はこんなに短いんだろうな」

河合は半ば呆れたような調子で声を上げた。

「私市さんつて、いつも妙なところに目をむけますよね。その爪で事件の真相に迫れるんすか？」

私市は肩をすくめた。

「いや、たんに気になつただけだ」

私市の言葉に、河合は、あ、そうすかと、氣の抜けた声をだした。

だから嫌だつたのだ。

由香は、足早に人通りの少ない夜道を通つていた。

間隔をあけて設置された街灯に、小さな虫が寄り集まつて飛んでいる。羽音が耳触りな音をたてていた。

家から一步も出たくなかったのに。

母親の使いで、醤油を買いに行かされた帰りだつた。

自分は狙われてゐるのに。行きたくないと言つたのに、母親は相手にしてはくれなかつた。

由香は先ほど届いたメールの内容を思い出していた。

『ムツコも死んだ。アンナも死んだ。次はユカ。あなたかもしけない……』

由香は手にしたスーパーの袋を握り締めた。近所のスーパーがお盆休みで、少し遠くのスーパーへ足を延ばさねばならなかつたのだ。

由香はさらに足を速めた。

次に狙われているのは自分だ。

由香はそう確信していた。

そうでなければ、あんなメールは来ないはずだ。まるで、由香をあざ笑うかのようなあの文面。

由香は顔を顰めた。

民家の間の細い路地。夕飯時も過ぎたせいか、人通りがほとんど

ない。  
怖い。

何度か、後ろから誰かにつけられているような気がして振り向いた。

だが、誰もいない。

気のせいだ。気のせい。少しナーバスになつてゐるだけなのだ。

由香は自分に言い聞かせた。

その時だった。

またも、足音を聞いた気がして、由香は足をとめた。振り向くと、やはり人の姿は無い。

「気の、せいよ、ね」

声にだして自分を励まし、また前を向いて歩きだす。

だが、歩くたびに、ゆっくりとした足音が聞こえてくるのだ。

後ろを振り向くと、人の気配を感じた。背筋が一気に冷え、鳥肌が立つ。

さらに足を速めた。後の足音の間隔も早くなる。

嫌、嫌、嫌！

まだ死にたくない。

誰か助けて。

由香は必死に走った。持つていたスーパーの袋が大きく揺れて、身体にぶつかり、跳ね上がる。静かな路地に響き渡る足音。由香はスカートのポケットから携帯電話を取り出して、電話をかける。耳にあてた携帯電話から、ホール音が響く。

お願い、出て。

だが、電話はつながらない。後ろを振り返る。人影が見えた。顔立ちまでは分からぬが、きっと男性だ。

由香は電話を切ると、前を向いて走った。

暗い路地の先に明るい光が見える。

ここを抜けければ大通りに出る。そこにさえたどり着ければ、自分はもう大丈夫だ。

明るい光が由香の胸に希望を見出した。

由香は走った。懸命に。

そして、大通りに走り出た。

「危ない！」

どこからか聞こえた叫び声。

その声に驚いて立ち止った瞬間。

由香は白い光に包まれた。

食事を終えて、部屋に来ると置き忘れていた携帯電話が光を点滅させていることに気付いた。電話を手に取ると折り畳み式のそれを開いて中を確認する。

着信アリという表示に、着信履歴を見れば、一時間前に君島由香から着信があつたと知れた。

電話をかけなおしたがつながらない。  
何があつたのだろうか。

不安が海を支配した。一度、二度、電話をかけなおすがつながらない。焦りが募る。

四度目に電話をかけなおそうとした時だった。

ディスプレーに現れた『風見』の文字に、通話ボタンを押した。

「もしもし、風見？」

『紫藤、どうしよう。由香が、由香が』

焦つた声音が海の耳に届く。

「風見、どうしたんや。とにかく落ち着けって」

『由香が、車に撥ねられたつて……』

海は服の胸元を掴んで、息をのみ込んだ。

「嘘やろ、それで、君島さんは無事なんか？」

『分からぬの。由香に連絡取ろうと思つても、ケータイでないから、家に電話して。そしたら、おばあさんが出て、由香が車に轢か

れたつて教えてくれて』

海は言葉が出てこなかつた。一時間前に由香からきた電話。あの電話に出ることができれば、由香が車に轢かれる事態を避けることができたのではないか。

そんな思いが海の胸を掠めた。

『はつきりしたこと分かつたら、また教えてくれるつておばあさんが。ねえ。紫藤。由香死んだりしないよね』

風見の声に涙が滲んだように思えた。海は答えようとして口を開くが、声が出てこなかつた。不安が広がる。悪い想像が頭の中を占拠していく。

海は首を大きく横に振つて、想像を追い払おうとした。

「大丈夫や。風見。信じて待とうや。きっと君島さんは大丈夫やから」

海は自身にも言い聞かせるように、その言葉を口にしていた。

通話を終えて、海は持っていた携帯電話をベッドの上に放り投げた。

片手で額を押されて、顔を歪める。

『信じて待とうつて、嘘ばっかり』

海は自嘲気味に口の端を上げる。

信じて待とう、言った自分が信じられないでいる。海は知つていた。

信じていたつて、運命は簡単に海を裏切る。

人は簡単に、海の前からいなくなるのだから。

## 第一十六章 邂逅

朝の病院は、診察待ちの患者が多いものだが、休診日とあって人影はなかつた。時折医師と思われる白衣を着た人物や、看護師が行き来する姿が見られるのみだ。

ナースステーションで病室の番号を聞き、海は風見と連れだつて二 五号室へ向かつた。

海の手には見舞の花束がある。

風見が、二 五号室のドアを見つけ、ノックしようとしだときだつた。

ドアが内側に開く。

驚いて、風見が道を譲るよつてドアの前から身体をよけると、ドアを潜つて病室から男性が一人出ってきた。

男性の内の一人、眼鏡をかけたスース姿の男が軽く会釈して風見と海の前を通り過ぎて行く。

開いたままのドアに手をかけ、海は軽くノックをすると、返事が返つて来る前に部屋に入った。

「あ、紫藤君」

狭い部屋の中、ベッドの上で半身を起していた少女が目を見開いた。

「やつほー。由香。来ちゃつた」

ひらひらと手を振つて見せた風見は、ベッドの脇にある丸椅子に腰かけた。

他に椅子はなさうなので、その風見の横に海は立つ。

昨日、車に撥ねられた由香は、足を骨折したものの、それに比べれば大した怪我もなかつたといつ。由香とぶつかつた車が、法定速度を守つていたことが幸いしたらしい。

その連絡が入つたのは、今日の早朝で、それまで心配で眠れなかつた二人は寝不足氣味だ。

「「あんね、わざわざ。今、お母さん着替え取りに行つて、お茶も出せないんだけど」

由香の頬には大きなガーゼがテープで止めてあった。

「由香。もう、本当に生きた心地がしなかつたんだから。車に撥ねられるなんて、ボウっとしそぎよ」

由を細め、風見は少し頬を膨らませた。

「「ゴメン。でも、あの時は本当に焦つて……」

言葉の途中で、由香は唇を開いた。

海は続きを促す。

「何で、焦つてたん？」

海の声に、由香は顔を上げた。頬に手をやつたのは、大きなガーゼを張った顔が気になつたからだろうか。

「誰かに、つけられたの。それに、メールがきてて」

「メールって？」

尋ねた海に、彼女は由を伏せて答えた。

「ムツコもアンナも死んだ。次は私かもつて内容で。怖くて。さつき来た刑事さんに全部言つたんだけど、タベお使いに行かされた帰りに、男の人が後ろからつけてきて、走つて道路に飛び出しちやつたの」

由香の言葉に、何やつてんのよと言つた後、風見は嘆息した。

「さつきの、男の人たちつて刑事だつたんだ」

風見がドアの方を振り返る。

「すれ違つたの？ 刑事さんと。私、刑事さんつて怖い人だと思つてたけど、そんなこと無かつた。私のこと、守つてくれるつてどこか安堵したように、由香は言つた。海はそんな由香から視線をはずして、俯きがちに声を発する。

「「ゴメンな、君島さん。電話かけてくれたのに、出れんくて」

「え、いいよそんな。私が一方的にかけただけだし」

慌てたように声を上げた由香を遮るように、抑えた声音が部屋を通る。

「でも、俺を頼ってくれたんやろ？ それやのに……」「

言葉を詰まらせた海に、由香は呼びかける。

「紫藤君。気にしないで。紫藤君にまで嫌な思いさせでござんなさい」

顔を曇らせた由香に、海は慌てた。

「嫌な思いやなんて、そんな。俺が電話出でたら、君島さん、こんなことにならずに済んだんや無いからって、思つただけやから」

その言葉に、風見は溜息をついて海を見上げた。彼の背に平手で鋭い一発をお見舞にする。痛みに声を上げた海に、据わった田を向けた。

「何殊勝なこと言つてんの、紫藤らしくないわね。あんたがいつまでも過ぎたことをウジウジ悩んでたら、由香だつて悩まなきやならないでしょ？ が、ね、由香」

「う、うん」

風見の勢いに押されて、由香が頷く。海は困った顔で下を向いて、思ひ出したように手にしていた花束を由香に差し出した。

「『メン、忘れとつた。』これ、お見舞い」

「ありがとう」

とても嬉しそうに、受け取った花を抱き締める由香を見て、海も自然と笑顔になる。

「んー。アタシやっぱお邪魔だったかなあ」

頬を人差し指で搔きながら、声を上げた風見に、海は不思議そつな顔を見せた。

「何でやねん」

「これだよ。由香、これだよ？」

風見が海を指さして見せる。由香はうんと頷くのみだ。

海は久しぶりに、落ち着いた笑顔を見せる由香を見つめながら思つた。刑事の言つた、守つてあげるといつ言葉が、由香を安心させたのだろうかと。そして、自分は彼女を何一つ安心させてやれなかつたという事実を思い知つた。

顔に笑顔を張りつかせながら、海の気分は沈み行く一方だった。

日差しが容赦なく降り注いでいる。道にできた影は小さい。昼を少し過ぎたばかりだからだろう。

海は風見と別れた後、寄り道をした。場所は由香の家へ行く通りにある公園だ。

海はこの暑いのに元気に遊んでいる子供の姿を田の端に捉えながら、ゆっくりとした足取りで、木陰の下になつていてるベンチを選んで座った。

この公園は、海が今の名前になる前に良く遊びに来ていた公園だつた。

今から、八年前。

海はこの辺りに住んでいたのだ。

最初に、海を引き取ってくれた両親が死ぬまでは。

父親が殉職したのは、梅雨がもうすぐ開ける頃だったように記憶している。

葬式の日。

降り続ける雨のように、母親はいつまでも涙を流し続けていた。あまり家にはいない父だが、仕事へ向かう大きな背中は、海に憧れを抱かせた。

明るくて、いつも快活な笑顔を海に向けていたお父さん。

そんなお父さんが、なぜだか田を覚まなくて。海はお母さんに聞いたのだ。

『お父さんはどうして田を開けないので?』と。

『お父さんはもう起きないの。死んじやつたの。海はお母さんを置

いていかないで』

そう言いながら、強い力で抱きしめられたのを憶えている。

今から思えば、もうあの頃から母親は少しずつおかしくなつていただのだろう。

父親の死から一ヶ月がたつた頃。母親は何も手に付かないのか、いつもどこか遠くを見つめてぼうつとしていることが多かつた。そうかと思えば、突然大声で海を呼んだ。海が姿を見せるとほつとしように抱きしめる。

小さな海にも、母親の不安が伝わってきて、いつも母親の背を抱きしめ返した。

『大丈夫だよ。ボクはどこにも行かないよ』

まるで決まりごとのように、いつもその言葉を母親にかける。そうすると、お母さんが笑顔になることを知っていたからだ。

暑い、暑い日だった。

その日、海は友達に誘われて遊びに出掛けようとした。そんな海をお母さんは引きとめた。

『お母さんを一人にしないで』

心細そうな目をして、母はそう言った。

このところ、母親とずっと一緒に、少し鬱屈していた海は、外へ遊びに行くことを選んだ。

『大丈夫だよ、すぐに帰るから。ちょっと遊びに行つてくるだけ。ちゃんと帰つて来る。約束だよ』

そう言つてお母さんに手を振つて、海は家を出た。

今でもこの時のことを思い出すと、海の胸は締め付けられる。何故、あの時外へ遊びに行くことを選んだのか。

どうして、すぐに帰らなかつたのか。

母との会話は、あれが最後だった。

夕方まで遊んでしまつた海が家に帰つた時。

母は家で首を吊っていた。

母親が死んだ後。

海の家にはたくさんの大人がやつてきた。お父さんの時と同じように、お葬式をやつた。

お葬式の後。黒い服を着た大人たちは、海の家で海をのけものにして話し合っていた。自分のことを話しているのは分かつたけれど、皆険しい顔で、海のことなど目には入っていないようだつた。

自分の家なのに居場所がなくて、海は一人外へ出た。

そのまま、いつも遊んでいる公園にやつてきた。  
ベンチに座ると、地面に足がつかなくなる。ぶらぶらと足を揺らして、風に揺れる木々をただ眺めていた。暑くて仕方がなかつたけれど、家にいるよりはましだつた。

そんな時、海に話しかけてくる人がいた。

『斎藤。こんなところで何してるんだ』

そんな感じに話しかけられたと思う。目を上げると、大きな身体の男の人があった。小学校の担任の先生だつた。

『家にいたくなかったんだもん』

唇を尖らせてそんな風に答えた。先生は海の頭に手をやつて笑つた。

『頭が熱くなつてゐるぞ。ほら、あそこのベンチに移ろう。木で影になつてゐるから、ここよりは涼しいぞ』

先生に手を握られて、海は木陰の下にあるベンチに移つた。

先生に缶ジュースを貰つて、海はそれを一気に飲んだ。気付かぬうちに喉が渴いていたらしい。

『どうして、家にいたくなかったんだ?』

先生に聞かれて、海は隣に座る先生を見上げた。

『だつて、ボクは邪魔なんだもん。みんなボクはいらないんだつて。ボクはお父さんとお母さんの本当の子じやないから、気持ち悪いん

だつて『

聞いていた話を総合すれば、たぶんそういうことだ。先生が何か言おひとして、口を開いたが、結局そのまま口を閉ぢてしまつた。何も、言葉が出なかつたのかもしれない。

『お母さんも、ボクのこといらなくなつたのかな』

『斎藤……』

『ボクが、早く帰るよつていつたのに、遅く帰つてきたから。ボクのこと怒つて、ボクをおいていつたのかな』

海は地面を見つめて、地に付かない足を振つた。

『だから、待つてくれなかつたのかな。ボクも連れてつてくれた良かつたのに』

大きな手が、海の頭を撫でた。

海は地面から先生に目をしていた。先生は笑顔を見せた。笑顔なのに、悲しそうな目をしていた。

『先生は、おまえのお母さんが、おまえを連れて行かなくて良かつたと思つてるよ』

『なんで?』

『先生は、おまえが死んだら悲しいし、辛い』

黙つて先生を見つめる。蝉の鳴き声が聞こえてきた。風が木々を揺らし、蝉の鳴き声に交じつて葉擦れの音を響かせる。

『おまえだつて、お母さんが死んで悲しいだろ』

聞かれて頷いた。先生は満足そうに頷いたあと、もう一度海の頭を撫でた。

『おまえのお母さんが死んだのは、おまえのせいじゃないよ』

海は首を横に振つた。少しだけ、涙に滲んだ目を上げる。

『でも、ボクは早く帰るつてお母さんと約束したのに、約束破つちやつたんだ』

だから。お母さんは居なくなつたんだ。

だから、お母さんはボクのこと、いらなくなつたんだ。

『後悔しているなら、もう後悔しないように生きればいい』

海の目をじっと見つめて先生は言った。海はただ、真面目な表情をした先生の顔を見つめる。

『約束を破ったのを悪かったと思つていいなら、もう、約束を破らなければいい。過去を振り返つてばかりでは何も変わらない。おまえのお母さんは、きっとそれに気付かなかつたんだろうな』

海はからになつた缶を両手で強く握つた。音を立てて缶が小さくへこむ。先生の声が頭の上からふつてくる。

『だから、おまえは、お母さんの分まで、前を向いて生きなさい。天国で見ているお父さんとお母さんが笑つて過ごせるように、安心させてあげられるように。生きて行きなさい。おまえはお母さんの一の舞は踏むな』

顔を上げて、海は小さく首を傾げた。

『なんか、よく、分かんない』

難しい単語が入つていて、その時の海には全て理解はできなかつた。ただ、先生が励ましてくれていることは分かつた。先生が、海に生きていてほしいとそう思つていることは伝わつた。

海は先生を見上げてほほ笑んだ。

『ありがとう』といつ、言葉とともに。

子どもの泣き声が聞こえた氣がして、海は遊具場に目を向けた。

小さな子どもが、どうやら転んだようだ。母親らしき人物が子どもを宥めた後、手を引いて公園を出て行つた。

育ての親が死んだあと、自分を気にかけてくれる大人は先生くらいのものだつた。

何の因果だらう。八年前、この公園で自分を慰めてくれた先生の子どもが、亡くなつていた。

自殺だと言われて、先生はどう思つたのだろうか。自分と同じよう、暗い気分に苛まれているのだろうか。

「なあ、先生。先生は自分で言つたこと、憶えてる?」

ここには居ない先生に向かつて、海は呟いた。

顔を上向けると、木漏れ日が海の顔に降り注いだ。

## 第一十七章 次は

海から知らせを受けた空は、光とともに由香が入院する病院へ見舞いにやつてきた。海と同行しなかつたのは、光と海が互いに嫌がつたからだ。

病室へ入ると、今までになく由香は穏やかな表情をしていた。

「来てくれてありがとう。シズカは、一緒にじゃないんだね」

光の顔を見て由香は言つた。光は相変わらずの無表情で、軽く頷いた。

「ごめんな。こいつ無愛想で」

空は用意された椅子に腰かけて、由香に笑顔を向ける。彼女もまた笑顔になった。頬に貼られた大きなガーゼは痛々しいが、前よりも元気そうに見える。

「大変だつたな」

空が言つと、少し表情に影が落ちる。

彼女は、事故に遭つたいきさつを語つた。海たちに話したのと同じ内容だ。

「そのあとをつけってきた男つて、犯人だつたのかな。だつたら、これだけの怪我で済んでよかつたかも……あ、ゴメン」

空は言い終わる前に、自分が無神経なことを口走つていることに気づいて謝つた。由香は慌てて首を横に振り、ベッド脇に置かれた棚に目を向ける。そこには小ぶりの箱が置いてあつた。

「ううん。あ、お菓子もありがとう」

お見舞いとして持つてきたのは、可愛らしい箱に入つたクッキーだつた。空の住む商店街の中にある洋菓子店の品だ。話を逸らそうしてくれたのだろう。由香は思いついたように声をあげた。

「あの、朝は、紫藤くんも来ててくれたのよ」

どこか嬉しそうに報告してくれる由香に頷いた時。抑揚の無い声が、空の横から聞こえてきた。

「君島さんに、聞きたいことがあるんだ」「なあに？」

小さく首を傾げた彼女に、光は言った。

「本当のことを知つたら、シズカは私を軽蔑する。公園で、君はそういう言つてたけど。あれはどういう意味？」

由香の表情が凍りついたように、空には見えた。震える手で口元を覆つた彼女は、光の顔から視線を外した。何も言わない。しばらく沈黙が三人を支配した。

「君が、メールの犯人と繋がっていることをさしているのか？」「なつ」

何を言い出すんだと言おうとした。だが、その言葉を空は途中で飲みこむ。口を開いた空に、光がここは病院だと指摘したからだ。思わず口元を押さえた空の横で、彼は淡々と言葉を続けた。

「君は、犯人に石井さんたちのメールアドレスを教えたね」

由香は目を見開いた。胸元へ持つてきた手で、服を強く握る。そんなはずはない、空は思った。彼女は人一倍あのメールに怯えていた。そんな彼女が犯人と繋がっているなんて、考えられない。あれが演技だつたとでも言うのか。

由香はゆっくりと光に顔を向けた。

「アンナが言ったの？ アンナの手紙、春名君が全部知つてるって、こういうことだったの？」

光は黙したまま、由香を見つめた。そうすることことで、肯定を表しているように見える。

せわしなく視線を動かした後、彼女は意を決したように口を開いた。

「私、怖かつたの。エリからメールが来て怖かつた。エリが死んだのは私のせいだから、エリが私に復讐しに戻つてきただんと思つた」胸元を掴んでいた手を放して、由香は頬に手を当てた。

「そんなことあるわけないって、心の中で否定しても、怖くて怖くて仕方なかつた。三人のアドレスを教えてつて言われたから、教え

た。コカは友達だよねって、そう言われたら教えないわけにはいかなかつた」

由香の田から涙がこぼれた。

「だつて、こんなことになるなんて思わなかつた。ムツコたちが死んじやうつて分かつてたら、あんなことしなかつたのに」

声を上げた由香に、光はハンカチを差し出した。彼女は驚いた表情で光を見る。

「君がメールアドレスを教えたから、石井さんたちが死んだわけじゃないよ」

由香は恐る恐るとこつたように、光からハンカチを受け取つた。

「俺もそう思つ。でも、ちゃんと謝るべきだとも思うよ。俺は、空はそつぱつて立ちあがつた。

「いめんな。俺、帰るわ。光、行くぞ」

空は、そのまま背を向けて、病室を後にした。

病院を出ると、とたんに熱い空気に包まれる。流れてくる汗をぬぐつこともせらず、空は歩き続けた。

しばらく歩いたとき、後ろから光が空を呼ぶ声が聞こえた。

振りかえると、数メートル先で、光が壁に手をついて前かがみになつている姿が目に映る。空は、慌てて走り寄つた。光は荒い息を繰り返してくる。

光の足が悪いことを失念していた。

速足で歩いていた空を追いかけようとして、無理をしそぎたのかもしれない。

「おまえ、速いよ

「じめん」

上田づかいで謝ると、光が嘆息した。

「空、怒つてるだろ」

その言葉で、眉間に皺が寄つた。ぐつと拳を握る。

「怒つてるよー。当たり前だろ」

そのまま病室にいたら、空は絶対に由香を怒鳴りつけていた。彼

女はずつと友達を裏切り続けていた。そうしていることで、自分も傷ついているくせに。

だが、空が彼女に対して怒るのは違つ氣がした。彼女を怒る権利があるのは、死んだ一人や、静であつて空じやない。

だから、病室を出た。

「あの子は、自分の友達を裏切つてたんだ。ずっと。でも、可哀相だとも思うよ」

光は軽く、口の端を上げた。

「空らしいよ」

「何だそれ」

「言葉のまんまだろ。ほら、手、貸せよ  
光が空に手を向けた。空は、顔を顰める。

「え？ 嫌だよ、暑いのに。杖は？」

「持つてきてない」

「何で持つてきてないんだよ」

「煩いな」

都合が悪くなるとすぐそれだ。空は頬を膨らませながらも、光に肩を貸して歩き出す。

二人の言いあいはしばらく続いた。

光は途中でタクシーを拾つて帰宅した。

自室で、家政婦の坂内さんが持つてきてくれたオレンジジュースを飲んで一息つく。テーブルを挟んだ向かい側には空がいる。一緒にタクシーでここへ来ていた。

「なあ、光。どう思う？ 一人を殺したのは、メールを送ってきた犯人かな」

ストローでオレンジジュースをかきまわしながら言われた言葉に、光は答えた。

「正直、分からないな。でも、全ては桜田絵里の死からはじまった。そんな気がする」

空は頷いた。そもそも、桜田絵里の死がなければ、メールが送られてくることは無かつた。

「そういえば、本当に何も聞いてないの？ 川崎さんから」「川崎杏奈の静に宛てた手紙。

『春名君は全部知ってる』

あの手紙は何を意味していたのだろうか。

「聞いてない。おまえが信じる信じないは勝手だけど」「すぐそういうこと言う。信じるよ。決まってんじゃん」怒った口調の空に、光は珍しく、「ゴメンと謝った。空はそれに頷いた後、腑に落ちないことがあることに気付いた。

「ちょっと待てよ。じゃあ、何で君島さんがメールをしてきた犯人と繋がつてたつて分かつたんだ？」

あの時は、てっきり、杏奈から聞いたのだと思ったのに。

「公園で本人が言ってたじゃないか」

「え？ そんなこと言ってたっけ」

考えてみるが、思い当たらない。空は何かを考えるときの癖で、口元に拳をあてた。

「シズカは何も知らないからそんなことが言えるのよ。本当のこと知つたら、シズカもきっと、私を軽蔑する。……彼女はそう言つたんだ」

光は由香の言った言葉を正確になぞつて見せた。はつきりと記憶していながら空には、そのセリフの正確さは分からなかつたが。

「だから？」

要領を得ないという顔で、空が問う。

「君島さんは、伊藤さんに軽蔑されるようなことをしていたということになる。静もということは、複数の人間から軽蔑されるようなこと」

空は、頷いた。そこまでは分かる。だが、どうして、それが犯人

にアドレスを教えていたことにつながるのだろう。

「彼女はこうも言つた。ムツコとアンナが死んだのは自分のせいだと。それを合わせて考へると、君島さんは自分が犯人の利益になることをしたんじゃないか。少なくとも、彼女はそう思つてゐるんだろうと考えたんだ」

光は、そう言つて息をついた。

「前に話しただらう。メールを送つて来る犯人には協力者がいるんじゃないかつて。それと結びつけて、君島さんに鎌をかけてみた」

「え？ 鎌をかけてみたってことは」

空の問いかけに、光は頷いた。

「ああ、半信半疑だつたんだ。決定的な証拠なんて一つもなかつたからな」

空は驚き呆れて、しばらく言葉にならなかつた。光がそんな大胆なことをするなんて思つていなかつたからだ。

「結果的に、彼女は認めたわけだから僕の推論は正しかつたということだ」

「まあ、確かに」

同意はしたが、どうにもすつきりしない。空の表情を目にした光が、自嘲気味に呟いた。

「だからと言つて、犯人が誰かも、どうして一人が死ななければならなかつたのかも分からぬけどな」

それでも、一つの謎は解決したのだから、これは大きな一步だ。空は前向きにそう思つことにした。

「君島さんのあとをつけてたのは、やっぱり川崎さんを殺した犯人だと思つ？」

「どうかな。まあ、それを考へるのは警察の仕事だろ。警察がそのうち解決してくれるさ。ここ最近はメールでの嫌がらせも無くなつてた訳だし。もういいんじやないか？」

空は一瞬耳を疑つた。もういいんじやないか？ とは、どういう意味だ。もう、この件に関わるなということか。一人も死んで、残

りの一人も襲われているのに。まだ、犯人は残りの一人を殺そうと狙っているかも知れないということに。見捨てるといふことか？

「何で、そんなこと言うんだよ。一人のこと、心配じゃないのかよ」

「それとこれとは、話が違う」

眼鏡の奥の瞳が、冷たく見える。声さえも冷ややかに聞こえて、空の頭に血が上った。

「だから、おまえは何でそう、冷たいわけ？ 考えてやるくらいしあつていいじゃん。これだけ係わっておいて、後は警察の仕事だつつて、投げ出すのかよ」

テーブルが音を立てて揺れた。空が、言葉の後半でテーブルを叩いたのだ。光はそんな様子を眼鏡の奥から冷ややかに見ていた。

「別に、投げ出してるわけじゃない。事実を言つてるんだ。これ以上僕たちにはどうしようもないだろ」

それが、正論なのかもしれない。光の言いたいことも分かる。だが、空にはどうしても納得できないのだ。

メールを送つてきた犯人も結局のところ分かつていい。睦子と杏奈の死の真相も。何一つ分かつてはいらないのに。悔しいという感情が光にはないのか。何一つ解決できていないのでこの現状で、どうしてよしと言えるのか。

空には分からぬ。

「どうしようもないって、簡単に言うな。どうにかしようつてどうして思わないんだ？ 警察がそのうち解決してくれるつて？ 解決するのをただじつと指をくわえて待つてろつてのかよ。川崎さんは、光に、何かを伝えたくてあの手紙残したんじゃねーのか？ 何があるからおまえに会いに来たんじゃねーのかよ。おまえが言つてるのは、それ全部無視するつてことだろ」

睨みつけてくる空を、平然と見返して、光は嘆息する。

「結果的にそうなつても仕方がない。僕は自分が間違つてるとは思わない」

空の頭に血が上った。自覚した瞬間、怒鳴つていた。

「どうして、分かんねーの。おまえは」

「分かつてないのは空の方だろ。正義感だけで、何もかも解決できるなら警察なんていらない。おまえらは他人に同情しすぎなんだよなぜ、こんなに分かり合えないのだろう。怒りを通り越して、悲しくなつてくる。

「もういい。俺、帰るわ」

そう言つて、空は立ちあがると光に背を向けた。ドアノブに手をかけて、部屋を出ようとした時。その背に声がかかった。

「海とおまえは良く似てるよ」

抑揚のないその声に、空は振り返らずに答えた。

「おまえは全然似て無いな。兄弟だつてのが不思議なくらいだよ」

そう言い捨てて、空は部屋を出ると思い切り強くドアを閉めた。

## 第一十八章 別れ

あーあ。やつちまつた。

空は自分の部屋に入り、扇風機をつけて畳の上に寝転がった。先ほどの怒りがまだ残っているせいか、少々荒っぽい動作である。外を歩いて火照った身体には、肌に当たる畳の温度が心地よい。

扇風機の風が涼を運び、汗をかいだ身体から熱を少しづつ奪つていく。そのせいというわけではないだろうが、沸騰していた頭もだんだんと冷めていった。冷めてしまつと、胸に後悔が湧きあがつて来る。

光と喧嘩してしまつた。

ただでさえ、光と海の仲がぎくしゃくしているのに、自分で喧嘩してしまつては誰が仲裁するのか。

空は溜息をついてしまつた後で、口を手で押された。しまつた。これでまた一つ幸せが逃げてしまつた。

「やっぱ怒鳴つたのはまずかったかなー。でも、あれは光も悪いし。謝るのもしゃくだよな」

独白した空は、腹筋を使って半身を起こす。背中に扇風機の風が当たつた。

どうすればいいか、どうしようか。そんな言葉が頭の中を占拠する。

じばらくぼうっと座り込んでいた耳に、玄関のチャイムの音が入ってきた。

面倒くさを顔に表した空だったが、立ちあがると扇風機を止めて、商店街の裏手に当たる玄関まで下りて行つた。

誰かを確かめもせずドアを開けた空の前に姿を現したのは、海だつた。

「空、何でそんな怖い顔してるん?」

尋ねられて、空は思わず顔に手をやつた。

「え？ 怖い顔してん？ 僕

「うん。めっちゃ」

簡潔に頷く海に、空は罰の悪い表情を作った。

「さつき光と喧嘩しちゃってさ」

海が少し田を見開いた。

「いつもしとるやん」

「いつものとちょっと違つんだよ」

少しむきになつた空に、海が微笑した。

「ああそつか。いつもはじやれとるだけやもんな

空は、ふんっとさっぽを向く。

「なあ、空」

海の呼びかけに、顔を向けた。そして、あつと思ひ。いつまでも海を玄関先に立たせておくのもどうかと思つたのだ。

「悪い、海。とりあえず上がれば

空の誘いに、海は首を横に振つた。

「いや、あの、ちょっと付き合つてもらいたい所があんねんけど

「ど」「ど」

短い間に、海はどうなく暗い表情で空に田を向けた。

「先生んとこ」

「先生？」

「あ、えっと。あれや。桜田絵里の父親」

その言葉で、先生という名詞に覚えた疑問が得心に変わつた。桜田絵里の父親が海の小学校時代の担任だつたと聞いたことを思い出したのだ。

「はつきりさせたいねん。先生がメールを送つた犯人やつたんか。

犯人やつたら、ちゃんと君島さんらに謝つてほしいねん

空はしばらく海の顔を見つめた。海の顔が余りにも辛そうに見えたからだ。学校では笑顔ばかりが目に付いていたが、最近、海は暗い表情をしていることが多い。こんなことが立て続けに起これば、それは当たり前のことなのかもしない。だが、それだけではない

ような気が、空はしている。

「分かつた。行こうか」

思いを振り切るようすに声を出して、空はたたきに降りて靴を履いた。

伊藤静から光の元へ連絡が来たのは、空が怒つて部屋を出て行ったから三十分が過ぎた頃だつた。

かかってきた電話に出た光の耳に、すでに聞きなれてしまつた少女の声が入つてきた。

『春名くん。私、どうしていいか分からなくて』

どこか怯えたような聲音。嫌な予感を覚えて、光は声を絞り出した。

「何かあつた?」

『電話が来たの。相手は、ムツコとアンナを殺した犯人だつて名乗つてる』

光は息を飲んだ。それに気付いたのがどうか、静は先を続けた。

『事件の真相が知りたければ、警察には告げずに会いに来いって……男の人の声だつた』

思考回路が停止したかのように、光は言葉が出てこなかつた。犯人の言うとおりにするのは危険すぎる。

「警察に、いつた方がいい」

光が声を押し出すと、少しの沈黙の後、静の言葉が耳に届く。

『やっぱり、駄目よ。私、会いに行こうと思う。警察に言つたら、もう犯人は私と接触してくれないかもしれない。このままうやむやになるなんて嫌。いつ殺されるかって怯えてる由香のためにも、私自身のためにも。このままじゃいけない気がするの』

「危険すぎる」

仮に電話をかけてきた犯人が本当に、一人を殺していたのだとし

たら。畠に飛び込んだ静は高い確率で命を落とすだろう。そんなこと、させられるはずもない。

だが、静はどんなに光が説得しても自分の考えを曲げなかつた。どうして、光の周りはこんなに、感情だけで動く人間が多いのだろう。静はもつと、賢い人間だと思っていたのに。舌打ちしたい気分だ。

「なら、僕も行くよ」

説得するのに疲れた光は、とうとう折れた。電話の向こうで、静はためらうような気配をみせる。

『でも、危険よ』

「君ほどじゃない」

淡々とした口調の光に、苦笑した響きの声が聞こえてくる。

『ありがとう。春名くんは優しいね』

光は一瞬、言葉に詰まつた。何の冗談だと思つ。優しくないと言われ続けている人間に向かつて優しいなどと。優しいという言葉を貰つていよいのは、空や海のような人間であつて自分ではない。

「場所は？」

気持ちを切り替えるつもりで、努めて事務的に尋ねた光の耳に、犯人の待ち合わせ場所の住所が届いた。

かつて、工業地帯と呼ばれていたこの場所は、たくさんの工場が立ち並んでいた。だが、この数年の間に、不況のあおりを受けていくつもの工場が閉鎖を余儀なくされていた。つぶされた工場跡地にはいくつもの住居が立ち並び、新興のベッドタウンへとその姿を変え始めている。

その中にあつても、買い手がつかなかつたのか、閉鎖された工場がそのまま残る土地もあつた。

その一つに、光は足を運んだ。光の家から電車で一駅。駅から歩

いて十五分のこの場所は、閉鎖されて随分と立つのか、荒れが目立つた。

立ち入り禁止と書かれた板がはりつけられた門を横切り、フェンスで囲まれた敷地の中に建つ工場を目にする。黒っぽい壁の大きな建物だ。少し歩くと、フェンスに大きな破れ目があった。そこから、工場の敷地内に入る。コンクリートの道が割れて、そこから雑草が生えていた。

かつて、工場だった建物は、壁の塗装が所々剥げ、はめ込まれた高い位置にある窓ガラスは割れている。

「とりあえず、中を見てくるから。伊藤さんはこの辺りに隠れて待つてくれ」

光は門の近くの茂みに目をやり、自身の後に隠れるようにしてついてきていた少女に話しかけた。

振りかえった光の目に、怯えたような顔の静が映る。

「でも……」

言い淀む静に、光は少しだけ笑みを見せた。

「大丈夫だよ。中を覗くだけだから。でも、僕が十分以上戻らなかつたら、君は帰つて警察へ連絡してくれ」

いいね、と念を押せば、静は頷いた。

光は、できるだけ足音を立てないように、建物に近づいていく。近づくにつれて、工場へと続く扉が少し開いていることに気が付いた。心臓の鼓動が、弥が上にも早まる。

扉まで来ると、光はそつと中を覗こうとした。

刹那。

背後に人の気配を感じた。

光は驚きとともに、振り返る。

だが、振りかえった先にあるものを、光は目にすることができるなかつた。

頭に強い衝撃を感じた瞬間。

目の前が闇に包まれ、その闇に意識をも飲みこまれてしまう。

倒れた光の横で誰かが笑つた。

光の耳に、その笑い声が届くことは、もうない。

## 第二十九章 焦燥

チャイムを鳴らしたが、家人はびうやうら留守のようだった。

空と海は困ったように顔を見合させる。

以前来たことのある、岸谷の部屋の前に一人は立っていた。このアパートへ来るまでに、前回同様、三十分ほど迷ったのはご愛敬だ。

「どうする。出直すか？」

空は小首を傾げて海に尋ねる。海は逡巡した。このままここで待つても、いつ帰つて来るか分からない。自分一人ならまだしも、空もいる。かといって、日を改めるという選択肢は、海の中になかつた。

確かめなければならないのだ。

海は、先生がメールを送つた犯人だと思っている。メールの内容。それを知りえた人物。その中で、一番犯人に近いのは誰かと考えれば、絵里の父親である先生しか思い浮かばない。

勘違いならそれでいいのだ。むしろその方が望ましい。海が一番辛い時に、一緒にいてくれた大人は先生だけだつた。そんな先生が、彼女たちに嫌がらせをしていたとは思いたくない。

信じたくない。

このまま、もやもやとした気分を抱え続けるならいつそ、先生に嫌われても、本人にぶつからなければならない。海はそう考えたのだ。

「海つてば」

しびれを切らした空が、海の腕を掴んだ。我に返つた海が、口を開こうとしたとき。

携帯電話の着信音が、海の言葉を遮つた。反射的に尻ポケットに手をやつて、海は携帯電話の通話ボタンを押すと、それを耳にあてた。

「もしもし」

『紫藤くん。どうしよう、春名くんが帰つてこない』

切迫した少女の声。風見の声ではない。由香は病院だ。  
海は考えて、浮かんだ名を口にする。

「伊藤さん、やな？」

確認したが、その声は電話の相手には届かなかつたようだ。相変わらず焦つた調子の声が耳に届く。

『もう、十五分も経つたのに。どうぞ。春名くん、帰つてこない。殺されてるかもしない』

殺されてるかもしない。

その言葉に、背筋が凍つた。

何故、急にそんな話になるのか分からなかつた。

言葉を失つた海の横で、空が訝しむように海を見つめている。電話の声が漏れ聞こえているのだろう。

業を煮やしたよつに、空は海の手から携帯電話をひつたくつた。  
「伊藤さんだよな。どうした？ 何があつた？」

空は、所々頷きながら静との通話を終えた。

茫然自失とした海の肩を掴んで、携帯電話を彼の前にしきつけた。  
「海、ほつとしてんな！ 伊藤さんに場所聞いたから、早く行こ

う

そう言つて、無理やり海に携帯電話を持たせると、アパートの階段を駆け足で下り始め、階段の半ばで足をとめた。

海の名を呼ぶ。

海は、先ほどと変わらぬ位置で立ち尽くしていた。反応がない。

「海、行くぞ。早く！」

急き立てる空に、海は虚ろな目を向けた。

「怖い……」

呟くようなその声が、空の耳に届く。

「何？」

空は、意味がつかめず問い合わせた。

「怖い。どないしよう。俺、また失くすんか……」

抑揚の無い声音。表情の無い顔。

空は、下りた階段をまた上り、海のもとへ走り寄る。

「何で、みんな、俺の前からいなくなるんや」

そこまで聞いて、空は動いた。

乾いた音が鳴った。空が、少し強めに海の頬を両手で挟んだのだ。じんと掌に痛みが伝わってくる。海の頬も痛いだろつ。

「海！　いいかげんにしろよ。居なくなるとか訳わかんねー」と言つてんなつ！　光が居なくなるわけねーだろ。バカ」

焦点の合わないようだった海の瞳に、空が映る。

「ぐだぐだ言つてねーでさつさと動け。時間が勿体ねー。分かったか」

強い口調で確認されて、海は思わず首を縦に振った。

「わ、分かった」

その答えに満足したのか、空は頷いて海を急かした。

「よし、じゃあ行くぞ」

海に背を向けて駆けだす空。海はその背を追いかけた。

もう一度、任意同行を求めるつもりで、植田和樹の住むアパートを訪ねたが、空振りに終わった。

私は新人刑事の河合とともに、植田の実家まで足を伸ばした。だが、そこにも植田の姿はなかった。

こちらが来ることを感じられたか。そう考えたが、自身でそれを否定した。

警察内部でも、まだ彼は参考人の域をでてはいない。重要な参考人ですらないのだ。

そんな彼が、姿をくらます理由はないはずだ。犯人でもない限り。そう考えて、私は苦笑した。どうやら、河合の植田に対する疑いが、自分にも移つたらしい。

「私市さーん。何、笑つてんですか」

訝しげな表情の河合に、私市は笑みを深くした。

「聞きたいか？」

どこか含みのある声に、河合は顔をひきつらせた。

「や、いいっす。何か怖いんで」

失礼な話だが、そうなるようにみせたのは私市だ。河合の反応に満足して、一度署に戻ろうと提案しようとしたときだつた。

胸ポケットが震えて、思わず手で押さえた。携帯電話を入れていたことを失念していたのだ。胸ポケットから携帯電話を取り出すと、表示を目にしてから通話ボタンを押した。

親しみのある声で電話に出た私市の声が強張ったのは、ほんの数分後のことだった。

空と海は、何度も静と連絡をとつゝ、目的の廃工場にたどりついた。

静に言われた通りに破れたフェンスを潜つて敷地内に入る。すると、小さな声で空たちを呼ぶ声が聞こえた。

門の付近に佇む静の姿が目に入る。つい先ほどまで、その近くの茂みに隠れていたと静は言った。

「光は、まだ？」

空が尋ねると、静は頷いた。空たちの不安がさらに募る。静が電話をよこした時点で、光が廃工場の中に入つて十五分。空たちが駆け付けたのはそれから二十分は経過している。これはもう、何かがあつたとしか考えられない。

空の横にいた海が走り出した。工場の扉へ向かつていると氣付いた空は、静にここにいるように言い残し、海を追う。

工場の内部は、雑多な物でいっぱいだつた。いくつもの段ボールが積み重なり、迷路の様相を呈している。段ボールだけではない。

汚い布のかけられた、何かの機械らしきものもある。

「光！」

海が大声を上げた。追いついた空は、犯人がいたらどうするんだ  
と思う。

だが、もうやけくそだ。空も自慢の大声で光の名を呼んだ。  
しばらく待つが、返事がない。

返事がないどころか、人のいる気配すら感じない。一体、光はどこへ行ってしまったのか。

言い知れぬ不安が空を襲った。積まれた段ボールをよけながら、空と海は手分けして工場内を探す。

空は、突き当たりに行きつき、何となく左右を見回した。右横を見ると、壁の前に、何も積まれていない台車が置いてあった。そして、台車の手前に扉があると気がつく。

海を大声で呼んで、扉を示す。

「開けるぞ」

十分に警戒しながらも、空は扉を開いた。

狭い部屋だった。デスクが置いてある。事務所として使っていたスペースかもしれない。埃のたまつた部屋へ足を踏み入れた。足元で埃がたつ。ここにも人の気配はない。

「おらんな」

「ああ、もうどこ行つちゃつたんだよ。光」

不安で不安で仕方がなくて、空の口から泣きことが漏れる。

そもそもこのまま、一度と会えなかつたら。つい数時間前、一緒にいたのに。喧嘩別れしているのに。このまま会えなければ、仲直りすることもできない。

空は、どうしても浮かんでくる嫌な想像を振り払おうと頭を振つた。顔を俯けると、汚れたコンクリートが目に入る。その時、視界の隅に何かが映つた。机の影に何かが落ちている。気になつて空は動いた。机の影になつていった部分が見える位置まで来て、空は動きを止めた。

息を飲む。目に映つた光景に、身体が震えた。

「海……」

掠れるように、名を呼んだ。

今まさに、部屋を出ようとしていた海が、空の様子に訝しむ視線を送る。

空のもとまで来た海が声を上げた。

「光！」

空が机の影に落ちていたと思った物は、光の指だった。倒れた光の指が、机の影からほんの少し覗いていたのだ。

海は、立ちつくしている空の横をすり抜け、光の横に膝をついて、彼の半身を抱き起こした。

「光、しつかりしろや。光！」

海は必死の形相で、光の血色の無い顔を軽く叩く。

光はピクリとも動かない。いつもかけている眼鏡が見当たらなかつた。意識の無い素顔の光は、まるで人形めて見えた。

「嫌や、光。頼むから、目え開けてくれや」

海の声が震えた。抱いている腕を動かし、光を搖さぶる。

「まだ、謝つてないねん。おまえにまだ、謝つてないんや。なあ、

光……」

呼びかけるが、光の反応はない。

空は、動けないまま、必死に呼びかける海と、動かない光をただじっと見つめていることしかできなかつた。

「俺が悪かつた。なあ、お願いやから、目え開けてくれや……」

海は動かない光を抱きしめた。光の顔が海の胸元へ引き寄せられる。

「死んだらあかん。死んだらあかんねん。死んだらあかん……」

空は見ていられなくて、視線を下ろした。その目に、投げ出された光の手が見える。

指が、微かに動いた気がした。

「光？」

空が呟く。

空は、膝をコンクリートの床につけ、光の手を掴んだ。もう一度、光の名を呼ぶ。

「光！」

空の手の中で、確かに光の指が動いた。

「海、光が……」

空の上げた声に、海はゆっくりと胸に引き寄せた光を離す。その視線の先で、光の眉が動いた。

小さなうめき声とともに、瞼が震える。

「光」

空と海の声が重なった。長い睫が持ち上がり、光の少し茶色みがかつた瞳があらわになる。

数度瞬きを繰り返し、光は空と海の顔を視認したようだった。

「何で、二人がここに」

言いながら、光は自ら起き上がるのを止めた。それを制して、海が光をまた胸元へ抱き寄せる。

「良かった。光、もう、死んでもうたかと思つた」

心底安堵したように、海は声を上げる。空も同様の気分だ。

「人を勝手に殺すな」

これだけ心配をかけたにも関わらず、海の胸元で光がいつもの調子で毒づく。

「それと、海。痛い」

言われて、海は慌てたように力を緩めた。光はそんな海の肩を握つて、半身を起こす。自力で座った光は、もう一度空と海を眺めて、先ほどと同じ質問を繰り返した。

「何でここにいるんだ」

「それはこっちのセリフだつづーの。おまえ、警察に任せとけとか言つといで、何でこんなとこきて、倒れてるんだよ」  
安心したら、怒りに火が付いてしまった空は、声を荒げた。光は、

少し目を眇めて空を見る。

「伊藤さんがどうしてもって聞かなかつたからな。仕方ないだろ。でもまさか、いきなり殴られるとは思わなかつた。それに、殴られたのは工場の外だつたんだけど」

「え？ そうなの？ ジャあ、犯人はわざわざ工場の中に光を運んだつてこと」

空が驚きの声を上げると、光が頷く。

「……ああ。たぶん」

肯定して、光は自身の後頭部に手をやつた。傷に触れたのか、顔を顰める。

「おまえが、無事でよかつた」

囁くような声が海の唇から洩れた。

空と光は海に視線を送る。

「おまえを失つたんやと思つたら、ほんまに、怖くて怖くて仕方なかつた」

「海、あの……」

光が、海に声をかける。どこか弱気なのは、海と仲たがいをしていたことを思い出したからだろつか。

「ゴメンな。光。ほんまゴメン」

海は言つなり光に抱きついた。抱きつかれた光は驚いたように目を見開く。

「俺、ずっとおまえにハつ当たりしとつたんや。おまえが、俺のことどうでもええって思つてるんが分かつて、拗ねて、勝手に腹立て、おまえのこと殴つて。俺、めつちゃ最低やんな」

海は光に回した腕に力を込める。

「人の気持ちは、自分ではどうにもならへんつて分かつとつたはずやのに。ゴメンな。光。大嫌いやつて書いて『ゴメン。例えおまえが俺のこと嫌いでも、俺はずつとおまえのこと好きやから』

光の震える息が、海の肩にかかつた。

「海は間違つてる」

光の言葉に、海は抱きしめていた腕の力を緩め、光を身体から離した。光と視線が交錯する。空はただ、そんな二人を眺めた。「嫌いだつて言つたのは、海であつて僕じやない。僕は、海のこと

をどうでもいいなんて思つたことは一度もない」

きつぱりと告げられた言葉。海は驚いたように目を見張る。

「それ、ほんまか？」

光は頷く。

「おまえ、俺のこと好きか？」

ストレートな問いに、光はもう一度頷いた。

「当たり前だろ」「当たり前だろ」

海の顔に、笑顔が広がる。

光は顔を俯け、大きく息を吐き出した。

倒れていたのだ。急に気分が悪くなつたのかもしれない。空と海が身構えた時、光は顔を上げて、心底嬉しそうにほほ笑んだのだ。

「よかつた。嫌われてなくて」

空と海は呆然と、光に視線を向けた。

目と口を大きく開けたその表情に、光は訝しむ。

「あ、何だよ。もう終わり」

「光、もう一回」

海が人差し指を一本立てて、光に乞つ。

何をもう一回なのか、分からぬ。

光が首を傾げると、空と海は互いに目を合わせて笑顔を作つた。

「いよっしゃー」

二人は、片手をあげて、ハイタッチする。

「何なんだ？」

その行動の意味を掴めず問う光に、海が顔に笑みを乗せたまま口を開く。

「おまえが笑つた」

「は？」

「そ�そ。俺たち、光が心底嬉しそうに笑う顔見たいつて言つてた

んだよな

空と海はまた田を合わせて笑いあつ。光は何故だかいたたまれない気持ちに陥り、顔を伏せた。

「あ、そう言えば、伊藤さんは？」

光の言葉に、空と海の表情が引き締まる。

「やべつ。忘れてた」

「早くこじこじ出て病院行こつや。頭打つてるんやし  
海が、光に手を貸して立ち上がった直後。  
女性の悲鳴が工場内に響いた。

「伊藤さん？」

空たちは顔を見合させ、慌てて部屋を出た。高く積まれた段ボールの一部が崩れている。

静がこちらに向かつて走つてくる姿があつた。

「伊藤さん」

光が声を張り上げた。こちらに気付いた静は驚いたように一度足をとめた。だが、彼女の背後から音がしたのを機に、慌てて走り出す。彼女を追うよつに、崩れた段ボールを蹴散らして来る男性の姿が見えた。

「先生……」

海の弦きの通り、静を追つていたのは、桜田絵里の父。岸谷だつた。

## 第三十章　願い

走ってきた静の身体を受け止めた光は、震える彼女の肩に手を置いたまま、彼女を追つてきた男を見つめた。隣に立つ空に小声で問う。

「誰だ？」

「岸谷さん。桜田絵里の父親で、海の小学校の時の先生だつてさ」小声で返した空から、光は海に視線を移す。海は岸谷に向かって声を上げた。

「先生、何でこんなことに！」

岸谷が海に目を向けて、口を開けたとしたとき。静が、彼より先に声を上げた。

「あの人人が犯人よ！　由香が事故にあつたのもあの人のせいよ」数メートルの距離をあけて、立ち止った岸谷を静は指さす。

「先生、ほんまですか？　君島さんのあとをつけてたの、先生なんですか！」

海が半ば怒鳴るように問う。

岸谷は、どこか憂う表情で、海に目をやつた。

「斎藤……」

海の以前の姓を呼んで、言葉を詰まらせたように口を開ざした。「ほんまに、先生なんですか？　君島さんらに絵里さんの名を語つてメールを送つたんも、先生なんでしょう」

海が勢いの余り足を一步前へ踏み出した。

岸谷は海とは対照的に、静穏とした口調で答える。

「ああ。すべて俺のせいだ」

海は明らかに傷ついた表情で、岸谷に視線を注ぐ。

光は軽く背中を引つ張られたような気がして肩越しに後を見ると、海が光の服を掴んでいた。

光は嘆息し、中年の男に目を向ける。

「すべて俺のせいとは、どういう意味ですか？」

光の問いに、彼に目を向けた岸谷は訝しむ表情をつくった。

「君は？」

光は、岸谷に向かつて軽く頭を下げた。

「はじめまして、春名です。海の友人です」

こんな時だというのに、生真面目に挨拶をする光。兄弟だと名乗らなかつたのは、話をややこしくしそうな気がしたからだろうか。

岸谷は、そうかと呟いただけだった。

「岸谷さん。あなたが言つているのは、メールの件だけですか？ すべてとはどこまで含まれるんです？」

一度聞いただけの名をすぐに覚えたのだろう。岸谷に呼びかけた光は、じつと男の顔を見つめた。眼鏡をかけていないせいか、少し目を細めている。

「全部に決まってるわ！ 何もかも、この人のせいよ。この人さえ、メールなんて送つてこなければ、きっとみんな死なかつた」

光に肩を抱かれていたままだつた静が、突然声を荒げた。静は一歩足を踏み出した。光が彼女の肩から手を離す。

「メールが来るようになつてから、私たちはおかしくなつていつたわ。特にムツコはものすごく気に病んでた。ムツコを追い詰めたのは、あなたよ。ムツコはあなたに追い詰められたせいで死んだのよ。ユカだつてそう。あなたがエリの名を騙つてメールなんてしなければ、怯えて車道に飛び出したりしなかつた。そうでしょ」

大きく肩を揺らして、静は言い終えた。荒い息遣いが聞こえてくる。空は、岸谷に視線を注いだ。その前で、彼はゆっくりと首を縱に振つた。

「その通りだ。俺が、メールなんて送らなければこんなことにはならなかつたんだろう。俺はただ、本当のことが知りたかったんだ。娘の死がどうしても自殺だとは思えなかつたから」

「だからつて、あんなメール送る必要ないだろ」

思わず、空は声を上げていた。だつてそうだらう。絵里の死が自

殺だとは思えなかつたなら、静達を問い合わせたかつたのなら、どうして、メールなんてまわりくどいことをしたのだ。直接、会つて聞けばよかつたではないか。そんなもの、正当な理由になんてならない。

「ああ、まったくその通りだよ。俺は少し、おかしくなつていたのかもしれないな」

岸谷は、嘆息して視線を落とした。空たちの見守る中、岸谷は話を続ける。

「絵里の日記を見たんだよ。あの子の日記には、克明に自分がされた虚めのことが書かれていた」

静が軽く息を飲んだ。

「それでも、それに懸命に耐えて、いつかきっと仲直りできると信じているあの子の姿が見えた。日記は決して後ろ向きな気持ちでは書かれていなかつたんだ」

岸谷は片手で顔を覆つて大きく息を吐き出した。

「そんなあの子が何故、自殺しなきやならない？　自殺するわけがないんだ」

辛そうに歪められた男の顔から苦惱が見て取れるようで、空の胸も痛む。

「絵里が亡くなる前日の日記で、あの子は友達の一人と仲直りできただと書いていた。その子と次の日一緒に買い物をすると。なのにあの子は死んだ。あんな場所に一人で！」

男の声は叫びに近かつた。娘の死が、彼にどれほどの傷を与えたのか。空には量り知ることはできない。それでも、彼の大きな悲しみは、伝わってくる。

「なぜ、あの子は一人で死んだ？　会つはずだつた友達はどうした？　そんなことを考えているうちに、ふと思いついたんだよ。あの子は自殺じやない、誰かに殺されたんじやないかと。日記の中に頻繁に出てくる名前。ムッコ、アンナ、シズカ、そしてユカ。この中の誰かが、絵里を……」

岸谷は、片方の顔を覆っていた手を離して狂氣じみた目を静に向けた。

「殺されただなんて。Hリは自殺よ。警察だってそう判断したわ！」  
「例え絵里が自殺だとしても、君たちに、何の責もないとは言わせない。学校はいじめを認めはしなかつたが、あの子は君たちがしたことを虐めだと思っていたんだ」

「いい加減にして」

声を上げた静の肩を後から光が叩いた。光は一步足を前へ動かし、静の横に並ぶ。

「あなたは日記にあるあだ名を、絵里さんのケータイの電話帳で見つけたんですね」

岸谷は、光の言葉に頷いた。

「ああ、その通りだ。悩んだ末にメールをしてみることにした

「どうして？」

空が尋ねると、岸谷は自嘲気味に口の端を上げた。

「春になり、真新しい制服を着ている女子高生を見て、絵里も生きていれば高校生だとと思うとやり切れなかつた。あの子を虐めた子たちは、のうのうと学校へ通つていて……俺は、絵里を虐めていた彼女たちに、絵里を思い出してほしかつた。そして、絵里の死の真相を知つているなら教えてほしかつた」

だから、メールをしたと、岸谷は言つた。

「私たちは何も知らない。絵里のことを忘れたことなんてなかつたわ。だから、私たちはあなたが送つてきたメールに怯えたのよ。ムツ」「も、アンナも、ユカも私も」

静は息をついて、呼吸を整えるように息を吸つた後大きく吐き出した。

「追い詰めたのはあなた。ムツ」「もアンナもあなたが殺したのよ」

岸谷を指さし、叫んだ静。

その直後、第三者の声が廃工場に響いた。

「やつぱり、おまえが睦子を殺したのか」

積まれた段ボール箱の陰から男性が姿を現した。

急に現れた男の姿に、唖然と皆が目を向ける。空には見覚えの無い若い男。この男の名を知っているのは、本人以外、この場には一人しかいなかつた。

「植田さん？」

呼びかけると、囁くような声が静から洩れる。静の横に立つ光が、静に目を向ける。

「何？ あの人を知つてゐるのか？」

光の間に、静は頷いた。視線は前方にいる岸谷と男を捉えたままだ。

「植田さん、ムツコの元彼」

驚いて男に視線を向けた面々に、男の狂気に満ちた顔が映る。

「君は、一体」

岸谷の声が聞こえているだろつに、男は答えず、咆哮を上げた。ジーンズのポケットから光るものを取りだす。それをナイフだと認識する間もなく、男は岸谷に向かつて走つた。

「危ない！」

その声は誰のものだつたか。ほほ逃げることもかなわないまま、岸谷は男とぶつかつた。

小さなうめき声が岸谷の口から洩れる。

「先生！」

海が叫んで岸谷へ駆け寄る。空も海の声で我に返り、そちらに向かつて走つた。

肩折れた岸谷の前で、呆然と立ち尽くす植田の手には、赤く染まつたナイフが握られていた。彼は一歩一歩と後退して、一メートルほど岸谷と距離をあけて立ち止つた。

「は、はは、ははは。やつた。やつたぞ、睦子。やつた。やつた」

植田は狂つたように、歪んだ顔で笑い続けた。ナイフをきつく握つた手は小刻みに震えてゐる。

「先生！」

海が倒れた岸谷の横で膝をついて、上半身を抱き起した。

「斎藤……」

岸谷の顔から血の気が失せている。汗と震えが身体に伝わり、海は言葉を失った。

「海、これでとにかく傷口押えてろ」

光の声が近くで聞こえたと思った直後、海の前に白いハンカチが差し出される。

「え？ 傷」

そう言って、海は無意識に避けていた岸谷の赤く染まつた腹の辺りに目を向けた。血が、岸谷の服を染めている。

海は流れ続ける血の辺りにハンカチを当てて抑えた。

空と光は、狂ったように、笑い続いている植田と倒れた岸谷の間に立つた。

「先生、頑張って。死んだらあかん」

海は岸谷の頭を自身の太腿に乗せ、声をかける。

「もう、先生じゃない。絵里を失った時、俺は教師で、あることを、捨てた」

切れ切れに、そんなことを言つ。海は大きく首を横に振る。

「絵里を、虐めた、子たちを、恨んでた……でも、一番恨んだのは、自分自身だ。あの子の悩みを何故、気付いてやれなかつたんだろうと」

岸谷は、そこまで言つて、大きくうめいた。

海が先生と岸谷呼ぶ。岸谷は、大儀そうに腕を持ち上げ、傷口を押さえている海の腕を掴んだ。

「もう、いい。斎藤。これは、報いだ」

海は唇をかみしめた。

もういいって何だ。

報いつて何だ。

確かに、岸谷のしたことは簡単に許されることではないだろう。

だが、苦しんで追い詰められたのは、死んだ睦子や杏奈だけではない。岸谷自身もだ。海は知っている。大切な人を亡くした人の気持ちを。なぜ、どうしてと、考へても考へても抜け出すことのできない思いも。後悔も、苦痛も。

それでも、前に進めと言つたのは誰だ？

海は、岸谷を泣きだす寸前のような、濡れた目で睨みつけた。

「もういいって、先生が言うな！　俺に、言つたん、あんたやないか……。あんたが前に進めて言つたんやないか。過去にとらわれるなつて言つたんはあんたや！」

大声で怒鳴りつけた海を、目を見開いて岸谷は見つめた。

「斎藤……」

「俺は忘れてないで、先生。先生が俺に言つたことちゃんと覚えてる。こんな先生の姿、絵里さんが見たら悲しむで。亡くなつた絵里さんに、安心して見てもらえるように、生きなあかんねやろ？」

岸谷が目を瞑つた。はつとした海の目に、岸谷の目元から涙が伝うさまが映つた。

「俺は、先生が死んだら、悲しいし辛いよ」

かつて、海が岸谷に言われた言葉。それをそのまま海は口にした。本心だった。このまま岸谷に、生きることをあきらめてほしくなかつた。少しでも、生きたいと思つていてほしかつた。

どうか先生を助けてと、祈る海の耳に、サイレンの音が聞こえた。救急車のサイレンではない。パトカーのサイレンの音だ。

「私市さんが來た」

空が、声を上げた。ここへ来る直前に連絡しておいたのだ。

空たちの正面で笑っていた植田の耳にも、音が届いたのだろう。苦み走った顔を入口に向けた。植田が走り出そうとしたとき、空はその前に回り込む。逃がしてたまるか。そんな思いで植田を睨みつけた時。警笛が足音も荒く踏み込んできた。それを目にした瞬間、岸谷は咆哮を上げると、空に突進する。

「空ー！」

光が声を上げた。海がその声に顔を上げて息を飲む。

植田が、空の左手首を掴んだ。人質にでもしようといふのか。光よりも、空の方が弱いと踏んだのかもしれない。植田は掴んだ空の手を引き寄せようとした。植田の顔に笑みが浮かんだのは、空が大人しく人質になると踏んだからなのか。

しかし、植田の予想ははずれた。

空は、素早い動作で植田の手を振りほどくと、逆に植田の右手を掴んだのである。そのまま回転するように動き、植田の右手を引き上げると、植田の身体を投げつけた。かなり素早い動作に、投げられた植田はもちろん、それを目撃していた光も海も、何が起こったのか分からなかつた。

空は植田の右手を掴んだまま、仰向けにした彼の左手首を思い切り踏み抑えた。

植田の動きを封じた空は、入口で驚いたように立ち止っていた警官に目を向ける。

「ちょっと、ぼうとしてないで、助けろよ」

このままでは動けないと訴えると、呆然としていた警官は我に返つたのだろう。慌てて空のもとに駆け付け、植田の身柄を拘束した。

私市がいつの間にか姿を現し、負傷した岸谷を病院へと運んで行つた。この辺りの道路は、一方通行が多い上に狭く入り組んでいるため、救急車を呼ぶよりも速いと踏んだのだろう。そこに海も同乗することになった。

頭を殴られていた光も、別の車で病院へと運ばれることになり、そちらの車には空が便乗した。

若い刑事の運転する車の後部座席で、窓の外を見ていた空に、光が尋ねた。

「空、柔道でもやつてたのか？」

空は窓の外から、光に視線を移す。

「いや、柔道じゃなくて、合気道みたいな。えっと、護身術？」

「何で疑問形なんだ」

光が突っ込むと、空は情けない表情を作った。

「いや、実は近所の道場にガキン頃通つてたんだけどさ。なんかそこの道場、いろんなものをこっちゃに教えてるところだ。結局にならつてるとか分かんなかつたんだよな。正式名称憶えてねえし」「あはは」と笑つてごまかす空に、光は息について見せた。

「まったく、空らしいよ」

光の苦笑が車中にもれた。

## 第三十一章 嘆き

ひんやりとした、病院の中。待合室にある長椅子に腰かけていた海は、両膝に肘をおき、拳を作った手に額を乗せた。

日はもうすっかりと沈んでいる。診療時間を終えた病院内は、申し訳程度の照明しかついておらず薄暗い。

岸谷は今集中治療室へ入っている。手術は成功したもの、予断を許さないと医師は言った。

怖くて、怖くて仕方なかつた。

大切な人ばかりが、海の前から消えて行く。なぜ、どうしてと思つても、答えなど出ないことを知つていて。「どうしても考えずにはいられない。

海が大きく息を吐き出した時、近づいてくる複数の足音が耳に届いた。

「あ、海いた」

空の声だ。そう思つて、ゆっくりと顔を上げた海の目に、やはり思つた通りの人物がいた。その後に、もう一人が続く。

「海、大丈夫か」

抑揚の無い声でそう声をかけたのは、光だった。頭には包帯が巻かれている。

「それは、じつちのセリフやる。おまえは大丈夫なんか？」

海が自身の前に立つた光を見やる。

「僕は大したことない。たんごぶができるけど」

光は、自分のことではないよつに淡々と答えた。

「なあ、帰ろうぜ」

もう疲れたよと、空が海に声をかける。

海は、大きく溜息をついて、先ほどと同じように手に額をつけた。

空と光は戸惑つたように顔を見合わせる。

「ほんまに、先生なんやううか」

「え？ 何

囁くような声音だつたせいだろつ。聞き取れなかつたのか、空が  
問い合わせ返す。

「ほんまに先生が、石井や川崎を殺したんやろつが  
「でも、本人が認めてたじやん」

空は、悲しげに顔を伏せた。海の様子に、胸を痛めたのである。  
海は頭を横に振つた。

「でも、俺、やっぱり信じられへんねん。先生は、俺がすつゝい落ち込んでる時に、俺を励ましてくれてん。俺に向いて生きりつて言つた先生が、石井達を殺すとは思えへん。石井達の親が、自分と同じ気持ちを抱えるつて分かつて、先生がそんなことするやうか……」

最後の方は自身に問いかけるよしに、海は囁いた。

人の姿の見えないこのフロアでは、その囁きも一人の耳に届いた。空は一人座る海を見下ろした。顔を俯けているせいで、海の表情は分からぬ。

海は相当岸谷のことを信頼していたのだろうか。先生がそんなことをするわけない。そう、思いたがつていてるよう見え。

実際に、岸谷は絵里の名を騙つたメールを石井たちに送つていた。そう認めたのだ。それだつて、彼女たちが苦しむかもしれないと分かつていてやつていたのだろうと、空は思う。それなら、岸谷が石井たちを殺していったというのもおかしいことではないはずだ。

「海、でも……」

空が、海に呼びかけた時。光に肩を軽く掴まれて、空は口を開ざした。光は、少し黙つてろというように、空を見る。彼は足をかばいながら、ゆっくりと海の横に座つた。

「海、僕もそう思うよ」

本当にそう思つてゐるのかと問いたくなるような、淡々とした口調。海は訝しむように光に顔を向ける。

「何？」

「僕も、石井さんや川崎さんを殺したのが、あの人だとは思えない  
空は、その言葉にえつと声を上げた。海も驚いたように田を見開く。

「何で驚くんだ」

気分を害したように、光が眉を寄せる。

「いや、だつてさ。認めてたじやん。伊藤さんが、あんたが殺した  
んだつて言つた時にわ、岸谷さん認めてただろ？ 聞いてたよな。

光

空の脳裏に、全では俺のせいだと言つていた岸谷の顔がよみがえる。

光は空を見上げた。

「確かに彼は、すべて俺のせいだと言つた。でも、彼は一言も自分が殺したとは言わなかつた」

その言葉に空はあつと声をあげそうになつた。そう言われれば、確かにそうだと思ったのだ。光が、岸谷に、すべてとはどこまでをさすのだと聞いていたのを思い出した。

海がじつと光に視線を注いでいる。光の次の言葉を待つよつ。「彼がはつきりと認めたのは、メールの件だけだつた。でも、たぶん。君島さんのあとをつけたのもあの人だと思つ」

「そんな……」

そんなことないと言おうとしたのだろう海に、黙るように口元で指を一本立てて見せた光は、そのまま言葉を続けた。

「海が君島さんのあとをつけたのは先生かと聞いた後、彼は全てその通りだと言つただる。それはたぶん言葉のまんまだと思う。ただ、僕たちが思つていた意味ではなかつたのかもしれない」

僕たちが思つていた意味ではない。それはつまり、君島さんを害そうとして、彼女の後をつけた訳ではないと、そういう意味か。空が考えている横で、光はなおも言葉を続ける。

「君島さんに、メールを見せてもらつたんだ」

「え？ メールつて悪戯メールか？」

空の間に、光は曖昧な言葉を呟いた。

「いや、悪戯のようで、悪戯でないような」

「意味分からん」

光は不機嫌そうに漏れた海の言葉に苦笑した。

「ムツコも死んだ。アンナも死んだ。次はユカかも知れない。気をつけ」

「聞き覚えあるな」

そう漏らした海の横に立っていた空は、首を捻った。

「俺知らねー。何それ」

「君島由香が事故に遭う前にきたメールの内容だよ。空が怒って病室を出た後、直接見せてもらつてから、僕はおまえのあとを追つたんだ」

空はああ、あの時ねと、呟いた。

「君島さんはあのメールを見て、怖くなつたと言つていたが、あのメールはそのままの意味だつたんじゃないだろうか」

「そのままの意味?」

空が首を傾げて尋ねると、光は頷いた。

「そうだ。メールを送つていた石井さんと川崎さんが相次いで亡くなつたことを知つて、君島さんの身を案じて送つたものかもしれない。君島さんには脅しのように映つたようだけじ」

海は田を見開いた。空も同様に驚きの表情を作る。

「それで言つたら、先生が君島さんのあとをつけたのは、君島さんの身を案じたから?」

海の言葉に、光は頷いた。

「その可能性が高いと思つ。結果的には、逆効果になつてしまつたようだけど」

「そういうや、君島さんが事故に会つ前、危ないつて男の声が聞こえたつて言つたけど、あれ、先生やつたんかな」

海は大きく息を吐き出した。片膝に肘をついて、その手に顔をうずめる。

「海？」

光が声をかけた。

「先生は、後悔しどつたんやろ？ 俺みたいに。……俺、先生のこと信じたいって思つとつた。でも、先生のこと、信じ切れんかった。ほんま、何やつてんねやろ？」

海の声が少し震えているような気がして、空は海を見下ろす。今にも泣きだすのではないかと思ったのだ。

「君島さんが事故った時も、あの時、俺に電話くれてたのに。俺、電話でれんくて。先生とも、もつと早く話してたら、こんなことにはならなかつたかもしれん。俺、ほんまに、なんでこんなに何もできへんのかな」

辛そうに吐き出された海の言葉。その言葉を聞いて、海の横に座る光が動いた。

海を抱きしめるよつて、横から手を伸ばしたのだ。

「光？」

驚いたように身じろいだ海の耳元で、光の声が響く。

「おまえにも、できることはあるだろ？」

海に回した腕に力を込めて、光は続ける。

「少なくとも僕は、おまえと空に救われたよ。海と空がいてくれたから、僕は今ここにいるんだ」

小さな声だったが、その言葉は海と、そして傍らに立つ空の耳にも届いた。

海はゆつくりと片腕を光の背に回して抱き返すよつて力を入れた。

「ありがとつ」

囁くよつて海は呟いた。

その横で、ずっと立っていた空がぐつと拳を握った。

「あー。もう無理だー」

いきなり大声を上げた空にびっくりして、光と海は身体を離して空に目を向けた。薄暗い照明の下、空の顔を見た二人は交互に声を上げる。

「空？」

「何で泣いてんねん」

海が突っ込んだ通り、空は大粒の涙をこぼしていた。嗚咽を漏らしながら、空は腕で流れてくる涙をぬぐつた。

「だって、か、海はなんかずっと辛そうだしさ、光は、なんかいいこと言うしさ。やつと、仲直りできたんだっ、とか、色々思つたら、我慢してたのに、もう、無理だー」

あまり要領を得ない言葉だったが、とにかく一人を見ていたら泣けてきたとそういうことだろうか。海と光はそう考えて、顔を見合せ苦笑した。

「なんや、悪かつたな。空」

「僕も、『ごめん』」

謝罪の言葉を口にした一人に向かい、空は悪態をつくようにホントだよと言つて口元に笑みを乗せた。涙を腕でぐいっとぬぐつと、晴々とした笑顔で二人に告げる。

「よしつ、じゃあ、海の先生の容疑を俺たちで晴らさうー。先生がこのまま殺人犯にされちゃたまんねーもんな」

つい先ほどまで大泣きしていた空の明るい声に、呆気にとられていた二人は顔を見合わせた。

光は気を取り直すように一つ咳払いすると、空と海を交互に見た。

「僕に一つ考えがある」

空と海は話を聞くべく、光に身を寄せたのだった。

暑い日差しを覆つ雲は、じんよりとした空氣をまとわせ天空に漂つていた。日差しが遮られるものの、周りの気温は高く、湿気が多い分、蒸し暑さを感じる。

光は、以前待ち合わせたのと同じ、駅前の噴水広場で、静を待っていた。

静の方から話があると電話があったのだ。光の方にも静と話しておきたいことがあったので、昼の一時半に待ち合わせをすることになつた。

現在の時刻は一時二十八分。あと、一分で待ち合わせの時間になる。

「じめん、春名君待つた？」

すっかりと聞きおぼえてしまった静の声に振り向けば、静は初めて見るパンツ姿だった。丈の短い、クロップドパンツという名称だつたか。その白いパンツの上に、ピンク色のフリルとリボンの付いたブラウスを着ている。決してボーイッシュではなく、清楚系を崩してはいない。そんなことを考えている光の前で立ち止り、静は笑顔を向けてくる。

「待つてないよ。今日はパンツなんだね。似合つよ」

にこりともせず告げたが、静の頬はほんのりと赤く染まった。

「あの、春名君。今日呼びだしたのは、お願いがあつて」  
言い淀み、下を向いた静を、光は見下ろした。

「私と、付きあつてほしいの。ムツコやアンナに言つたみたいに、嘘じやなく、本当に付き合つてくれないかな」

光の眉間に皺が寄つた。静が潤んだ瞳で、光を見上げる。光は軽く息を飲んで、そんな静を見つめた。

静はゆっくりと動く。周りに人が居ることなど気に留めていないのかもしれない。光の首に腕をかけると、背伸びして光に顔を近づ

けた。唇と唇が触れそうになる。

反射的な行動だった。光は掌で静の唇を受け止める。その感触に気付いたのだろう。静は目をあけ、しばし、光と見つめ合った。

彼女はゆっくりと手を離すと、苦笑いを浮かべる。  
「やつぱり駄目か」

「僕は、君のことが良く分らないな」

少し呆れたような声が光の口から洩れた。静は、首を傾げる。  
「大人しいかと思ったら、大胆だし。人見知りするタイプかと思つたら、それでもないし」

「何が言いたいの？」

静が穏やかに尋ねた。光は口元だけで笑んで、静の耳元に唇を寄せた。

「でも、僕は知ってるよ」

静は慌てて、耳に手をやつて光から距離を取つた。行き交う人々から見れば、恋人同士がじやれ合つているように見えるかもしれない。だが、二人の間にはそんな空氣は微塵もなかつた。

「な、何」

「君がやつたこと」

静の顔から表情が消えた。耳にやつた手を下して、光を見つめる。彼は口元の笑みをより一層深めた。

「川崎さんの手紙に書いてあつただろう？ 春名君は全て知つてゐるつて。あの時は周りに人がいたから惚けたけど」

静の光を見る目に鋭さが生まれた。

「……じゃあ聞くけど、何を知つてるつていうの？」

静が強い視線はそのままに、笑顔を作つて見せた。

「川崎さんが知つていたことは全部、かな」

光の顔には冷笑が浮かんでいる。綺麗な顔立ちの彼にはとても似合う表情だ。

静はじつと彼を見詰めた。

「人目に付かない場所に移動しようか」  
光が、小声で告げた。静が聞き返す。

「え？」

「人は聞かれたくないだろ」

静は否定も肯定もせず、光に背を向けて歩き出した。光はその後をゆっくりとついて行つた。

この建物は以前病院だった。

夜この建物に入ると神隠しに遭うだの、四階の五　一の病室には少女の靈が出るだのという噂はこの辺りに住む人々にとつては周知である。実際に、建物を壊そうとしたことは數度あつたのだが、そのたびに事故が起き、持ち主が壊すのを諦めたという。壊すのにも費用はかかるのだ。

そんな廃墟に、静は光を伴つてやつてきた。

所々破損した壁や床。割れたガラスやゴミが床に落ちている。長い廊下を進み、クモの巣を避けて、静の後を追いながら、光は屋上へ出た。灰色の雲が光を出迎える。

光は額の汗をぬぐつて、静と対峙した。

「ここ、知つてる？」

静が、にこやかに問い合わせた。光は頷く。

「ああ、桜田さんが亡くなつた場所、だろ？」

静は笑みを深くした。

「ご名答」

ふざけた様に、拍手する。光は眉を潜めて見せた。

「あら、『機嫌そこねちゃつた？』

そう言つ静はやけに機嫌が良いように見えた。

「ここは、私にとつて、落ち着く場所なの」

弾むような口調で静が続けた。光は理解できない思いを胸に抱く。

「ここは、君の友達が亡くなつた場所だらう?」

それが、なぜ落ち着く場所になるのか。

静は、光に背を向け、鎧の浮いた柵に手をかけた。作の向こうには灰色の空が広がっている。

「あんなの、友達じゃないわ」

静がこちらを振り向いた。その顔から笑みが消えていた。

「さあ、教えて? 春名君は何を知つてるの?」

探るような眼。光はその視線を受け止め、口を開く。

「君は、一年前。桜田さんがここから落ちた時、この場所に居た」

「それだけ?」

即座に問い合わせられて、思わず言葉に詰まる。

「私とムツコが、エリをここから突き落としたことは聞いてないの?」

光は目を見開いた。嫌な汗が頬を伝つ。

やはり、そうだったのか。

光が、杏奈から話を聞いていたというのは嘘だ。本当は空と一緒に杏奈と話したことが全てで、杏奈から詳しいことは何も聞いていない。

なぜ、静は自ら口にしたのか。光は疑問を振り払つように頭を一度振つて、息を吐いた。

「ああ。でも、そんなところだらうとは思つてたよ」

「そうなの。せつかくだから教えてあげる。どうして、エリが死んじゃつたか」

静は手すりに背を預けて、光をまっすぐ見つめる。

二年前。由香が待ち合わせ場所に来ないことを告げ、睦子と静は絵里をこの場所へ呼び出した。

ここで、絵里をいたぶることが目的だつたらしい。

「でも、あの子つたら、自分がしたことは柵に上げて、私たちに食つてかかつってきたわ。本当に、身の程を知らないバカだつたの。エリつて子は。あの子、ムツコに掴みかかってきてね。ムツコとエリ

はここで揉み合つたの」

そう言いながら、静は手すりを一度叩く。

「そう、ちょうどこの辺り。いい加減うざくなつてきて、私、ムツコに手を貸したの。ちょうどビムツコもエリを付き飛ばそうとしてたときだつたから、一人の力が加わつて、エリはここから、下に落ちちゃつた。あれは事故、いいえ、正当防衛とでもいうのかしら。私がムツコに手を貸さなきや、エリはムツコをここから下に突き落としていたでしょうね」

静の口調は軽かつた。その上、最後に小さく笑う。

光は氣味の悪いものを見ているような気分になつて、静から目を逸らした。

「君たちは、落ちた桜田さんをそのまま放置して逃げたんだな」

「ええ。それはアンナに聞いたの？」

その問には答えず、光は逸らした視線を無理やり戻した。

「石井さんは、随分と呵責の念を抱いていたようだけど、君はそういう見えないな」

風が吹いた。一際強い風が、この廃病院の周りに植えられた木々を揺らし、大きな音がなる。静はたなびく髪を手で押さえて、それをやり過じた。

その時、光の携帯電話が着信を知らせるメロディーを奏でた。尻ポケットに手をやつた光を見やつて、静は可愛らしく首をかしげて見せた。

「出れば？」

光は無言で、携帯電話を耳にあてた。一一二三言相槌を打つて、携帯電話を閉じる。

「誰から？」

静の問に、今度は答えた。

「海から、桜田絵里の父親が死んだそうだ」

少なからず驚いた後、静の顔に嬉しそうな表情が浮かぶ。その表情を見た光の顔とは対照的だ。

「当然の報いよね。私にあんな嫌がらせして」

「随分、嬉しそうだな」

光の顔に、珍しくはつきりと、嫌惡の念が現れる。静は表情を変えず、頷いた。

「当然でしょう？」

「当然、ね。まあ、確かに。全ての罪を彼にかぶせて、これで君は安泰だもんな」

どういう意味？ と、彼女は尋ねた。

光は、ゆっくりと、申し訳程度につけられた柵に向かつて歩いた。じつと立っているのに疲れたのだ。

「君は石井さんと川崎さんを殺したのが、さも桜田絵里の父親……岸谷さんのように言つていたけど、僕は一人を殺したのは君だと思つていい」

静は、凭れていた柵から背を離し、光と相対して腕を組んだ。

「どうして私なの？ あの人全て自分のせいだつて言つてたじゃないの？」

「そうだな。でも、あの人人が認めたのはメールの件と、君島さんを事故に追い込んだことだけだよ」

「そんなこと……」

ないと続けようとしたのだろうが、光はその言葉を遮つて続けた。「君は、桜田絵里の父親にこう言つた。あの人人が犯人よ。由香が事故にあつたのもあの人人のせいよ。あとは……何もかも、この人のせいよ。この人さえ、メールなんて送つてこなければ、きっとみんな死ななかつた」

静は目を細め、前にかかつた髪を肩の後ろに払つた。

「それがどうしたの？」

「この時に、彼は認めるセリフを吐いた。君は彼にそのセリフを吐かせるために、敢えてこう言つたんだろう。ムツコはこの人に追い詰められたせいで死んだ。この人がエリの名を騙つてメールなんてしなければ、怯えて車道に飛び出したりしなかつた。と」

静は光を黙つて見つめた。口を開こうとはしない。

「この時、君は川崎さんが殺されたことは省いていた。忘れていたんじゃない。君は敢えて川崎さんのことは言わなかつたんだ。彼が否定するのを恐れて。君が石井さんと川崎さんを殺したのはあなただと、言つた時。石井さんの元彼が現れたのは偶然じやなかつたんだろう。君は、彼があのタイミングで出てくるのが分かつていた……」

「そんなあなたの勝手な妄想でしよう？ それに、もし、仮によ。あの人人が犯人じやないなら、私よりも怪しい人がいるじゃない」「誰？」

光は簡潔に尋ねた。静は考えるように顎に手をやつた。

「ムツコの元彼。ムツコの元彼はすごく嫉妬深くて、執念深い人だつたの。ムツコは一方的に別れを告げたけど、彼はそれが許せなかつた

「だから殺したつていいたいのか？」

「ええ。それに、アンナも。アンナはムツコに彼と別れることを勧めていたから。それを逆恨みしたんじやないかしら」

自信に満ちた静の口調。光は一度階段へと続くドアへ目を向けて、すぐに逸らすと静に視線を戻した。

「なるほど。でも、その話は少しおかしい」

静が不機嫌をあらわにした。光は気にした様子もなく、言葉を続ける。

「なら、なぜ。彼は岸谷さんを刺したんだ？ あの時彼はこう言った。やつぱりおまえが睦子を殺したのかと」

静の反応をうかがつたが、彼女が表情を動かすことはなかつた。光は息をつく。

「その言葉から、彼は少なくとも石井睦子を殺してはいない。そうでないと、岸谷さんを刺す意味がないからだ」

「一人を殺した罪を、エリの父親になすりつけるためだったのかもよ。私たちにそう印象づけるために、エリの父親を刺した」

静の反論に、光は首を横に振った。

「罪を逃れようと/orする人間が、わざわざ人前で、人を刺さないだろ  
う。それなら、人気の無い場所で、遺書でも用意して、それこそ自  
殺に見せかけて殺せばいい。あんな場所でわざわざ刺す必要はない」  
静がふと口元で笑んだ。少し顔を俯けたせいで、彼女の瞳は前髪  
に隠れた。

「なら、教えて？ エリの父親でもない、植田さんでもない。私が  
犯人だと思う理由を」

静はゆっくりと顔を上げ、挑戦的な目を光に向かた。光は額き口  
を開いた。

## 第三十一章 本郷は（後書き）

「JRでJR覧いただきあつがとついでござました。

いかがでしたでしょうか。

今回から解決編になります。これがまただらだらと長い（自分で言うか）ですが、さうまあおけを企てなければ幸いです。

じつはですね。ちょいちょいと書き直しをしていたら、一つの章がえらく長くなってしまったので、その章を一つに分けました。と、いひとで。

残りがまだ四話になります。

プロローグとヒローグを含め、全三十七話になります。

次回の投稿は、三十日の土曜日を予定しております。（何時に投稿するかはまだ決めていません）

もしかすると、三十一日の日曜日になるかもしませんが、一応土曜日とお考えいただければと思します。

それでは、また。

お会いであることを願って。

愛田美月でした。

## 第二十二章 その理由

葉擦れの音が耳に届く。湿った風が強く、廃墟の屋上に立つ一人の間を吹き抜ける。雲の流れが心なし、速くなつたように思われた。「この事件は、二年前の桜田絵里の自殺騒動から端を発している」静は頷くにとどめた。これは当たり前のことだろう。光は先を続ける。

「君と、石井さんは桜田さんの死の真相を知りながら、それを黙つて生活を続けていた。そして、桜田さんの名を騙つたメールが届く。そのメールを見て、石井さんは怯えた」

「ええ、そうね。でも、一番怯えていたのはユカだつたわ」

「ああ、彼女も怯えてはいた。それは彼女に負い目があつたから。石井さんにも、負い目があつたわけだ」

静は頷いた。

「さつき私が話した内容ね」

静と睦子は絵里を揉み合いの末この屋上から突き落としてしまつた。それを石井睦子は気には病んでいた。故意ではないにしろ、桜田絵里を殺してしまつたのだから。

「石井さんが亡くなつたあの日。君は、石井さんが警察へ行くと言つたあと電話が切れたと言つていた」

「その通りよ。ムツコから、あとをつけられてるから、警察へ行くつていう電話の途中で切れたのよ。それがおかしなことなの?」「尋ねられて、光は無表情に応じた。

「ああ。おかしいというよりは、違和感だな。彼女は亡くなる前、僕たちの前で、警察なんていけるわけないと怒鳴ったのを君も覚えてるだろ?」なのになぜ、死ぬ前の電話では警察へ行くと言つたのか?」

「追いかけられて怖かつたからじゃないの?」

静の答えはもつともに聞こえる。だが、光は首を横に振つた。

「僕は彼女が覚悟を決めたからじゃないかと思つて、いる」  
静が眉を寄せた。訝しい表情で、光に疑問をぶつける。

「覚悟？ 意味が分からんんだけど」

「なぜ、彼女は警察なんていけるわけないと言つたのか。彼女は警察に、痛い腹を探られたくなかつたんだ。桜田絵里の件で嫌がらせのメールが来ている。その犯人から彼女はつけられていたと思つて、いた。警察に行けば、桜田絵里のことについて話さなければならなくなる」

「そんなの、いくらでもこませるのに」

彼女の言葉に、光は溜息をついた。

「石井さんには出来なかつたんだろう。でも、何度もあとをつけられて、いる内に、恐怖はピークに達した。桜田さんのことを話してでも、この恐怖から逃れたい。そんな風に思つたんじやないか」

「あり得ないことはないわね。でも、それでどうして私が犯人になるの？」

「君は、警察に知られたくないから。といつよりは、世間に公表されたくないから、かな」

静が目を細めた。眉間に皺が寄る。だがそれもつかの間で、すぐに微笑みを浮かべた。

「そんなことないわ。私、さつきあなたに話したばかりじゃない」

静の言葉をあえて光は無視した。

「君は石井さんの精神状態を間近で見てきた。彼女がもう限界のは分かつて、いたはずだ。だから、彼女が邪魔になつた。君は、あの日。電話をもらつて、彼女を殺す決意をした。いや、その前から殺そうと思つて、彼女の家近くに居たのかもしれないな」

静は彼の言葉を聞いて、笑つた。

「すごい妄想力ね」

口元に拳をやり、また笑う。

「君は彼女を人気の無い、あの廃ビルまで呼び出し、彼女を突き落とした」

「ありえないわ。私、あそこに入つたことないって言つたじゃない。  
あなたと二人でムツコを探し入つた時が初めてなのよ」

静が言い終わつた後、光は少し俯き、ずれてきた黒ぶち眼鏡を人差し指で押し上げた。

「本当に初めて？」

「ええ」

静の頷きに、光はわざとらしく首をかしげて見せた。

「それはおかしいな。なら、なぜあの時。君は僕に注意することができたんだ？」

静は何のことか分からなかつたのだろう。不思議そうな顔をする。「憶えてるだろ？ 一人で廃ビルに入つて、階段を上つている時。君は僕に言つた。危ない、大きな穴があいてるつて。まさか、聰明な君が、忘れたなんて言わないとね」

光の言葉に、静が苦虫をかみつぶした顔になる。

「あの時、僕はおかしいと思った。あそこは暗くて、ケータイの僅かな灯りが頼りだつた。足元の、ひかりなんてほとんど届かないあの場所の穴を、どうして君が気づけたんだろうとね」

静は答えなかつた。右手で左肘辺りを掴み、光から目を逸らす。

「君はあの穴の存在を行く前から知つていたんだ。先に石井さんと一緒に上つたから。その時、二人の内どちらかが躊躇でもしたのかな」

片腕を掴んでいた手に力がこもり、関節の骨が白く浮き上がりつて見えた。静は一度息を付くと、光を見やつた。

「その時からずっと、私のこと疑つてたの？ 春名くん」

じつと見つめてくる静を、光は無表情で見返した。

「いや、その前から」

静が首を傾げる。

「その前？」

「君が、キーホルダーを見つけた時から、違和感があつた。僕は、君に誘われるようになつた。あのビルに入つた。そして、ビルの中に落ち

ていた鞄。まるで僕らにビルの中を捜せと、誘導しようとしている  
ような気がしたんだ」

「そんなの気のせいよ。きっと、犯人ともみ合つて、鞄投げつけた  
りしたんじゃないの」

投げやりな口調で静が髪に手をやる。

光は息をついてから、静に言った。

「それなら、鞄の中身が飛び出していなければ変だ。それに、あの  
場所に争つた形跡はなかつた」

静が皮肉げに、口元を歪めた。

「そう、まあそういうことにしておいてあげるわ。じゃあ、春名君  
は私がキー ホルダーを見つけた時点で、私に疑いを持っていたつ  
てこといいのよね」

「まあ、その時点では微かにだけど。でも、動機が分からなかつた。  
あの時までは」

「あの時？」

静の声に、光は頷いた。

「川崎さんが僕に話があると言つて、僕を呼びだして聞かせてくれた。  
た。石井さんが、桜田絵里が死んだ時に、その場にいたと。彼女は  
それしか言わなかつた。桜田さんが落ちた時に、石井さんは一人だ  
つたのかという僕の問い合わせに対し、彼女は、春名君はどう思うのと、  
尋ね返してきた」

そこで一寸言葉を切つて、光は先を続けた。

「その時僕は、石井さんは一人ではなかつたと確信した。石井さん  
が川崎さんに、その話をしたということから、川崎さんは除外され  
る。君島さんは、自分が約束の場所へ行かなかつたから、桜田さん  
が死んだと思い込んでいた。と、言つことは、一緒に居たのは、君  
以外考えられない」

「実際にその通りだつたわけね」

静の声は落ち着いていた。少しも追い詰められたような感じはない。  
い。

「ああ。川崎さんは、石井さんから、君と石井さんが桜田さんを突き落としたことを聞いていた。それを石井さんが警察に話そうとしていることも。石井さんが死んだ時、彼女は、真っ先に君を疑つたんだ。だから、あんな手紙を書いた」

「春名君は全部知つてる」

静の咳きに、光は首を縦に振つた。

「そう。それだ。なぜ、川崎さんはあんな手紙を書いたのか。それは、あの手紙を見た君が、疑心暗鬼に陥るのが分かつていたからだ。それはつまり、君には知られたくない秘密があるということ。あれは一種の脅しだった。彼女は、自分が殺されることを薄々感じていたんだろう。だが、みすみす殺されてやる気はなかつた。死んだ後も、君を苦しめるつもりでの手紙を書いたんだ。手紙に書いた名が僕だったのは、単に君と僕がつきあつていると彼女が思つていたからだと思う。彼氏である僕が、君の罪を知つていて。そう思つて君が戦々恐々とするさまを思い描いていたのかもしれない」

杏奈は光に手紙を渡した後、別れ際に言つた。最後に一人に会えてよかつたと。最後に。その言葉が引っかかった時、どうして呼びとめ、彼女から全て聞きださなかつたのか。そんな後悔が彼の中にあつた。

あの手紙を書いた杏奈が、意図していたのかは分からぬが、光にとつては静が犯人だと示す告発文に相当していた。

ふと、静の笑い声が耳に届いた。知らず俯けていた顔を上げる。いつの間にか、静がすぐ目の前に立つていた。静が光の顔を覗きこむ。

「ふーん。おっしいなあ。頭が良くて、顔も良くて、ついでにお金持ち。理想の彼氏になれるつていうのに、死んでもらわなきゃならないなんて」

楽しげな口調で、さらりと告げて。静は満面の笑みを浮かべた。

## 第三十四章 何が幸せ？

光が静と待ち合わせるよりも前の時間。

岸谷の入院先の病院から出てきた二人は、その足で、私市が勤めているはずの警察署に足を運んだ。

署内に入つて、探す間もなく一人は私市に呼びとめられた。

「やあ、海君と、高橋君」

海を呼んだあとに空の名を呼ぶのが少し遅れたのは、きっと空の名字を思い出すのに時間を要したからだろう。

一人に近づいてきた私市は、眠そうな目をさらに細めて、一人を見下ろした。別にえらそうにしている訳ではなく、たんに私市の背が一人より高いからである。

「あの、私市さん。これから少し時間もらせませんか？」

「いいよ。ちょうど今から一度家に戻るところだつたからね」

そう言つて、私市は話があるなら外へ行こうと一人を促すように背を押した。

駅から少し歩いた場所にある喫茶店に、私市は一人を案内した。四人掛けの椅子に腰かけた私市に、細い目をしたマスターが氷水の入ったコップを置いた。

「私市、おまえまさか、援交じゃないだろうな」

声を落としてはいたが、マスターの言つた一言は空と海の耳に届く。

驚いた顔を私市に向けた一人に、私市は慌てた風もなく笑顔を向けると、横に立つマスターに仏頂面を向けた。

「人聞きの悪い。俺は立派な公僕ですよ」

私市は言ひながら、胸に手を当てる。純粹であるといふアピールのつもりだろうか。

「どうだか」

そう毒づいて、細い目を空たちに向け、マスターは冗談だからと

言つて席を離れた。

「友達ですか？」

海がカウンターの奥へと戻る背を見つめながら尋ねると、私はああと頷いた。

「学生のころからの腐れ縁だよ。で、話つて？」

私は二人の顔を交互に見る。空は胡散臭そうに私は見ていたが、表情を改めて口を開いた。

「教えてほしいことがあるんです」

私は空に目を向け、顔にほほ笑みを浮かべた。その時、席に着く前に私はが勝手に頬んだ、アイスコーヒーが三つ運ばれてきた。それが全て机の上におかれ、店員が持ち場へ戻ったのを見届ける。

「教えてもらいたいのは、川崎杏奈さんが死んだ時の状況です」

「例えば」

「教えないと言われなかつただけましか。そう思つて海を見ると、彼は頷いて空の言葉の続きを引き取つた。

「例えば、爪。可笑しなことになつてへんかったですか？」

私はストローに口をつけたまま、変な顔をした。一口程コーヒーを飲むと、ストローから口を離した。

「なんで、そんな風に思つたんだ？」

「ほらドラマとかで、よつあるやないですか。被害者が、犯人ともみ合つて、爪に犯人の皮膚が残つてるーとか」

私は、テレビの見すぎだよと言つて笑つた。だが、その瞳は笑つていないように、空には見えた。

「川崎さんの爪、切られてたんじゃないですか？」

空の問いに少なからず驚いた表情を見せた私は、ゆっくりと口角を上げて口元だけの笑みを見せる。

「その通り、爪は切られていた。どうして分かつた？」

私はに聞かれ、空と海は顔を見合わせた。

「光が、言つてたんですね。手は、水に浸かってたか、爪が切られていたかしたんじゃないかって」

代表して空が答える。私市は、光君かと、何かを考えるよつに咳いた。

「犯人は、川崎さんに傷を負わされた可能性がある。とかなんとか言つてたんですよ。で、川の水で川崎の手を洗つたか、爪を切つたかしたんちゃうかって」

ふむ。と、私市は顎に手を当てた。

「あんがい、揉み合つた時に引っ搔かれたから、爪を切つたってことも考えられるな。少量の血痕も見つかつたし」

私市の言葉を聞いて空が声を上げた。

「え？ それって犯人の？」

「こらこら、声が大きいよ」

私市が苦笑とともに、空を窘めた。

「そんなん、俺らに言つていいんですか？」

思わず聞いた海の横で、空は、碎けた敬語だと関西弁入るんだと関係の無いことを考えてしまつていた。

「ああ、まあ。どうだろ？ね」

空は、そんなんでいいのかと突つ込みたくなつた。だが、せっかく話してくれたのだからと思いどどまる。

海は、目の前に置かれたアイスコーヒーを啜つてから口を開いた。  
「血痕が残つとつたつてことは、調べれば誰の血か分かるんですね」

私市は訝しい表情を作つた。

「それは、まあ。そうだが。君たちはその血の主に心当たりでもあるのか」

身を乗り出した私市に、空と海は昨夜、光と話した内容について語つたのだった。

「ねえ、春名君。私のために死んでよ

光は一步後退つた。ここに来て、すぐに、自分が絵里をここから突き落としたのだと、静が告白した時から思つていたのだ。

「最初から、僕を殺すつもりで呼びだしたんだね」

静は一步一歩と光との間合いを詰める。

「そう、だから今日はスカートやめたの」

静の口調は楽しげだ。

カンと音が鳴つた。ベルトが、背後にあつた柵にぶつかつた音だ。

光はいつの間にか隅に追い詰められていたのである。

「あなたも、可哀相よね。アンナがあの手紙なんて残さなければ、殺されずに済んだのに」

光は我知らず唾を飲み込んだ。

「死ぬ前に聞かせてくれ、君は本当に石井さんと川崎さんを殺したのか」

静は光の目に立ち、顔を近づけ、満面の笑みを浮かべた。

「ええ。殺したわ。だって、邪魔だったの。あの子たち」

「邪魔？」

光の口から洩れた声は、少し掠れて聞こえた。

「そう。邪魔だったの。ムツコつてば、あんなにここで言い含めたのに。エリが落ちたのは自業自得、ムツコのせいじゃないよって。あんな奴のことは忘れて、楽しく生きましょうって。なのに、あのメールのせいで、すっかりおびえて。エリを突き落としたことを警察で言うなんて言い出すから」

「あの廃ビルで彼女を突き落とした」

光の確認に、彼女は素直に頷いた。風に揺れた長い髪が彼女の顔を覆い、それを手ではねのける。

「そうよ。あなたの言うとおり、あの日、私はムツコと話し合いつもりでムツコの家に向かつてた。そして、電話をもらつたのよ。警察へ行くつてね。だから、途中で捕まえて、あの屋上へ行つた。せっかく一年も黙ってきたのに、今さらあの話を蒸し返すなんてどうかしてゐるわ。黙つていれば誰にも分からぬ。それなのに。あの子

はエリの父親の嫌がらせに屈して、私との約束を破りつとした。ずっと黙つてゐるつて約束したのに

静は睦子に裏切られたような気がしていたのだろうか。ふと、光はそう思つた。

静は、口元を歪めて声をだした。

「私はこれから、もっともつと幸せにならなきやならないの。エリやムツコに私の幸せを奪つ權利なんてない」

「それを言つなら、君にだつて彼女たちの命を奪つ權利はないだろう」

光の言葉に、静は冷笑を浮かべた。

「権利？ そんなのどうでもいいわ。私は、前に立ちはだかる邪魔な虫を退治しただけ。あなただけ、蚊が腕に止まつたら叩くでしょう？」

当たり前のことのように紡がれる静の言葉。矛盾していると氣づかないのか。

静の言葉がどれも本気だと察して、光の背に嫌な汗が伝つ。

「君にとつては、川崎さんも邪魔な虫だつたつてわけか」

「ええ。あの子、私を呼びだして何て言つたと思う？ 友達を殺すなんて許せない。一生苦しめてやるつて言つたのよ。馬鹿な子。何が友達よ。自分が私より勝つてるとでも思つてたのかしら。あれも死んで当然よ」

光は、柵に背を押しつけた。静から少しでも距離を置きたかったのだ。

「あの子つてば無防備に私に背を向けるんだもの。一生苦しめてやるつて言つておきながら。私に歯向かつたらどうなるか教えてあげたの。頭を押さえて、川にね、顔を抑えつけてあげたの。そしたら、思つたよりあつさり死んだわ」

そんな惨いことをよくやれたものだ。当たり前のことのようになじむ田の前の少女が、光は恐ろしくなつた。

「君たちは友達だつたんだろう」

「友達？　ばかばかしい。ちつとも言つたけど、ムツコもアンナも友達なんかじゃないわ。しいて言つなら、私の下僕。お金を出せばついてくる卑しい奴らよ」

光は眉を寄せた。静の顔にはいまだ笑みが張り付いている。

「君は、そいやつていつも人を見下してるとか」

「私に見合う相手がいないんだもの、しようがないわよ。あなたは私に見合うかと思ってたんだけど、思い違いだつたみたいね」

静の雰囲気が不意に変わった気がして、光は声を上げた。

「あの時！　あの時も君は、僕を殺すつもりだつたのか？」

光の声は若干上ずつて聞こえた。光にしては珍しく内心の動搖が表に出たのかもしれない。静は訝しむような表情を見せたあと、答えた。

「ああ、廃工場でのことね。そつ。確かにあの時、あなたには死んでもらいたかったのよね。アンナの手紙、あなたは何のことか分からぬって言つたけど、ほら、用心にこしたことはないじゃない」

彼女はふふっと笑い声を上げた。

「君はあの日、僕に犯人から呼び出しがあつたと嘘の電話をよこして僕をおびき出した。でも、君が呼び出したのは僕だけじゃなかつた」

光の言葉に、静は口を挟む様子を見せずじつと耳を傾けている。

「桜田さんの父親、岸谷さんと、石井さんの元彼、植田も君は呼びだしたんだ」

「ん。正解」

静は言葉とともに手を叩いて見せた。

岸谷が刺されたあの日。植田が何故あの場所へ現れたのか。それが不思議だった。石井睦子と別れていた彼は、睦子が悪戯メールに悩まされていてことを知っていたとは思えない。

誰かが、彼に教えない限り。

悪戯メールのことを知らなければ、岸谷が睦子を殺した犯人だと思い込むことはなかつたはずである。

では、それを彼に教えたのは誰か。そう考へれば、静しかいない。

「光は思ったのである。

「岸谷さんには、桜田さんの死の真相を教えてあげるとでも言つたのかな。植田には……」「

「ムツコを殺した犯人を突き止めたって話したの。あと、ムツコをたぶらかした男も呼びだしたって言つたのよ」

その言葉で、光は悟つた。

「僕を殴つたのは、植田だつたのか……」

静は、出来のいい生徒を見る先生のように田を細め、光を褒める言葉を吐いた。

「そうよ、よくできました。あの男にはがっかりだつたわ。死んだと思ってたあなたが、普通に立つて私の前に現れるだもん。びっくりしちゃつた。死体になつたあなたの発見を遅らせようと思つて、あんなとこまで運んだつてのに全部無駄。まあ、全てが上手くいくとは思つてなかつたけど。私にとつても大きな賭けだつたし」

あの時、廃工場で岸谷に追われるようにして入ってきた静は、光を目にした時、確かに驚いた表情をしていた。あれは、死んだと思つていた光が生きていたことへの驚きだつたのか。

「あなたを殺して貰つて、ぜーんぶの罪をエリの父親に被せて、絵里の父親の口を封じれば、それで終わりだつたのに。植田の奴」

最後は憎々しげに、吐き捨てた。だが、ふと氣を取り直したように、俯きがちにしていた顔を上げた。

「でもまあ、絵里の父親を殺してくれたのはお手柄だつたかな」

静は光の表情を見て、眉を顰めた。光は、嫌悪の念を隠さず顔に出していた。

「嫌な顔。そんな顔しないでよ。……少し喋りすぎちゃつた。そ、もう死ぬ時間ね」

そう言つや否や、静は腰をかがめた。不意な動きに、光は虚をつかれた。

静は光の片足を取るとそれを高く持ち上げたのである。

光の身体のバランスが崩れた。  
体が傾いで、視界に灰色の雲が広がった。

## 第三十五章 後悔はないのか

後に大きく傾ぐ身体。  
背にした柵を越えそうになる。

光が小さく悲鳴を上げた時だった。それに被せるよひに、第三者の声が屋上に響き渡つた。

「そこまでだ。伊藤静！」

聞き覚えのある声が聞こえたと思った瞬間。光は腕を掴まれ、後に傾いだ身体を引き戻された。

「空」

「おっす。お待たせ」

「大丈夫か？ 光」

心配げな声を上げたのは、静を羽交い絞めにしている海だった。

「出でくるのが遅いよ。おまえら」

光は空に腕を掴まれたまま、その場に座りこむ。情けないが、力が抜けたのである。

「いやー、さすがに一人は若いだけあるな。おじさんは君たちの瞬発力にはかなわないよ」

と、この場にそぐわないのんきな声をあげて、後から姿をあらわしたのは、私市刑事であった。

「私市さんはまだ若いやないですか」

私市に合わせて、海がのんきな声を上げた。

「ちよつと、なんのよ、離してよ！ 逃げも隠れもしないから」  
暴れ出す静をもてあまし、海は私市を見やる。私市は頷いた。  
海は静をゆっくりと離す。

「本当に乱暴ね。嫌になっちゃう」

服をはらいながら、そんなことを言つ。

「乱暴なんはおまえやないか。光を殺そつとしゃがつて」

「そりだそりだ。おまえおかしいよ」

空が光を立ち上がらせながら、海の言葉に追従する。

「別に殺そとなんてしてないわ。ちょっとじやれあつてただけじゃない」

静の言葉に、海と空は睡然とした。光は、仏頂面をつくり、私は顎に手をやり面白いものを眺めるように静を見つめた。

「ようそんないと言えるな。俺たちは全部聞いてんぞ」

「そりだよ。石井さんも川崎さんも桜田さんまで殺したのがおまえだつたつてことをな！」

大声を上げた空を、嫌そうに見て、静は口を開いた。

「あなたたち、入口の付近にかくれていたんでしよう？　あの位置まで声が聞こえるわけないじゃない。それに、私が殺したつていう証拠がどこにあるつていうのよー！」

『ええ。殺したわ。だつて、邪魔だつたの。あの子たち』

不意に上がった声に、皆の視線が集中した。その視線の先にいたのは光だつた。彼の手には何かが握られている。それに付いているボタンを押すと、そこから聞こえていた声が途切れた。

「ボイスレコーダーだよ。君と僕との会話は全てここに入っている」

光はそれを彼女が見えやすいように持ち上げた。

静が歯噛みする。

「それから、これや」

そう言つて海が自身の携帯電話を持ち上げた。

「光に俺から電話かかつてきたん憶えてるよな。あんとき、光は電話を切るふりして、本当は通話状態のままおいてたんや。だから、俺らにもお前の話は筒抜けや」

静は冷ややかな目を海に向かた後、かすかに口の端を上げた。

「嘘よ。私が言つたのは全て嘘。ちょっとした悪ふざけよ。春名さんの推理が余りにも的外れで面白かったから、それに乗つただけ。

あなたたちも御苦労なことね。こんな悪ふざけのために、隠れて聞いてたなんて」

「往生際が悪いな」

空が声を上げた。静はそんな空に挑戦的な目を向ける。

「なら、証拠はあるの？ 私がムツコとエリを殺した証拠が。証拠もないのに私を犯人扱いして……」

「伊藤さん。君、キー ホルダー持つてる？」

突然、光がそう尋ねた。

「何言って……」

「ほら、中学の修学旅行の時にお揃いで買つたキー ホルダーだよ。いつも持ち歩いてるって言つてたる」

空は黙つて光の言葉の続きを待つた。いつもなら、何言つているのかと問いただしていたところであるが、空は光に事前に聞いて知つていい。光の真意を。

海も私市も口を挟まないつもりだろう。しづかに事の成り行きを見守つている。

「あのキー ホルダー、爪切りになつてたよね。亡くなつた川崎さんの爪は片方の手だけ、切られていたんだ」

静の眉間に皺が寄る。

「ちょうど君の腕にある傷と同じ、左側の手の爪だけがね」

「それがなんだっていうの。この傷は男に襲われたときにナイフでついた傷よ！ そう言つたでしょう」

「なら、見せてくれないか？ その傷を」

静の言葉を途中で遮つたのは、私市だった。

「君のその腕の傷をみせてくれ」

もう一度同じ内容の言葉を口にした私市は、自身の腕を使って傷のある場所を示した。

「まだ、傷はふさがつていないだろ？ その傷がナイフで切られてできたものなのか、それとも爪で引っかかれてできたものなのか。見ればすぐにわかるはずだよ」

静が自身の腕に触れた。ちょうど、以前会った時に、包帯を巻いていた場所だ。

「見せる必要なんてないわ」

「ナイフで切られた傷だつてんなら、隠す必要なんてないじゃん。見せれば、疑いも晴れるぜ」

空が静に挑発的な表情を向ける。静の顔が歪んだ。

そんな彼女の様子に、私は苦笑いを浮かべると口を開いた。

「もう一つ言つておく。川崎杏奈が亡くなつた現場に、被害者のものではない血痕が残つていた。調べればすぐに分かるよ」

静が驚きの表情を私は市に向ける。

「それから、岸谷さんは生きてるよ」

その言葉に、静が反射的に光に視線を向けた。大きな目をさらに見開く。

「意識を取り戻したんだ。岸谷さんはあの日、あんたに呼び出されたって証言したよ」

空が、不機嫌を滲ませた声で告げた。

「あいつが嘘ついてるのよ。私は電話なんてしてない」

静が声を上げる。光はいつもの無表情に戻つて、静を見つめた。

「伊藤さん。君の負けだ。君は喋りすぎた。ニュースでは、川崎さんの死因を詳しくは報道されていないんだ。でも、君は死因が溺死であると知つていた。警察以外には知らない情報を知つていたんだ。事細かに殺害方法まで喋つてみせたんだよ」

「何よそれ。じゃあなんで、あなたは知つてたのよ。アンナが溺死で、爪が切られていたつてこと。あなたも犯人しか知らない情報を知つていたつてことでしょう。そうよ。あなたが犯人なんじやないの？ 私を陥れようとしてこんな話……」

大きな溜息が辺りに響いた。その溜息を吐いた人物は、髪を無造作にかきながら、静に寝むそうな目を向いた。

「残念だけど。光君にあの子が溺死だったと話したのは俺だよ。まあ、爪に関しては、最初から切られていたと、分かつっていたようだ

けど？」

そう言つて、光に視線を向ける。光はその視線を気にも留めているよ。

「ほら、やつぱり。やつぱりあなたが犯人なんじゃないの？ 爪が切られていたって知つていたのはおかしいじゃない」

余裕を取り戻したかのような静の笑顔。

「ふむ。それは俺も聞きたいね」

空は、私市の言葉に内心、どっちの味方だよと思う。

光は一度大きく息を吐いた。

「僕は知つていたんじゃない。推測ただけだ。君の腕に傷があるのを知つた時にね。もし君が犯人で、その傷は川崎さんを殺害したときについた傷だつたら。君一人の犯行なら、殺害場所はあの川だろう。君一人で、誰にも見られずあの場所へ遺体を捨てたとは考えにくい。もし、殺害しようとしたときにもみ合つて手に傷を負つたとしたら、爪で引っかかれた可能性が高い。もし、そしたら、君はその痕跡を消そうとするはずだ。君は、爪切りとしても使えるキーホルダーを常に持つていると言つていた。それを信じるならば、それで爪を切つたか、川の水で手を洗つたかしたんじゃないかつてね。あくまで、推測の一つにすぎない。だから、空たちに確認してもらつたんだ、私市さんに。可能性を一つ一つ潰す目的で」

静は額に手をやつて口を開いた。

「は、もう、ヤダ。もう否定するのも面倒くさくなっちゃつた。血も残つてたなんて。すぐに抑えたつもりだつたのに……当たりよ当たり。全部春名くんの推測どおりよ」

静は大きな溜息をついた。

「はあ。しようがないか。刑事さん、私自首します

あつさりと、静は告げた。先ほどまでの粘りが嘘のようだ。呆気にとられた一同をしり目に、静は私市に歩み寄る。

「私が、ムツコとアンナを殺しました」

「あ、そう。でも何で急に？」

それは空も聞きたい。先ほどまで、あれほど否定していた人物とは思えないほど、あつさりと罪を認めた彼女の真意が分からなかつたからだ。

「自首した方が、罪、軽くなるんでしょう」「はあ。そういうこと」

間の抜けた声を上げた私市は、一度頭を搔くと、静の背を押して警察署へ行くよう促した。

「伊藤」

海はドアを潜ろうとしていた静の背に、呼びかけた。

「おまえ、悪いとは思わへんのか？　三人に」

静は足を止め、少し振り向くと、海に向かって口角を上げた。

「悪い？　そんなの思うわけないじゃない。私は、ただ、邪魔な虫を排除しただけ。私の幸せを守るためにには仕方なかつたのよ」

静はまた、ドアの方へ身体を向けると私市とともに歩き出した。「そんなんおかしいやろ。友達殺して、幸せになんかなれるわけないやんか。絶対、絶対、後悔するで、いつか絶対後悔するからな！」「分からない人ね。あれは友達じゃないって言つたでしょ」

「でも、石井さんも川崎さんも、君のこと友達だと言つていたよ。嫌な奴ならお金積まれても一緒にいなつて、そう言つていた。少なくとも彼女たちは、君のこと友達だと思つていたよ」

「そんなの、嘘よ」

「おまえら、中学んときからずつと一緒におりたんぢやうんか。嘘かどうかくらい、ほんまは分かるやろ」

海の言葉に、静は背を向けて、小馬鹿にしたように肩をすくめてみせた。そのまま、静達の姿は見えなくなる。

海は、両脇に下ろした拳をきつこにぎり締めた。腕が震える程、強く。

「なんでや。友達を邪魔つてなんやねん。命はそんな簡単なもんとちやうやろ？　それが、何で分からへんねん」

海の弱々しく響いた言葉は、灰色の空へ吸い込まれて消えた。



## ヒローゲ

青空に白い雲が浮かんでいる。明るい日差しの下。広い海面が太陽の光を反射させ、きらめいていた。吹き抜ける風には潮の匂いが混じっている。

この辺りに住む人々には『海の公園』と呼ばれるこの場所は、海岸線に沿うように縦に長く作られた公園である。

海と陸の境目にある柵に、半ば体当たりするように走り寄った空は、大きく息を吸い込んだ。

「おー、海だー！」

と、当たり前のことの大聲で叫んで、満悦である。  
夏休みも残り少なくなったこの日。

空と海、そして光は『宿題早く終わらせて遊びまくらう計画』のその一。海へ行こうを実行していたのだった。

当初の予定では海水浴へ行くことになっていたのだが、海と光の喧嘩に、事件が重なって、結局行く機会を逃してしまった。今はもう、クラゲだらけでとても泳げる状態ではない。

そこで泳ぐのは諦めて、空たちの住む町から一番近い、海の見える場所へ来たのである。

「気持ちええなあー」

海が空の横で、伸びをしている。

「ほんとだったら泳げたのになあ。おまえらが喧嘩するからあ  
空が恨めしげに海に目をやる。

「あ、はつはつは

何故か笑いながら、海は後ろ歩きで空から離れた。

空は、肩をすくめて彼から視線を離し、眼前に広がる大きな海にまた目を向けた。

光はそんな一人の背後に設けてあるベンチに座っていた。

「おまえも、もうちょいはしゃいだらええのに。空みたいに

海が光に気付いて走り寄ると、隣に腰かけてそんなことを言った。光は、拭いていた眼鏡をかけ直す。以前のノンフレームの眼鏡ではなく、予備の黒ぶち眼鏡のままだった。頭を殴られたときに、眼鏡を失くしてから、結局見つからずじまいだったのだ。

「あんな馬鹿みないことできないよ」

「それ、空に言つたらまた拗ねるからやめてや」

そう言つて、背もたれに身体を持たせかけた。上を向き、大きく息を吐きだす。

「どうした？」

光が、海の様子が気になつたのか、そんな風に尋ねた。  
あの事件に関わる少し前あたりから、海の様子がおかしかつたことには、光も気づいていたのだ。ただ、どうしていいか分からず、こじれてしまった。今はもう、仲直りできたけれども。

「なんかさ、色々あつたやん。石井さんも川崎さんも、それから桜田さんも。十数年しか生きてへんのに、簡単に命奪われてさ。まだやりたいこととか、一杯あつたやろうに。そんなん考えてるとさ。人は、何のために生まれてくるんやううとか、考えてもうてな」  
伊藤静の起こした事件が明るみに出た時。マスコミはこぞつてこの事件を取り上げた。だが、数日たつた今では別に起こった大きな事故が連日報道されている。あの事件が人々の記憶から忘れ去られるのも、時間の問題なのかもしれない。

そんなやるせない思いを、海は抱えていた。

「らしくなく感傷的だな。……人は何のために生まれてくるのか、か。僕も、前に考えたことがあるよ。結局答えは出なかつたけど」

光の言葉に、海は彼に顔を向け力なく笑つて見せた。

「何や。おまえでも無理か」

光は難しいよと、肩をすくめた。

「何だよ。そんなことで悩んでんの？」

二人に背を向け、海を眺めていたはずの空が、不意に声を上げて振り向いた。一人の会話がよく聞こえたものだ。光と海がそろつて

空に視線を向ける中、空は朗らかに笑つて言葉を紡ぐ。

「何のために生まれてくるのかつて？ そんなの決まつてるじゃん。人は、生きるために生まれてくるんだよ」

強く風が吹き、空の髪が大きくなびいた。彼の背後にある青い海が、太陽の光に照らされて、きらきらと輝いて見える。

「どんなに短くても、一生懸命生きるために生まれてくるんだろ」「光と海は、一度二度瞬きを繰り返した後、ゆっくりと顔を見合わせた。

そして、同時に噴き出した。

光は口元を押さえて控え目に笑い、その横で海は大笑いしている。

「え、な、何で笑つてんだよ！」

空は、失礼など頬を膨らませる。

「俺、間違つてねえだろ。他に何かあるつてのかよー。」

どうにか笑いを納めた海が、手を横に振った。

「いや、間違つてはないねんけどな。空らしいなーって思つてさ」「答えなら他にもあるだろ。子孫繁栄のため、とか？」

光がそう言つと、海が横で、身を引いた。

「うわつ。光ちゃんが言つとエッチ臭いわー」

「はあ？」

光が不機嫌に眉を寄せる。

「どこがだよ。つていうか光ちゃんはやめる」

「うわつ。冷たいー。海子悲しい」

よよよと、泣きまねをする海を見て、空は声を上げて笑い、光は微笑みを向ける。

空は、一人の座るベンチへ駆け寄ると、海の背を思い切り叩く。にっこりと口の端を上げ、彼の顔を覗きこんだ。

「おまえはやっぱ、そやつてボケてるのが一番いいよ」

そう言つて、空は海をおいて歩き出す。その横で、光が立ち上がつた。

「そうだな、おまえはそやつて馬鹿やつてるのが一番らじこよ

光もその言葉を残して、空を追った。

一人残された海は、呆然と、ゆっくり遠ざかっていく一人の背をしばらく見つめ、我に返って立ち上がった。

「こら、光！ 誰が馬鹿やねん。俺はアホでも馬鹿やないで！」

大きな声で、そう言って。海は走り出す。

この二人に、まだ、言えない過去がある。

だが、それを二人に話せるようになるのは、きっととう遠くない未来だろう。

青い空。光る海。

明るく清々しいこの場所で、一人の背を追いながら。

海の胸にそんな予感が芽生えていた。

## Hピローグ（後書き）

「H」まで「J」覧いただき、本当にありがとうございました。

今回の第三十七話にあたるHピローグにて、この作品は最終話を迎えました。

いかがでしたでしょうか。

この作品は、『三兄弟の事件簿』の続編といつ形で描かせてもらつたものになります。もともと、続編を書くつもりはなかつた作品ではありましたがあが、読んでくださつた皆様から、ありがたいことに、また読みたいというお言葉をいただいて書かせてもらいました。自身の中でも、この三兄弟はまだまだ息づいており、もうじばり付き合つていきたいなと思つております。

前作同様、今作も、まだまだ拙く、色々と突込みビリも參かつたのではないでしょうか。自身の中でも、Hはもひょひどひつにかならなかつたのかと、色々と反省しております。

ミステリというジャンルには、あまり向いていないのは自覚しているものの、やっぱり好きなんですね。こういうジャンルも。私の書いてこるミステリはなんちゃつての域をませんけども（汗）

前作でも指摘の多かつた部分もまだまだ改善できていませんし（泣）やっぱり、すぐに犯人が分かつてしまふんでしょうね。きっと今回も早い段階で、あ、もうこの時点で犯人分かる人には丸わかりだなど、思つちやつたり。。。まあ、でも、こいつが犯人だ。やっぱりなあ。そうだと思ったんだよ。なんて、いうのも楽しかつたりするので（自分が読んでいるとき）それもありかななんて思つていま

す。もつと、こつた推理ものとか書いてみたいんですけども、まだ遠いですね。

二兄弟の続編をどうするか、一応お一方から読みたいとお声をいただいたので書いてみたいと思っておりますが、もしまで続きを読みたいと思つてくださった方がいらしたら、執筆する上で励みになると思いますので、ちょこつと教えていただければ嬉しいです。

感想、評価もお待ちしております。厳しい評価ももちろん歓迎しております。皆様が、この長い作品にお付き合っていただき、どう感じてくださいたのか。作者としても気になるところなのですよね。

今作は4月の13日に連載を開始しましたので、最初の方から読んでくださった方（いらっしゃるかは分かりませんが）もう力月近くお付き合ってくださったところです。すばらしいなあ。本当に、本当にありがとうございます。

読んでくださる皆様がいることで、連載も続けてこられましたし、勇気づけられました。本当に、何度も言いますが、ありがとうございます。

キャラクター投票なんてことも、初めてやってみましたし。一応、当初の予定通り、2010年11月23日までは投票できるようになりますので、それ以降に、ブログの方で、結果発表をしたいと思つております。それまでも、完結記念で、色々二兄弟を使って遊べたらと思つておつます。

最後になりましたが、この長い作品、お付き合ってくださり本当にありがとうございました。

名残惜しいですがこの辺で。

それではまた。いつか、どこかでお会いできるようと願つて。

愛田美月でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8738k/>

---

三兄弟の事件簿2 ~あの世からのメール~

2010年11月9日18時40分発行